秋田県文化財調査報告書第195集

高速交通関連道路整備事業(和田御所野)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

―― 上祭沢遺跡・駒坂台Ⅰ遺跡・駒坂台Ⅱ遺跡 ――

秋田県埋蔵文化財センター

1990・3

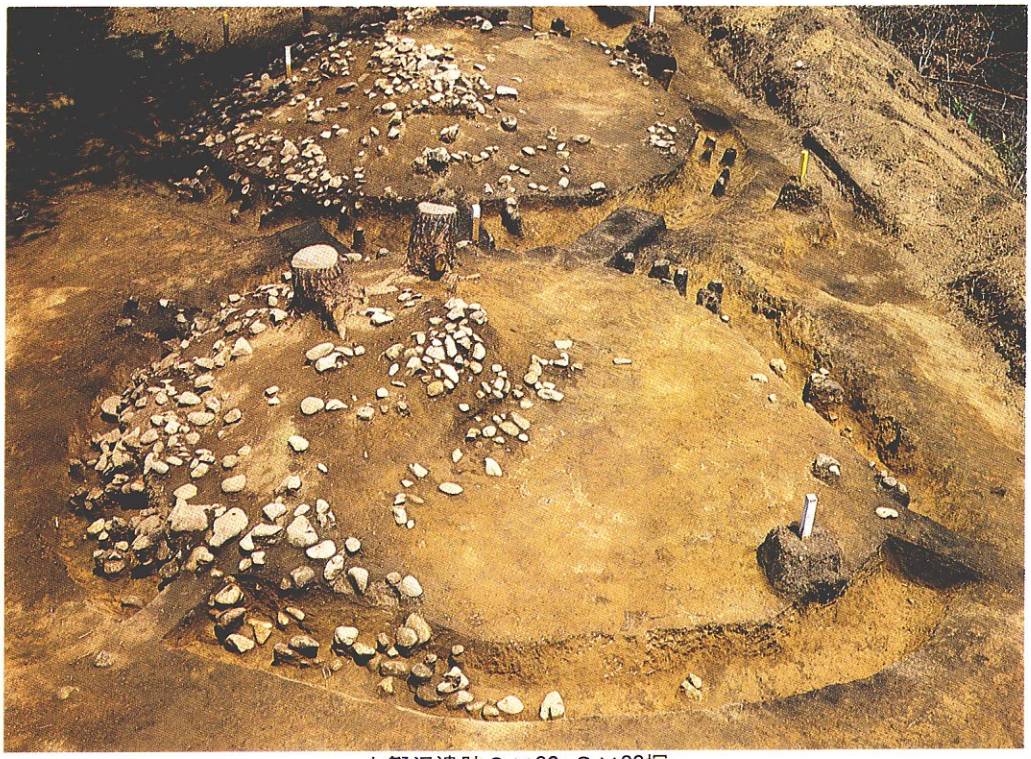
秋田県教育委員会

高速交通関連道路整備事業(和田御所野)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

―― 上祭沢(かみまつりざわ)遺跡・駒坂台(こまざかだい)Ⅰ遺跡・駒坂台(こまざかだい)Ⅱ遺跡 ――

1990・3

秋田県教育委員会



上祭沢遺跡S×02・S×03塚

上祭沢遺跡縄紋時代早期の土器出土状態

序

秋田市およびその隣接地域は、昭和56年の新秋田空港の開港、59年からの七曲工業団地建設、61年からの東北横断自動車道秋田線の着工など高速交通関連ならびに地域振興の開発が数多く計画・実施されております。

県教育委員会ではこうした開発に対応して、開発地域内の埋蔵文化財事前発掘調査を実施してまいりました。このたびの河辺町の上祭沢遺跡、駒坂台Ⅰ遺跡、駒坂台Ⅱ遺跡での調査も高速交通関連道路整備事業(和田御所野)にかかる埋蔵文化財の事前発掘調査として行ったものです。調査の結果、上祭沢遺跡では中世墳墓あるいは経塚と目される2基の塚をはじめとして、縄紋時代早期から弥生時代にかけての遺構・遺物が検出され、また、駒坂台Ⅰ・駒坂台Ⅱ遺跡では縄紋時代後期前葉を中心とする時期の組石遺構などが検出されました。

今回の調査成果は、これまで発掘調査された河辺町七曲台地、秋田市御所野台地上など岩見川下流域における縄紋時代から中世にかけての遺跡群を考えるうえで参考資料となるものと考えられます。本書が考古学上のみならず広く県民の方々にも研究上の資料として活用され、文化財保護に役立てれば幸いと存じます。

最後になりましたが本書を上梓するにあたり、調査にご便宜いただいた県土木部秋田土木事務所、河辺町教育委員会に対し深く感謝申し上げる次第です。

平成２年３月１日

秋田県教育委員会

教育長　　橋本　顕信

例　　言

1　本報告書は、高速交通関連道路整備事業(和田御所野)に係る埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2　本報告書の執筆は、秋田県埋蔵文化財センター文化財主事小林克が行った。

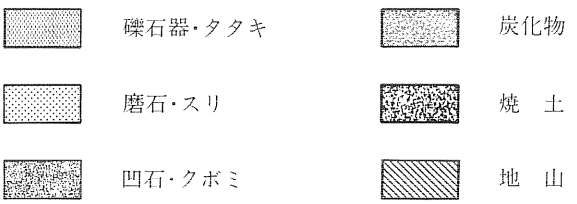
3　本報告書所載の^{14}C年代測定は、学習院大学年代測定室に依頼した結果報告である。

4　本報告書挿図中に使用した土色表記法は、農林省農林水産技術会議事務局、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』に拠った。

5　本報告書に使用した遺跡位置図は建設省国土地理院発行の50,000分の1地形図である。

6　石器石質については秋田県立博物館、佐々木厚学芸主事の鑑定をいただいた。

7　挿図に使用したスクリーントーンの凡例は以下のとおりである。



目　　次

巻頭図版

序

例言

目次

挿図目次

図版目次

はじめに …… 1

調査に至る経過 …… 1

調査の組織と構成 …… 1

立地と環境 …… 2

遺跡の位置と立地 …… 2

歴史的環境 …… 2

^{14}C 年代測定結果報告書 …… 6

調査の概略 …… 7

調査の方法 …… 7

調査の経過 …… 8

上祭沢遺跡

第１章　調査の記録 ……13

第１節　遺跡及び調査区の地形・層位 ……13

第２節　検出遺構と遺物 ……16

第２章　まとめ ……50

第１節　縄紋時代早期の土器について ……50

第２節　中世の遺構と遺物について ……52

駒坂台Ⅰ遺跡・駒坂台Ⅱ遺跡

第１章　調査の記録 ……60

第１節　遺跡及び調査区の地形・層位 ……60

第２節　検出遺構と遺物 ……60

第２章　まとめ ……75

図版1～図版22

挿図目次

第１図　遺跡位置および周辺地形…… 3
上祭沢遺跡
第２図　調査前地形測量図……13
第３図　遺構配置図……14
第４図　遺跡基本層位（ＬＩライン）……15
第５図　ＳＩ06竪穴住居跡……16
第６図　ＳＩ06竪穴住居跡出土土器……17
第７図　ＳＩ06竪穴住居跡・ＳＫ05・ＳＫ12
土坑出土石器……18
第８図　ＳＫ04・ＳＫ12・ＳＫ30土坑……19
第９図　ＳＫ09・ＳＫ11土坑……22
第10図　ＳＫ35・ＳＫ31・ＳＫ16土坑……23
第11図　ＳＫ10・ＳＫ05・ＳＫ13・ＳＫ14・
ＳＫ20土坑……24
第12図　土坑内出土土器（１）……26
第13図　土坑内出土土器（２）……27
第14図　ＳＫ21・ＳＫ17・ＳＫ19・ＳＫ15・
ＳＫ18土坑……29
第15図　ＳＫ32・ＳＫ33・ＳＫ34土坑、ＳＫ29
炭焼窯……30
第16図　ＳＸ03塚出土土器および周辺採集資料32
第17図　ＳＸ02・ＳＸ03塚全体図……33・34
第18図　ＳＸ02塚基底平面および土層断面35・36
第19図　ＳＸ03塚基底平面および土層断面37・38
第20図　遺構外出土土器（１）……40
第21図　遺構外出土土器（２）……41
第22図　遺構外出土土器（３）……43
第23図　遺構外出土土器（４）……44
第24図　遺構外出土石器（１）……46
第25図　遺構外出土石器（２）……47
第26図　遺構外出土石器（３）……48
駒坂台Ⅰ遺跡・駒坂台Ⅱ遺跡
第27図　駒坂台Ⅰ遺跡・駒坂台Ⅱ遺跡周辺地形
およびグリッド配置図……57
第28図　駒坂台Ⅰ遺跡基本層位……58
第29図　駒坂台Ⅰ遺跡基本層位……59
第30図　駒坂台Ⅰ遺跡ＳＫ01土坑……60
第31図　駒坂台Ⅱ遺跡ＳＱ01石組炉、ＳＱ02組石
遺構および出土土器……62
第32図　駒坂台Ⅰ遺跡遺構外出土土器……63
第33図　駒坂台Ⅰ遺跡遺構外出土石器（１）…64
第34図　駒坂台Ⅰ遺跡遺構外出土石器（２）…65
第35図　駒坂台Ⅱ遺跡遺構外出土土器……67
第36図　駒坂台Ⅱ遺跡遺構外出土石器（１）…69
第37図　駒坂台Ⅱ遺跡遺構外出土石器（２）…70
第38図　駒坂台Ⅱ遺跡遺構外出土石器（３）…71
第39図　駒坂台Ⅱ遺跡遺構外出土石器（４）…74

図版目次

上祭沢遺跡
図版１　１ 調査前全景（東→西）
２ 調査前全景（南→北）
３ LI47～49基本層位（西→東）
図版２　１ LH45区、LH46区土器出土状態
２ LH49区土器出土状態
３ SI06竪穴住居跡
図版３　１ SK04土坑　２ SK30土坑
３ SK09、SK11土坑
図版４　１ SK35土坑　２ SK31土坑
３ SK16土坑　４ SK10土坑
５ SK05土坑　６ SK13、SK14土坑
７ SK15土坑　８ SK29炭焼窯
図版５　１ SX02、SX03塚確認状態（南→北）
２ SX02、SX03塚確認状態（北→南）
３ SX02塚中央部礫集積状態
図版６　１ SX03塚中央部礫集積状態
２ SX02塚礫敷設状況（西→東）
３ SX02塚盛土断面（南東→北西）
図版７　１ SX03塚盛土断面（南西→北東）
２ SX02、SX03塚完掘状態（南→北）
３ 調査後全景（南→北）
図版８　遺構内出土遺物（１）
図版９　遺構内出土遺物（２）
図版10　遺構内出土遺物（３）
図版11　遺構外出土土器（１）
図版12　遺構外出土土器（２）
図版13　遺構外出土土器（３）
図版14　遺構外出土石器（１）
図版15　遺構外出土石器（２）
図版16　出土土器部分
駒坂台Ⅰ・Ⅱ遺跡
図版17　駒坂台Ⅱ遺跡遺構内出土土器・
駒坂台Ⅰ遺跡遺構外出土遺物
図版18　駒坂台Ⅱ遺跡遺構外出土土器
図版19　駒坂台Ⅱ遺跡遺構外出土石器（１）
図版20　駒坂台Ⅱ遺跡遺構外出土石器（２）
図版21　１ 駒坂台Ⅰ遺跡調査後全景（北→南）
２ 駒坂台Ⅱ遺跡調査後全景（北→南）
３ 駒坂台Ⅰ遺跡SK01土坑
図版22　１ 駒坂台Ⅱ遺跡SQ01石組炉
２ 駒坂台Ⅱ遺跡SQ01石組炉断面（西→東）
３ 駒坂台Ⅱ遺跡SQ02組石遺構

はじめに

調査に至る経過

「高速交通関連道路整備事業（和田御所野）」は、秋田市御所野地区から河辺町和田地区にかけて計画された七曲工業団地へのアクセス道路建設事業である。昭和61年に実施された七曲台での東北横断自動車道秋田線にかかる埋蔵文化財発掘調査の折り、この計画が県土木部から文化課に伝達され、計画路線に沿った地域での分布調査、範囲確認調査が行われた。その結果、河辺町戸島字石坂台から同字上祭沢までの区間内に５カ所の遺跡が確認されたが、うち２カ所の遺跡については工事と並行して立ち会い調査が実施され、本調査に至らずに終了している。今回の発掘調査に係った遺跡はこの５カ所のうち、立ち会い調査を終了した２遺跡を除く３遺跡であり、字名をもって上祭沢遺跡、駒坂台Ⅰ遺跡、駒坂台Ⅱ遺跡と呼称している。

調査の組織と構成

所在地　　上祭沢遺跡：河辺郡河辺町戸島字上祭沢38番地、 上野3番地
駒坂台Ⅰ遺跡：河辺郡河辺町戸島字北ノ沢83番地外
駒坂台Ⅱ遺跡：河辺郡河辺町戸島字北ノ沢80番地外

調査期間　　平成元年5月8日～7月14日

調査面積　　上祭沢遺跡　：690㎡
駒坂台Ⅰ遺跡：1,590㎡　駒坂台Ⅱ遺跡：880㎡

調査主体者　　秋田県教育委員会

調査担当者　　小林　克（秋田県埋蔵文化財センター文化財主事）
吉田　真（　〃　非常勤職員）

調査総務担当者　佐田　茂　（秋田県埋蔵文化財センター主査）
高橋 忠太郎（秋田県埋蔵文化財センター主事）

調査協力機関　秋田県土木部秋田土木事務所　河辺町教育委員会

立地と環境

遺跡の位置と立地

上祭沢遺跡は、ＪＲ奥羽線羽後和田駅の南西3kmの台地上に位置する。

遺跡の載る台地は北北西に突き出た“馬の背”状の台地であり、標高は61mを測る。遺跡の北1.8kmには岩見川が西流するが、台地はこの岩見川左岸に形成された河岸段丘群のうち、低位から数えて３番目の椿台面Ⅱ(註１)の縁辺にあたる。椿台面Ⅱには幾つかの小谷が入り、その下位の上野台面(註２)に向かって開析されているが、ちょうど戸島集落の真南が遺跡のある地点である。上祭沢遺跡を含む台地周辺は、平成元年３月まで、旧秋田県林業センター付属の自然観察園、林木育種場として利用され、スギ、アカマツ、コナラ、クリなどの針・広葉樹のほか、ヤマツツジ、タニウツギ等の灌木など多種多彩な樹木が植栽されている。

駒坂台Ⅰ遺跡、駒坂台Ⅱ遺跡は、上祭沢遺跡の東0.75km、ＪＲ羽後和田駅の南2.5kmにある。遺跡の立地する台地は標高47～48mを測り、岩見川左岸の段丘群の中では低位から２番目の上野台面に相当する。岩見川の左岸には段丘群の中で最低位の七曲台があるが、駒坂台Ⅰ遺跡、駒坂台Ⅱ遺跡の位置は、白熊沢川を隔てて七曲台に隣合う台地の北西端にあたり、北西側から開析する小支谷に区切られた舌状台地上である。遺跡の周辺は一部が畑地として利用されているほかは大半が山林である。

歴史的環境

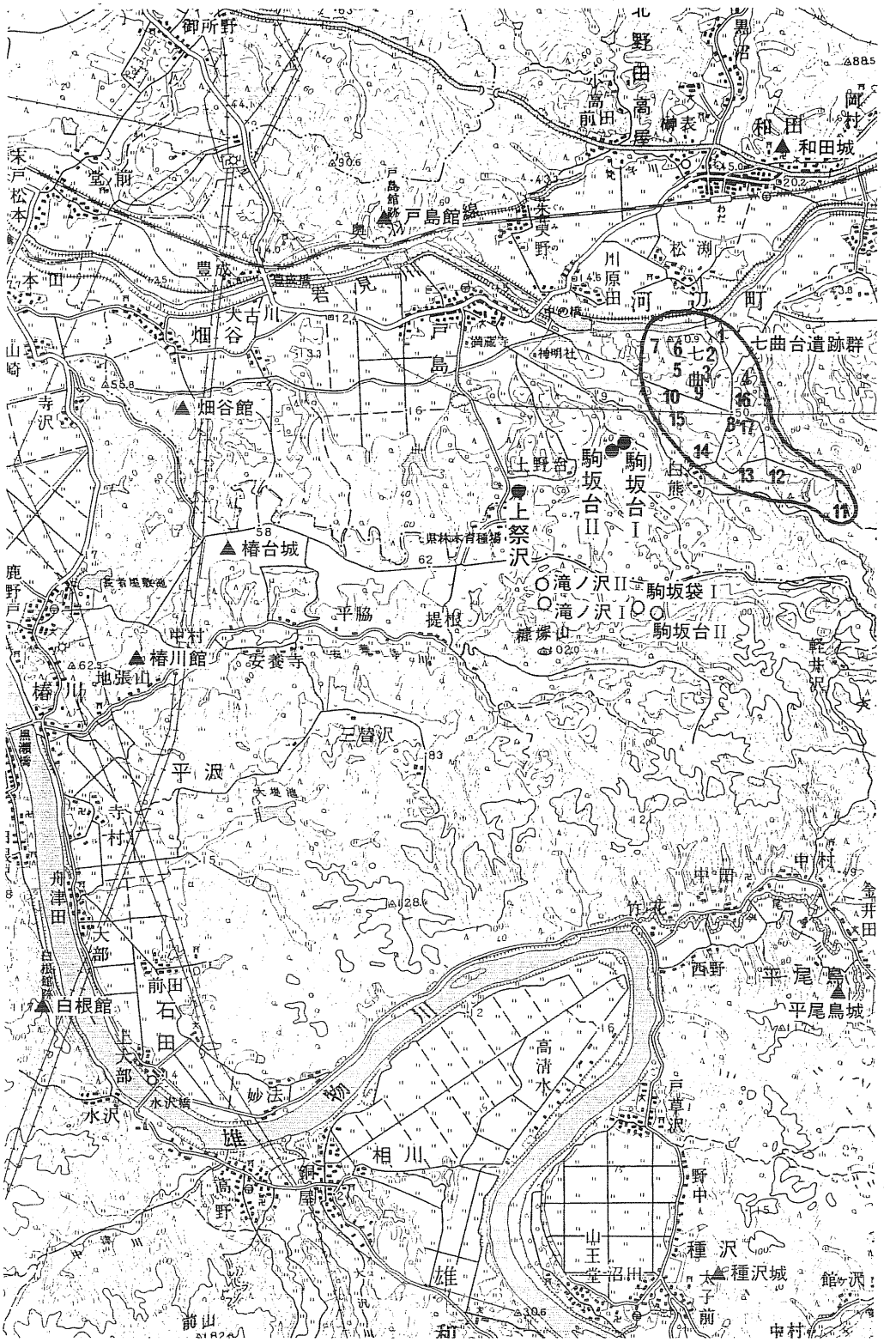
これまで河辺町および雄和町では、県立中央公園、東北横断自動車道、七曲工業団地の造成計画に伴って埋蔵文化財の発掘調査が実施されてきている。県立中央公園造成計画についての調査は昭和56年(註３)に、七曲工業団地については昭和58年、59年(註４)に、東北横断自動車道については昭和61年(註５)に行われている。この三度にわたる調査で計22遺跡が発掘されたが、これらの遺跡のうち18遺跡は駒坂台Ⅰ・Ⅱ遺跡から北東に0.6kmほど離れ、およそ60haほどの面積をもつ七曲台地上に位置し(表1)、他の4遺跡、駒坂袋Ⅰ遺跡、駒坂袋Ⅱ遺跡、滝ノ沢Ⅰ遺跡、滝ノ沢Ⅱ遺跡は駒坂台Ⅰ・Ⅱ遺跡から南に1.2kmほど離れた雄和町椿川地区に所在する。

旧石器時代の遺跡には台形様石器を出土した風無台Ⅱ遺跡、松木台Ⅱ遺跡、ナイフ形石器を出土した風無台Ⅰ遺跡、松木

第１表　七曲台上の遺跡

番号	遺跡名	時代	文献
1	風無台Ⅰ	旧石器時代～古代	1
2	風無台Ⅱ	旧石器時代～弥生時代	1
3	風無台Ⅲ	縄紋時代	1
4	風無台Ⅴ	縄紋時代	1
5	松木台Ⅰ	縄紋時代～弥生時代	1
6	松木台Ⅱ	旧石器時代・縄紋時代・古代	1
7	松木台Ⅲ	旧石器時代・縄紋時代・古代	2
8	石坂台Ⅰ	縄紋時代・弥生時代	1
9	石坂台Ⅱ	縄紋時代・弥生時代	1
10	石坂台Ⅲ	縄紋時代	1
11	石坂台Ⅳ	縄紋時代・近代	2
12	石坂台Ⅵ	縄紋時代・弥生時代	2
13	石坂台Ⅶ	縄紋時代・弥生時代	2
14	石坂台Ⅷ	縄紋時代・弥生時代	2
15	石坂台Ⅸ	縄紋時代	2
16	餅田沢Ⅰ	縄紋時代	1
17	餅田沢Ⅱ	縄紋時代	1
18	風無台Ⅳ	縄紋時代	1

文献欄　1：七曲台遺跡群発掘調査報告書
2：東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書



第1図　遺跡位置および周辺地形（1：50,000）

台Ⅲ遺跡、石刃・掻器を出土した駒坂袋Ⅰ遺跡がある。

縄紋時代の遺跡としては、石坂台Ⅰ遺跡で前期初頭～前葉のループ紋、爪形紋の施された土器が出土している外、風無台Ⅰ遺跡では木目状撚糸紋の施された円筒下層d式土器を土壙内から検出している。これらが七曲台地上および周辺地域での縄紋時代の資料として古い段階の例である。また駒坂袋Ⅰ遺跡では前期中葉の深鉢形土器１個体、滝ノ沢Ⅰ遺跡では円筒下層d式土器が出土している。しかし、いずれも断片的あるいは単独出土のもので、この時期の周辺遺跡群の様相はいまひとつ不明確である。縄紋時代中期前葉から中葉にかけては風無台Ⅰ遺跡で2軒(円筒上層a式期、大木8a式期)、石坂台Ⅰ遺跡で1軒(大木8a式期)、石坂台Ⅱ遺跡で1軒(大木8b式期)の竪穴住居跡の外、石坂台Ⅲ遺跡では大木8a式の埋設土器が検出されている。また、石坂台Ⅸ遺跡ではごく小片ながら円筒上層c式、d式土器の破片が出土している。中期後葉には、松木台Ⅲ遺跡で大木9式の古い段階の土器がTピット内、フラスコ状土坑内から出土している。また次の大木9式の新しい段階の土器の時期になると、石坂台Ⅸ遺跡で3軒の竪穴住居跡が検出されており、また駒坂袋Ⅰ遺跡で2軒の竪穴住居跡が検出されている。続いて大木9－10中間式の段階には石坂台Ⅰ遺跡で3軒、石坂台Ⅷ遺跡で2軒、餅田沢遺跡で3軒、松木台Ⅲ遺跡で3軒の竪穴住居跡が、さらに大木10式期には、風無台Ⅰ遺跡で2軒の竪穴住居跡が検出されている。(註6)
縄紋時代後期初頭から前葉にかけては石坂台Ⅷ遺跡で住居跡１軒が、石坂台Ⅸ遺跡、風無台Ⅰ遺跡でそれぞれ土坑１基が、また駒坂袋Ⅰ遺跡でも土坑1基が検出されている。後期中葉から末葉にかけての遺構を検出した遺跡は七曲台遺跡群、椿川地区の遺跡群とも存在せず、わずかに石坂台Ⅸ遺跡で後期末葉の破片資料が2片出土しているのみである。縄紋時代晩期には再びいくつかの遺跡が確認されている。風無台Ⅰ遺跡、風無台Ⅱ遺跡、松木台Ⅱ遺跡、松木台Ⅲ遺跡、餅田沢Ⅱ遺跡、石坂台Ⅲ遺跡、石坂台Ⅶ遺跡、石坂台Ⅷ遺跡、駒坂袋Ⅱ遺跡などである。風無台Ⅱ遺跡では住居跡1軒が、松木台Ⅱ遺跡、松木台Ⅲ遺跡では土壙墓群が検出されているが、これらは晩期前～中葉の遺跡である。また石坂台Ⅶ遺跡、石坂台Ⅷ遺跡でも貯蔵穴と考えられるフラスコ状土坑が検出されているがこれらは後～末葉の遺跡である。また、駒坂袋Ⅱ遺跡でも晩期前葉の住居跡1軒と土坑3基が検出されている。

弥生時代の遺跡では竪穴住居跡1軒を検出した風無台Ⅰ遺跡がある。しかし、この竪穴住居跡の時期は縄紋時代晩期終末から連続すると考えられ、七曲台の利用という観点からは前述の石坂台Ⅶ遺跡や石坂台Ⅷ遺跡とともに一時期を画する。その後、弥生時代中期から後期にかけては不明な点も多いが、刷毛目地に平行沈線紋を施した土器や、細く鋭い沈線によって施紋した土器、撚糸紋あるいは附加条縄紋を施紋した土器などが出土する遺跡として、風無台Ⅰ遺跡、風無台Ⅱ遺跡、松木台Ⅰ遺跡、石坂台Ⅰ遺跡、石坂台Ⅲ遺跡、石坂台Ⅵ遺跡、石坂台Ⅷ遺跡がある。これらの遺跡のうち、風無台Ⅰ遺跡では3基、石坂台Ⅲ遺跡では1基の土坑が検出されて

いる。また、この時期に関連して北海道系の後北C2式土器が石坂台Ⅷ遺跡で出土している。

古代の遺跡は数少ないが、松木台Ⅱ遺跡で土壙墓が、松木台Ⅲ遺跡で1軒の竪穴住居跡、土坑群、焼土遺構などが検出されている。これらの遺構の時期は平安時代前半の9世紀中葉～後葉である。

雄物川下流域は、内陸仙北平野と秋田平野を結ぶ要衝の地であり、いくつかの中世城館がつくられている。安倍氏の残党である種沢太郎が館主と伝えられる種沢城が上祭沢遺跡の南南東6.25kmに、また源義経の残党、熊谷太郎の一族が興した伝えられる平尾鳥城が上祭沢遺跡の南東4.5kmにある。伝承ではあるが、この2館は館主のわかる城館として、この地域での古い例にあたる。また、鎌倉御家人畠山重忠の流れを汲み、中世末期湊安東氏と対峙して威勢を誇った豊島玄蕃（畠山重村）の居館、戸島館は上祭沢遺跡の北北西4kmの岩見川右岸に位置する。種沢城、平尾鳥城とも豊島玄蕃によって落とされたと伝えられ、この豊島氏は庄内大宝寺氏、由利仁賀保氏などとも結び、秋田沿岸部と内陸部との連絡路を長く押さえていたようである。しかし、その豊島氏も百佐段（現在の秋田市新屋）側から内陸部への進入をはかって豊岩に白華城を構えた安東氏により由利との連絡を断たれて滅び、戸島館の館主も安東氏一族から湊合戦（天正十七年;1589）以後は羽川氏へとめまぐるしく交替したと伝えられる。他に雄物川沿いには湊安東氏支城であり石塚美濃守家次の在館した椿川館、おなじく安東氏一族の白根七郎昌吉の白根館がある。さらに近世佐竹氏の分家佐竹壱岐守義理の居城、椿台城が上祭沢遺跡の西2.5kmに所在する。

今回、調査された3遺跡のうち、上祭沢遺跡には河原石を葺いた塚4基があるが、これと似た遺跡が駒坂台Ⅰ・Ⅱ遺跡の北西3km、式田集落の東側台地上に存在する。そこには現在、長者森古墳群の標柱が立ち、河原石を積んだ直径1.5mの盛土が約27mの間に5基あるという(註7)。他に河辺町内には岩見三内に経塚あるいはその類似遺跡として、鍛冶屋敷経塚、飛沢上段遺跡(註8)が存在する。

註

註1　白石建雄「岩見川流域の河岸段丘群」『秋田大学教育学部研究紀要』26 1976(昭和51年)

註2　註1に同じ

註3　秋田県教育委員会「秋田県立中央公園スポーツゾーン地域内遺跡発掘調査報告書」1982(昭和57年)

註4　秋田県教育委員会「七曲台遺跡群発掘調査報告書」1985(昭和60年)

註5　秋田県教育委員会「東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書」1986(昭和61年)

註6　ここにあげた縄紋時代中期後葉の竪穴住居跡出土土器のうち幾つかは、報告書においては大木10式期として報告されている。しかし、ここでは秋田市御所野遺跡群の資料などにより裏付けられた大木9－10中間式を分離して記述している。

柳沢清一「東北中後期の編年」『古代』118 1989(平成元年)

〃　「「大木10式土器論」続考」『北奥古代文化』19 1989(平成元年)

秋田市教育委員会「秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書」1984(昭和59年)

註7　河辺町教育委員会「河辺町の遺跡」1987(昭和62年)

註8　註7文献では長者森古墳とされ、次の文献では経塚類似遺跡として記述されている。
奈良修介・豊島昂「秋田県の考古学」吉川弘文館 1967(昭和42年)

参考文献

秋田県教育委員会「秋田県の中世城館」1981(昭和56年)
冨樫泰時他「秋田県」『日本城郭大系』2 新人物往来社1980 昭和55年)
河辺町「河辺町史」1985 (昭和60年)
塩谷順耳編「中世の秋田」秋田魁新報社 1982(昭和57年)

学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書

1990年２月13日

秋田県埋蔵文化財センター殿

1989年12月20日受領致しました試料についての年代測定の結果を下記の通りご報告致します。

なお年代値の算出には^{14}Cの半減期としてＬＩＢＢＹの半減期5570年を使用しています。また付記した誤差はβ線の計数値の標準編差δに基づいて算出した年数で、標準編差（ＯＮＥ ＳＩＧＭＡ）に相当する年代です。また、試料のβ線計数率と自然計数率との差が２δ以下の時は、３δに相当する年代を下限の年代値（Ｂ．Ｐ．）として表示してあります。また試料のβ線計数率と現在の標準炭素（ＭＯＤＥＲＮ ＳＴＡＮＤＡＲＤ ＣＡＲＢＯＮ）についての計数率との差が２δ以下の時には、ＭＯＤＥＲＮと表示し、δ^{14}C％を付記してあります。

記

Ｃｏｄｅ Ｎｏ．	試料	年代（1950年よりの年数）
ＧａＫ－14466	Charcoal from 河辺町	4310±90
	5KMZ-SK12	2360 Ｂ．Ｃ．
ＧａＫ－14467	Charcoal from 河辺町	4150±120
	5KMZ-SI06	2200 Ｂ．Ｃ．

以上　木越邦彦

調査の概略

調査の方法

発掘調査は、各遺跡の調査区内にある計画路線中心杭のうちの1つを選び、それを基準点として磁北方向に基準線を設け、4m毎の方眼を設定するグリッド法によった。ただし、駒坂台Ⅰ遺跡、駒坂台Ⅱ遺跡については、調査区が近接しているため共通する1つの中心杭によって方眼を組んでいる。基準点となった中心杭は以下のとおりである。

上祭沢遺跡……ＮＯ.85＋15.5

駒坂台Ⅰ遺跡、駒坂台Ⅱ遺跡……ＮＯ.48

方眼の各交点には東西方向に東からＬＡ、ＬＢ、ＬＣ……ＬＪ、ＭＡ、ＭＢ、ＭＣ……ＭＪと連なるアルファベットの組み合わせをあて、南北方向には南から昇順となる2桁の数字をあてて、その組み合わせによって示される呼称のうち南東隅にあたるものをグリッド名とした。

発掘調査は上祭沢遺跡、駒坂台Ⅰ遺跡、駒坂台Ⅱ遺跡の3遺跡を並行して進めたが、駒坂台Ⅰ遺跡、駒坂台Ⅱ遺跡については、人力による表土除去の前に重機によって抜根、除土の作業を行っている。また、上祭沢遺跡については地表面で確認できる遺構が存在したため(ＳＸ02、ＳＸ03)、それらのレベル計測や調査区全体の地形測量を行っている。

検出された遺構には検出順に遺構種別を表す略号と遺構番号を付しているが、精査の過程で除かれ欠番となったものも存在する。遺構の精査は基本的に二分法によって覆土の観察を行いながら進めたが、竪穴住居跡など面的広がりをもつ遺構については適宜四分法を用いるなど観察可能なラインの数を増やしている。

精査された遺構については調査区内に打設した方眼杭を基準として簡易遣り方測量によって図面に記録した。図面縮尺は1/20を原則としたが、適宜1/10の縮尺での記録も行った。遺物の取り上げは方眼杭に付した区の名称と層位を記録した後行ったが、駒坂台Ⅰ遺跡、駒坂台Ⅱ遺跡出土の遺物については、標高とグリッド(区)内での位置を台帳に記録していった。

写真はゼンザブロニカＥＴＲＳ（6×4.5）とニコンＦ2を用い、調査現場では広角、標準の2種類のレンズで撮影した。フィルムはおもにモノクロ、カラー・リバーサルの2種類を用い、適宜ネガ・カラーフィルムでの撮影も加えている。フジ・ネオパンＳＳ、コダック・エクタクローム100、コダカラー100を用いた。遺物の撮影はニコンＦ2、マイクロ・ニッコール55㎜を用い、フィルムはフジ・ネオパンＦで撮影している。

調査の経過

発掘調査は平成元年5月8日から7月14日までの延べ55日間を費やして行われた。以下に日誌より抜粋して調査経過の概略を記す。

5月8日、調査開始。上祭沢遺跡の刈払い作業、調査前の写真撮影を行う。方眼杭打設作業を開始。駒坂台Ⅰ遺跡、駒坂台Ⅱ遺跡については重機による抜根、除土開始。5月9日、上祭沢遺跡の調査区縄張り、土留柵設置。方眼杭打設作業を終える。5月10日、上祭沢遺跡表土除去開始、併せて1/200地形図作成作業を行う。地形図作成作業に合わせて地表面で確認できる遺構に番号をつけるが、塚ＳＸ02、ＳＸ03は遊歩道によって東側を壊されていることを確認する。5月12日、上祭沢遺跡地形測量終了。駒坂台Ⅰ遺跡の抜根、除土を終了し方眼杭打設作業開始。5月15日、上祭沢遺跡表土除去作業継続、ＭＢ46区から頁岩製剝片1点が出土。駒坂台Ⅱ遺跡の抜根、除土を終了し方眼杭打設作業を行う。5月16日、上祭沢遺跡で縄紋土器出土し始める。5月17日、上祭沢遺跡の表土除去終了。ＬＩ49区で土坑プラン確認。5月18日、上祭沢遺跡ＳＸ02、ＳＸ03のレベル計測。調査区全域についての遺構確認作業開始。ＬＨ49区から縄紋土器1個体分が出土。5月19日、上祭沢遺跡ＳＸ03の切開開始。十字形に土層観察のためのベルトを設定して表土を取り除く。表土下10cm程で拳大の礫が多量に敷設されていることを確認。5月22日、上祭沢遺跡ＳＸ03切開作業継続。北東隅に敷設された礫の間から陶器片数片が出土。ＬＨ49区で検出した縄紋土器についての写真撮影、平面図作成。また、ＬＩラインでの遺跡基本層位図を作成。5月23日、上祭沢遺跡ＳＸ02についても切開作業を開始、礫敷設範囲を囲むように周溝の可能性ある黒色土プランを確認。ＬＩラインの基本層位図作成作業継続。5月24日、上祭沢遺跡ＳＸ03については表土の取り除きをほぼ完了。ＳＸ02については作業継続。周辺の精査作業中にＬＧ54区で石鏃1点が出土。ＬＩラインの基本層位図作成作業継続。ＬＨ49区の縄紋土器の平面図作成を終了し取り上げる。ＬＩ48区を中心として遺構確認作業。5基の土坑プランを確認。5月25日、上祭沢遺跡ＳＸ02の表土の取り除き作業継続。ＳＫ04、ＳＫ06、ＳＫ09の覆土掘り下げ作業を行う。5月29日、上祭沢遺跡ＳＸ02、ＳＸ03の平面図作成作業開始。駒坂台Ⅰ遺跡の表土除去開始。駒坂台Ⅱ遺跡に近い南端から除去を行う。5月26日、上祭沢遺跡ＳＸ02、ＳＸ03の清掃。ＬＨ46区で隆線貼付文のある土器片十数片が出土。5月30日、上祭沢遺跡ＳＸ02、ＳＸ03の平面図作成作業継続。ＳＫ09の南側で新たに土坑プラン確認（ＳＫ11）。駒坂台Ⅰ遺跡、ＭＢラインまで表土除去進む。5月31日、上祭沢遺跡ＳＫ04、ＳＫ05、ＳＫ10の完掘状態写真撮影。ＳＫ09、ＳＫ11については断面図を作成し、残り半分を掘り上げる。ＳＫ09坑底面から縄紋土器出土。駒坂台Ⅰ遺跡、ＭＧラインまでの遺構精査を行う。6月1日、上祭沢遺跡ＳＫ09、ＳＫ11については完掘、写真撮影を行う。駒坂台Ⅰ遺跡、ＭＦラインまでの表土除去を行う。調査区の中央付近で頁岩製剝片を採集。6月2日、上祭沢遺跡、新たに

3基の土坑プランを確認（ＳＫ12、ＳＫ15、ＳＫ16）。6月5日、上祭沢遺跡、ＳＫ12、ＳＫ15、ＳＫ16について土層断面図作成後、完掘。ＳＫ06、ＳＫ07は単一の遺構で竪穴住居跡であることが判明し、精査の結果、中央焼土近くにある土器は炉の埋設土器であることがわかった。精査の過程で多量の木炭が出土したため^{14}Ｃ年代測定試料として採取。駒坂台Ⅰ遺跡ではＭＥライン以東を調査区南側から表土除去する。6月6日、上祭沢遺跡で確認した竪穴住居跡（ＳＩ06と改称）の床面精査の結果、5カ所に柱穴を検出する。また、ＳＫ12の坑底部分から小形の磨製石斧が出土。ＳＸ02、ＳＸ03については平面図作成作業をほぼ終了し、再度写真撮影に備えて清掃する。6月8日、上祭沢遺跡、調査区南側から第Ⅳ層を掘り下げる。数点の剝片類を出土。ＳＸ02、ＳＸ03について写真撮影。駒坂台Ⅰ遺跡、ＬＩラインまでの表土除去を終える。6月9日、上祭沢遺跡、ＳＸ02、ＳＸ03に敷設された礫のレベル計測。6月12日、上祭沢遺跡、ＳＸ02、ＳＸ03の周溝内覆土を掘り上げ作業。6月13日、上祭沢遺跡、ＳＸ02、ＳＸ03の周溝内覆土をベルト部分を除いて掘り上げ、平面図に追加実測。駒坂台Ⅰ遺跡の調査区南端に置いた排土を調査区外に搬出する。6月14日、上祭沢遺跡、ＳＸ02、ＳＸ03の周溝掘り上げ後の写真撮影、写真撮影後、周溝覆土の断面写真撮影。6月15日、上祭沢遺跡、ＳＸ02、ＳＸ03の周溝土層断面図の作成。また、ＭＢ46区で伏焼きと思われる炭焼窯（ＳＫ29）を検出する。駒坂台Ⅰ遺跡の表土除去作業はほぼ終了。6月16日、上祭沢遺跡、ＳＸ02について上面の礫を除去し、清掃後写真撮影を行う。写真撮影後、盛土にベルトを設定し掘り下げる。駒坂台Ⅰ遺跡、調査区北側から遺構確認作業に入る。重機による根の引き抜き痕跡以外に遺構らしきプランは確認されていない。6月19日、駒坂台Ⅰ遺跡、遺構確認作業。遺構の確認はなく遺物も40点前後と極めて少ない。駒坂台Ⅱ遺跡、重機による表土除去後の遺物の表面採集を試みる。少量の縄紋土器片、篦状石器、剝片類が採集される。また、調査範囲外南側の緩斜面にトレンチを設定し調査する。調査区からの排土を捨て置くため事前の遺構・遺物の有無確認であるが、遺構・遺物とも確認されていない。6月20日、駒坂台Ⅱ遺跡、調査区の北東側から表土除去作業を開始する。6月21日、上祭沢遺跡、ＳＸ02の盛土土層断面の写真撮影。写真撮影後土層断面図の作成。ＳＸ03北側の礫の平面図作成作業、レベル計測。駒坂台Ⅱ遺跡、表土除去作業を進める。130点前後の出土遺物あり。6月22日、上祭沢遺跡、ＳＸ02の盛土断面の写真撮影。土層断面実測後、セクション・ベルトをはずし、基盤層面に掘り込みがないかどうかの観察を行う。駒坂台Ⅱ遺跡、ＬＪ52区で縄紋土器が出土。6月23日、上祭沢遺跡、ＳＸ02の基盤面清掃、写真撮影。撮影後、基盤面で確認した暗褐色土プランを掘り込む。ＳＸ03の覆土を掘り下げるため、ベルトを設定して上面の礫をはずす。駒坂台Ⅰ遺跡、伏焼の炭焼窯と思われるＳＫ01を検出し、覆土を掘り込む。木炭出土。断面の撮影、図化作業。駒坂台Ⅱ遺跡、表土除去作業継続。ＬＪ50区で石で囲った炉を検出（ＳＱ01）。6月26日、上祭沢遺跡、ＳＸ02基盤面の掘り込みの土

層断面写真撮影。駒坂台Ⅱ遺跡、調査区の南側に向かって表土除去作業を継続。駒坂台Ⅰ遺跡に面した調査区東側では表土層が厚く、基盤層は砂利層からなる。6月28日、上祭沢遺跡、ＳＸ02、ＳＸ03の盛土除去後の写真撮影のため、基盤面の清掃。ＳＸ03については、遺構よりも古い時期の柱穴状ピットが確認されているが、遺構に関連する掘り込みは認められない。駒坂台Ⅱ遺跡、調査区南際の表土除去。6月29日、上祭沢遺跡、ＳＸ02、ＳＸ03の盛土除去後の平面図作成作業。駒坂台Ⅱ遺跡、表土除去作業終了。午後、遺構確認作業。6月30日、上祭沢遺跡、ＳＸ02、ＳＸ03のレベル計測。駒坂台Ⅱ遺跡、遺構確認作業継続、ＬＨ48区、ＬＩ48区で組石遺構(ＳＱ02)検出。7月2日、上祭沢遺跡、調査区南側を幅4mで拡張する。縄紋時代後期の土器が出土。駒坂台Ⅰ遺跡、調査区全体についてレベル計測。駒坂台Ⅱ遺跡、組石遺構(ＳＱ02)の写真撮影、平面図作成作業。7月3日、上祭沢遺跡、調査区南側の拡張作業継続。駒坂台Ⅰ遺跡、基本土層観察のため、調査区の北壁にトレンチを設定。駒坂台Ⅱ遺跡、炉(ＳＱ01)、組石遺構(ＳＱ02)のプロフィール図作成。7月5日、駒坂台Ⅰ遺跡、基本土層の観察。調査区北壁の写真撮影、断面図作成。7月6日、上祭沢遺跡、ＳＸ02、ＳＸ03の基盤層をさらに掘り下げる。調査区南側44ライン区の遺構確認作業を行い、ＬＩ44区で4基の土坑を確認。駒坂台Ⅱ遺跡、調査区北西壁に基本土層観察のため、トレンチを設定する。7月7日、上祭沢遺跡、ＬＨ44区で検出した土坑を掘り込む。4基のうち2基はフラスコ状土坑であることが判明。駒坂台Ⅱ遺跡、調査区北西側のトレンチ土層断面を実測。7月10日、上祭沢遺跡調査後の全体写真を撮影する。撮影後、上祭沢遺跡側からの主な機材を撤収。駒坂台Ⅰ遺跡、50ライン、ＬＧ、ＬＩ、ＭＡ、ＭＣ、ＭＥラインに計6本のトレンチを設定し、基盤層面から約20cm程度の深さで掘り込む。出土遺物、検出遺構ともになし。7月11日、上祭沢遺跡、全体写真撮影のための清掃作業中にＬＧ50区で検出した土坑(ＳＫ35)を精査。鉢形土器出土。駒坂台Ⅰ遺跡、調査区の清掃を行い、午後、調査後全体写真撮影。駒坂台Ⅱ遺跡、調査区の清掃。7月12日、上祭沢遺跡、調査区外西側斜面下に土層観察のためのトレンチ設定。出土遺物、検出遺構ともになし。駒坂台Ⅱ遺跡、調査区の清掃。7月13日、上祭沢遺跡、ＳＫ35の断面図作成、写真撮影後、平面図作成。駒坂台Ⅱ遺跡、調査後の全体写真撮影。7月14日、機材の撤収作業を行い、調査を総て終了。

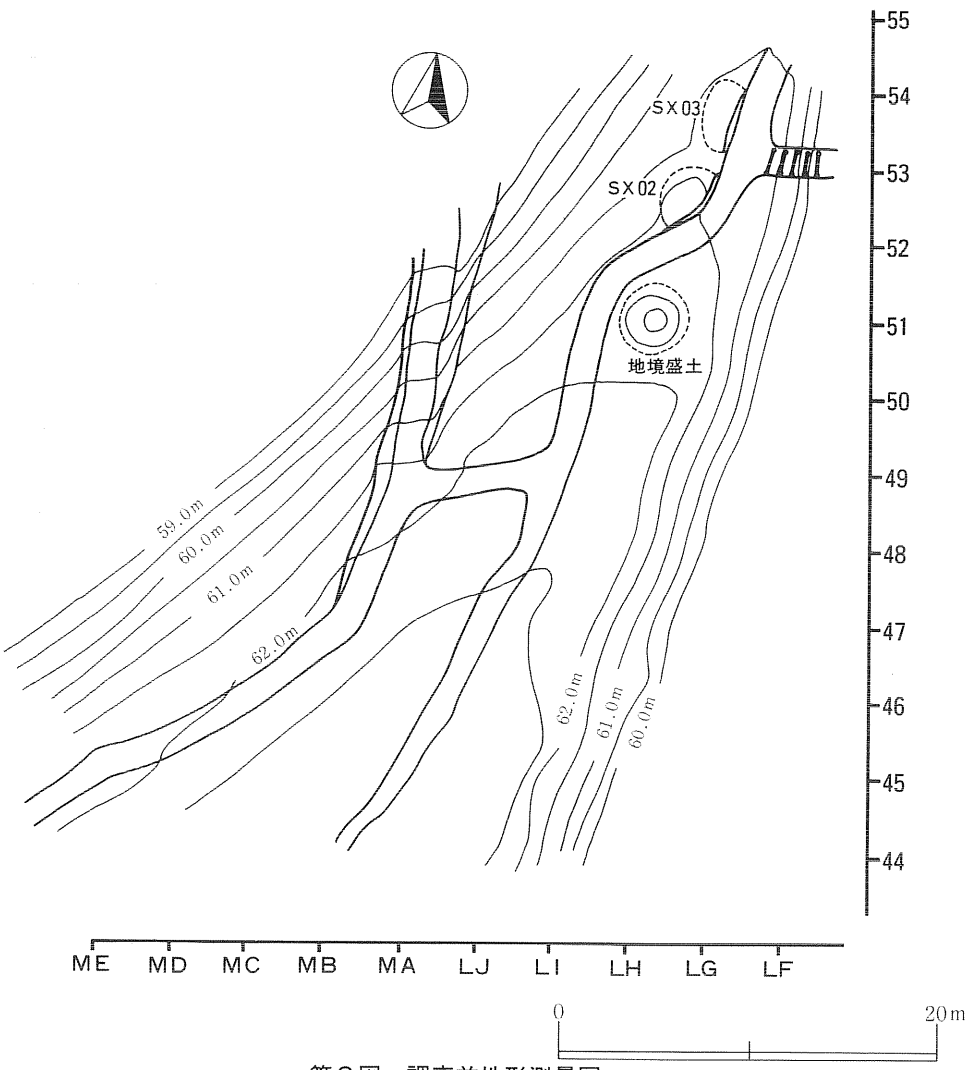
上 祭 沢 遺 跡

（５ＫＭＺ）

第１章　調査の記録

第１節　遺跡および調査区の地形・層位

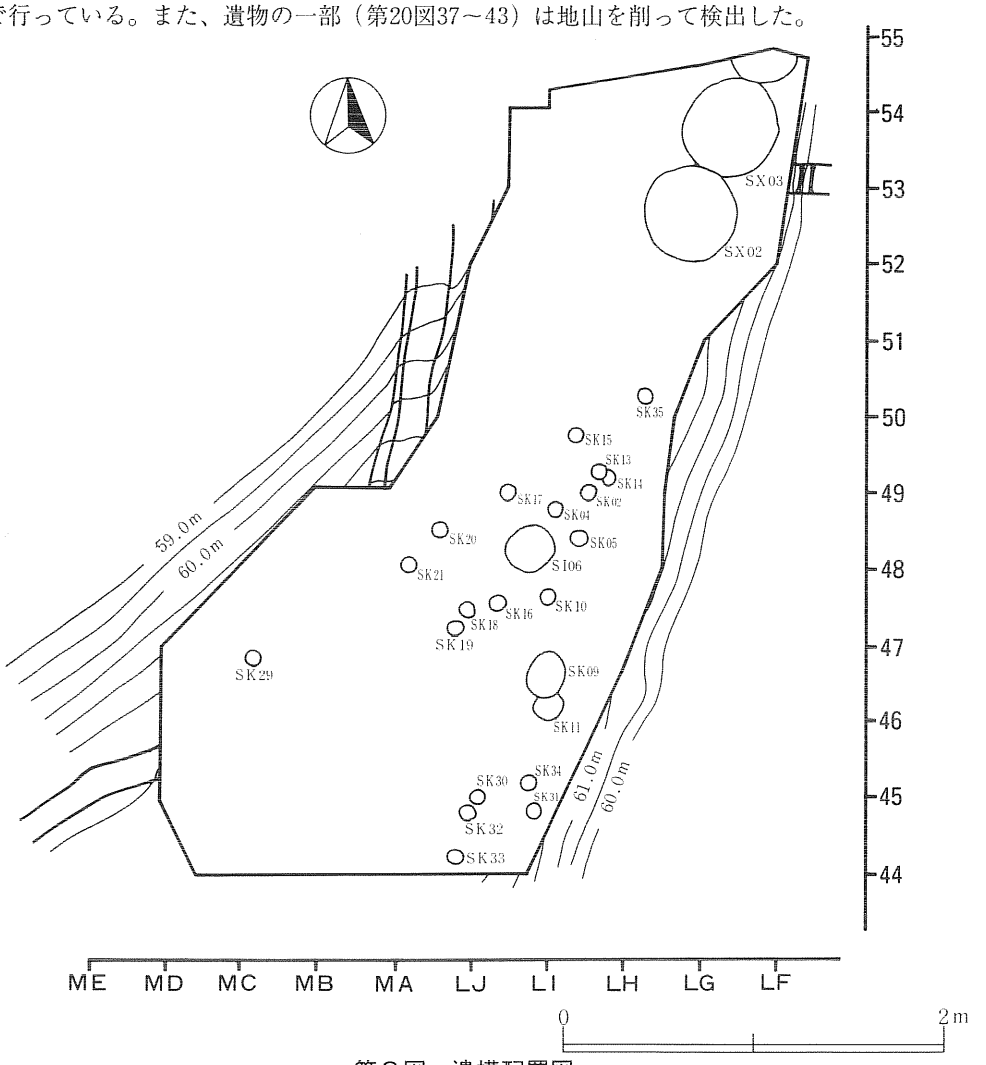
上祭沢遺跡の調査区は、上面幅10～20mで北に伸びる馬の背状の台地上に設定された。調査区上面はごく僅かに北に向かって傾斜しているものの概して平坦であり、標高は調査区南側で62.5m、北側で61.5mを測る。調査区の西側は斜度20度前後の斜面、東側は遺跡の立地する上野台面Ⅱを開析する谷に向かう斜度30度前後の急斜面となっている。遺跡付近は河辺町戸島地区の共同所有地で、平成元年3月まで秋田県が借り受け旧秋田県林業センター自然観察園として利用されていた。自然観察園内には幅1m前後の遊歩道が数本設けられている。その延長は調査



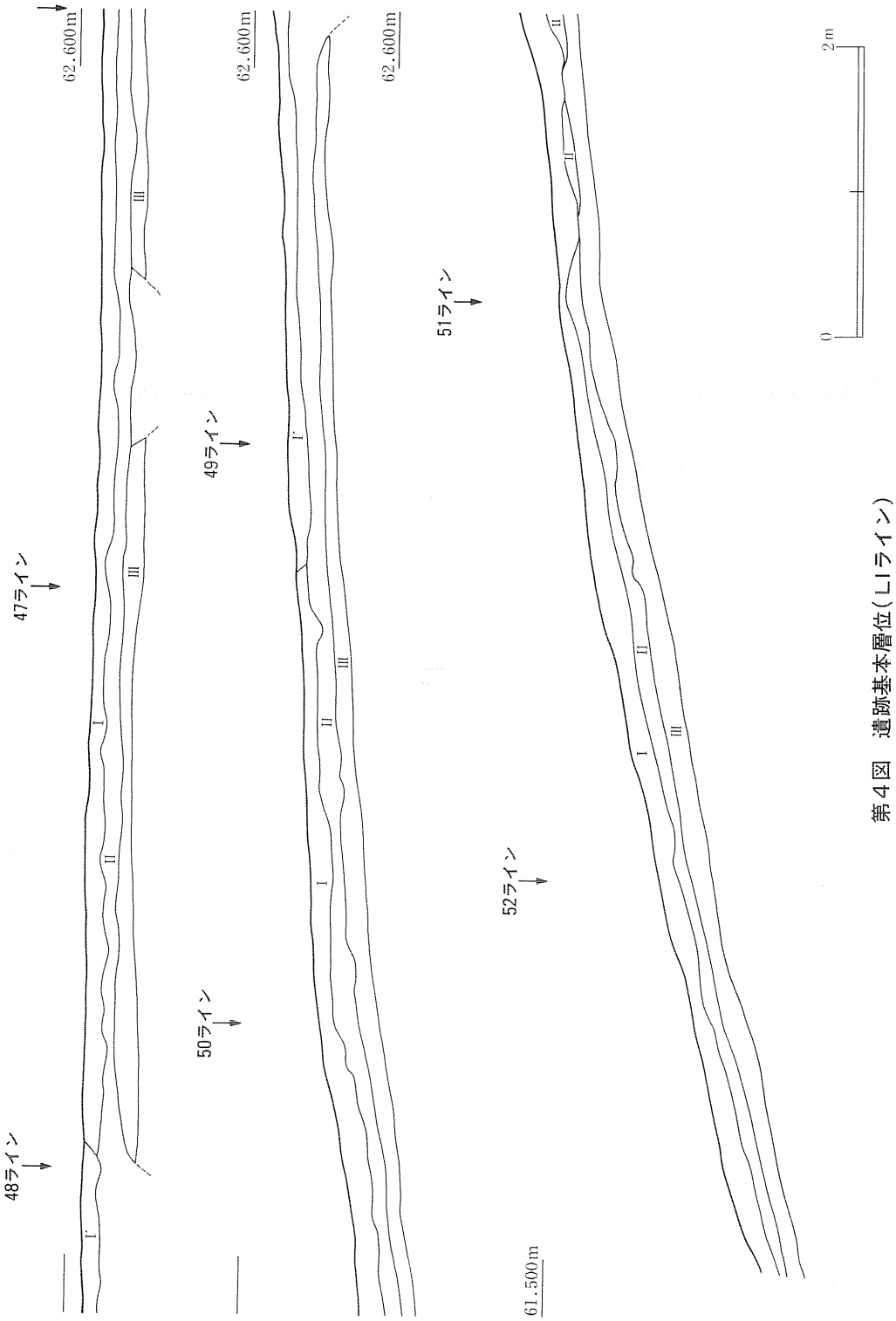
第２図　調査前地形測量図

区内にも及び、台地中央を縦断して北端で西側斜面を降りる1本と、西縁に沿って台地中央まで延びて西斜面を斜めに降りる1本とが存在する。昭和58年度の遺跡分布調査の際、この遊歩道のうち、台地中央から北端を巡る遊歩道の切り土面に集礫を伴う盛土が4基連なっているのがみつかった。今回の調査でＳＸ02、ＳＸ03として調査した塚はそのうち南側の2基である。また、調査区付近はちょうど河辺郡河辺町戸島地区と河辺郡雄和町椿川地区との接する箇所にあたり、かつてその地境に設けられた径1m、高さ1m程の盛土が調査区内にも存在する。

調査区内での層位は3層観察された。この3層は台地上面から斜面上部に亙って基本的に層厚、層相とも変わらない。Ⅰ層は表土層であり、遊歩道はこの表土層を削って砕石を敷いて造られている。Ⅱ層はやや明るい褐色土層であり、Ⅲ層は黒色～暗褐色に漸移する遺物包含層である。地山は褐色～黄褐色を呈する粘土層であり、ＳＸ02、ＳＸ03を除いた他の遺構の確認はこの上面で行っている。また、遺物の一部（第20図37～43）は地山を削って検出した。



第３図　遺構配置図



第4図　遺跡基本層位（L1ライン）

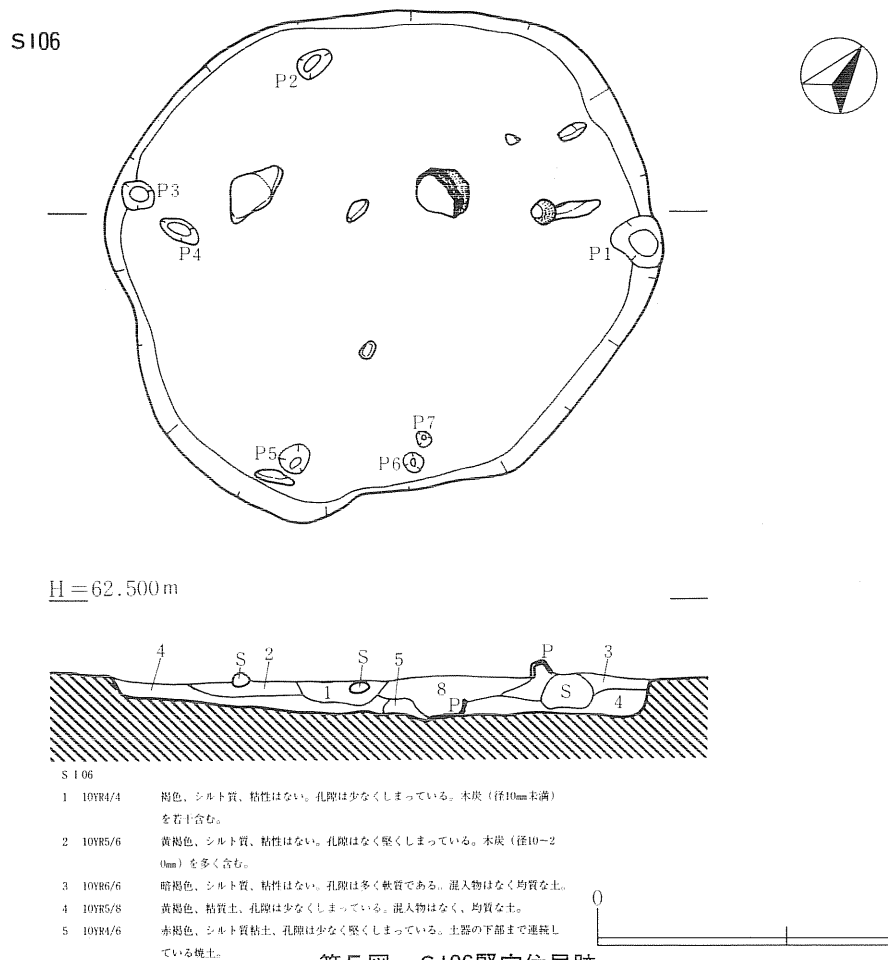
第２節　検出遺構と遺物

1)竪穴住居跡

ＳＩ06

調査区の中央南寄り、ＬＨ48区、ＬＩ48区で検出した。南北径2.9m、東西径2.7mの楕円形を呈し、確認面からの深さが中央部で0.3mを測る。

中央からやや北寄りに口縁～体部上半を欠失した深鉢形土器が体部を南側に傾けて斜めに埋め込まれており、周囲が赤く焼土化している。この深鉢形土器の北東側には、壁近くに2個の偏平な河原石が30cm程度の間隔をあけて立ててある。このうち、東側の1個にはやはり口縁～体部上半を欠いた鉢形土器がかぶさるように検出され、西側の礫からはやや離れて拳大の礫が検出された。深鉢形土器の位置と併せてみるときわめて簡略化した複式炉形態ともとれる。住居跡内にはほかに中央部、中央やや東寄りに拳大の、中央西寄りには38cm×22cmの、南側壁際には22cm×11cmの礫が置かれている。



ＳＩ06

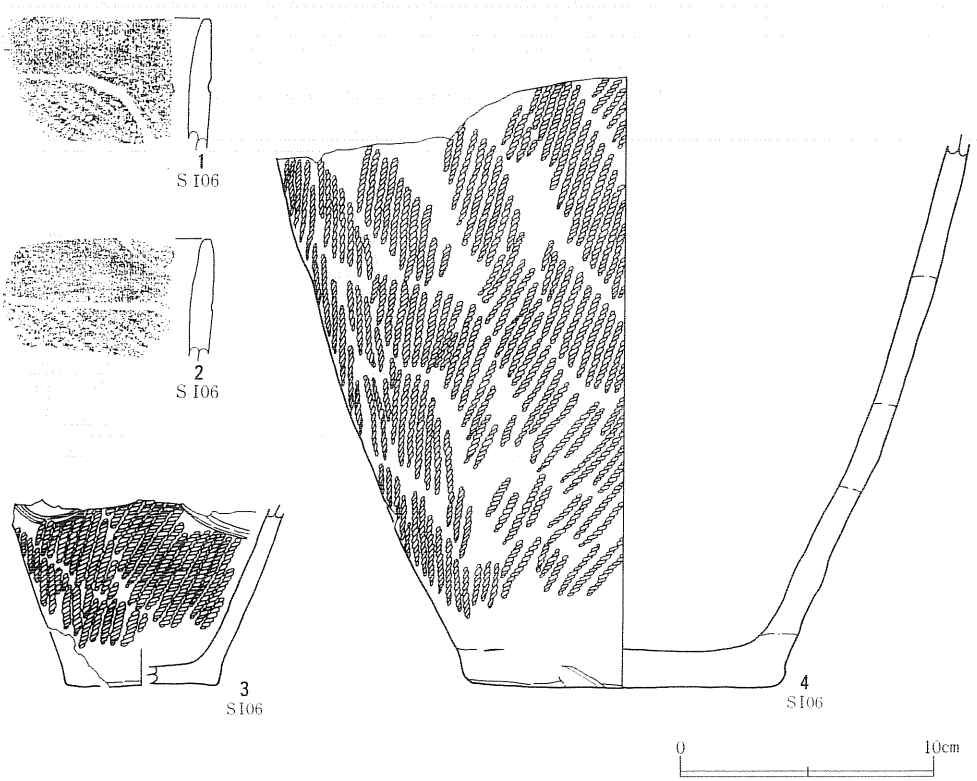
1	10YR4/4	褐色、シルト質、粘性はない。孔隙は少なくしまっている。木炭（径10mm未満）を若干含む。
2	10YR5/6	黄褐色、シルト質、粘性はない。孔隙はなく堅くしまっている。木炭（径10～20mm）を多く含む。
3	10YR6/6	暗褐色、シルト質、粘性はない。孔隙は多く軟質である。混入物はなく均質な土。
4	10YR5/8	黄褐色、粘質土、孔隙は少なくしまっている。混入物はなく、均質な土。
5	10YR4/6	赤褐色、シルト質粘土、孔隙は少なく堅くしまっている。土器の下部まで連続している焼土。

0　2m

第５図　S106竪穴住居跡

柱穴は北東側壁に1カ所(P1)、西側壁に3カ所(P2,P3,P4)、南側壁から南東側壁にかけて3カ所(P5,P6,P7)の7つが確認された。このうちP3とP4、P6とP7については、それぞれほぼ同位置にあるため、同一の柱に対応する柱穴と判断される。各柱穴の深さは以下のとおり。P1;22cm、P2;13.5cm、P3;10cm、P4;7.5cm、P5;19.5cm、P6;8cm、P7;4cm。

第6図4は住居中央北側の炉から出土した深鉢形土器である。体部下半から底部までしか残存しないが、器面はＲＬ縄紋が縦位に回転施紋されている。底部近くは横位のナデ調整がほどこされ、底面には笹の葉の圧痕が残る。胎土には砂粒を含むが焼成は良好である。二次加熱のため全体に橙色に近く発色している。第6図3は4の北側の礫にかぶさって出土した小形鉢形土器である。体部上半に紋様帯があるらしく波状の沈線が器面を巡る。体部下半にはＲＬ撚紐を縦位に回転し斜行縄紋を施紋している。胎土は精選された粘土を用い、焼成も良好で緻密に仕上がっている。第6図1、2はいずれも覆土中からの出土である。磨消縄紋手法により口縁部～体部上半にかけて曲線的な構図の沈線区画紋を施紋したものらしい。区画紋内にはＬＲ撚紐を縦位回転した斜行縄紋が施されている。胎土には砂粒を含む。器面は二次加熱のため脆弱である。



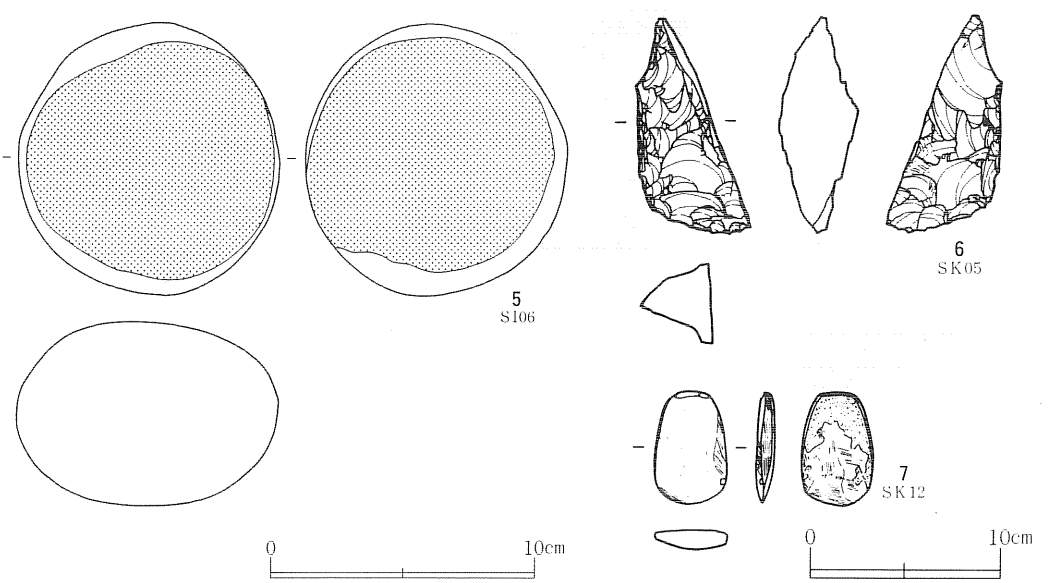
第６図　SI06竪穴住居跡出土土器

2)土坑

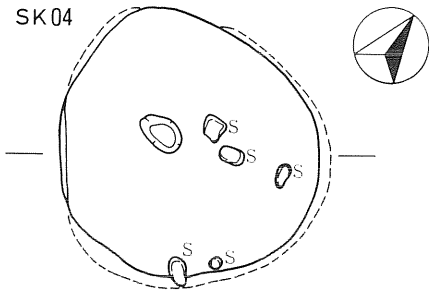
ＳＫ04

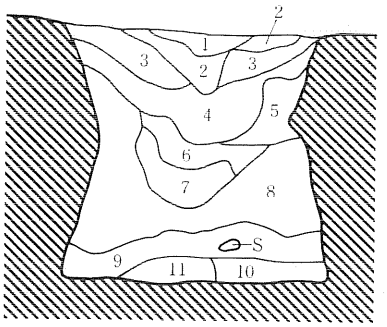
竪穴住居跡ＳＩ06のあるＬＨ49区で検出した。底面径が開口部径ないし頚部径より大きいフラスコ状土坑である。開口部径133～143cm、頚部径100cm前後、底面径140cm前後、中央部の深さ130cmを測る。確認面上、南東側で1個、覆土下部9層中に4個の拳をやや上回る大きさの礫を確認した。底面中央に径25×16cm、深さ12cmの浅いピットをもつ。ＳＫ04の覆土は坑外からの流入土と坑内壁面の崩落土とが互層をなした自然堆積の状態を良く示すのに対し、北東側に隣接するＳＫ12は開口部の崩れが少なくかつ底部までの充填土の大半が地山土の再堆積土で占められている。したがって、ＳＫ12についてはその廃絶に際し埋め戻されたと考えられるが、その位置関係から埋め戻しにはＳＫ04からの排土が用いられたと推測される。

第12図11、12は確認面上から、8、9、10は覆土中位6～8層からの出土である。11は器面にＬＲ縄紋を縦位に回転施紋した深鉢形土器の体部破片である。内面の調整は比較的丹念に行われている。12は揚底の深鉢形土器片。体部下半にはＬＲ撚紐を左上ー右下方向に斜位回転して横走する縄紋を施している。両者とも胎土に繊維を含み、器壁は厚く脆弱である。8は頚部で『く』の字に屈曲する深鉢形土器の口縁～頚部破片。口縁は波状を呈する。屈曲する頚部の上には右から左に向けて先端の尖った工具による2段の刺突紋が連続して施されている。胎土には砂粒を多く含み、全体に二次加熱によって脆くなっている。10は体部で大きく膨らむ浅鉢ないし鉢形土器の破片。器面全体にＬＲ撚紐を縦位に回転して斜行縄紋を施した後、浅い沈線で区画してクランク状の無紋部分を作り出している。胎土は精選した粘土を用い、焼成は良好である。内面に樹脂状の塗膜痕跡が残る。9は深鉢形土器の破片と推定される。口縁直下は無紋



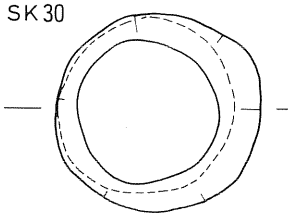
第７図　Ｓ106竪穴住居跡・ＳＫ05・ＳＫ12土坑出土石器

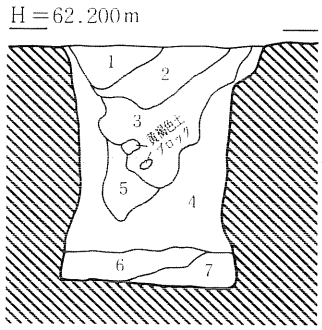




SK04

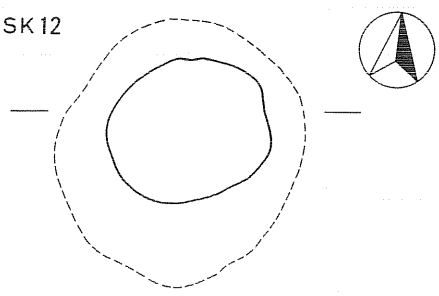
1	10YR3/3	暗褐色、シルト質、粘性はなく、サラサラしている。植物根による撹乱がある。
2	10YR4/6	褐色、シルト質土、1層よりもキメやや粗く、木炭粒が僅かに含まれる。また、暗褐色土が斑状に混在する。
3	10YR4/4	褐色、やや粘質、孔隙多く、柔らかい。木炭粒僅かに含まれる。
4	10YR4/6	褐色、やや粘質、やや孔隙有り、褐色土が斑に混じっている。
5	10YR4/6	褐色、粘質土、孔隙少なく、固い。
6	10YR4/4－4/6	褐色、やや粘質、暗褐色土が混入する。
7	10YR4/6	褐色、粘質、孔隙は少ない。木炭の微細粒を混入する。
8	10YR5/6	黄褐色、粘質、孔隙少なく、比較的しまっているが、部分的な硬軟の差も認められる。
9	10YR6/9－4/6	黄褐色～褐色、粘質土、孔隙多く柔らかい。木炭粒多く含まれる。暗褐色土が斑らに混じる。
10	10YR4/6	褐色、粘質、孔隙多く柔らかい。木炭粒僅かに含まれる。暗褐色土斑らに含まれる。
11	10YR4/6	褐色、粘質、孔隙有。上質はキメ細かく。均質。異質土の混入もない。 ※7層中から、中期末～後期初頭の土器出土。

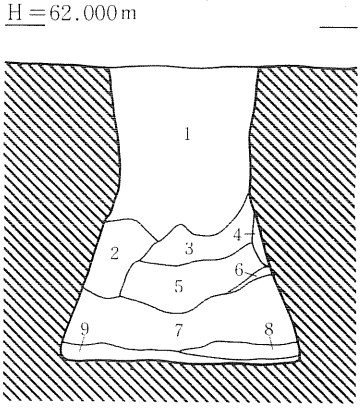




SK30

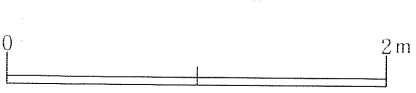
1	10YR3/3	暗褐色、シルト質土、僅かに粘性を帯びる。孔隙多く軟質である。
2	7.5Y4/6－4/4	褐色、粘質土、1層に比べしまっている。径1～5mm程の礫を含む。また、黄褐色土が混じり、部分的に暗褐色土が斑に入る。
3	10YR3/3	暗褐色、粘質土、孔隙があり、軟質、黄褐色土粒、木炭粒を僅かながら含む。
4	10YR6/6	明黄褐色、粘質土、孔隙があって軟質である。壁面崩落土。
5	10YR3/3	暗褐色、粘質、孔隙があり、軟質。黄褐色土、黒褐色土、木炭粒が各々均等に混じり合う。基本的に3層と近似の層。
6	10YR3/4	暗褐色、粘質、孔隙あり軟質。木炭をブロックとして含む。黄褐色土と黒褐色土が混じり合ったもの。
7	10YR5/6	黄褐色、粘質、孔隙があり軟質。暗褐色土、灰白色土粒を含む。ボソボソした感触。





SK12

1	10YR5/8	黄褐色、細砂、石英、雲母などの微細粒にシルト質の黄褐色土が混じっている。部分的に黄褐色粘質土が混入する。孔隙はなく比較的しまっている。木炭（径10mm未満）を含む。本来基盤層下部の堆積土であるが、近くのSK04を掘った際の排土が、再堆積したものである。
2	10YR6/6	明黄褐色、粘質であるが、径10～20mmの固結したブロックによって構成される。したがって、孔隙も多く、脆く崩れ易い。
3	10YR6/6	明黄褐色、粘質土をベースとして、1層の細砂を若干混じえている。やや孔隙があり、軟質である。
4	10YR5/6－6/6	黄褐色～明黄褐色、細砂をベースとして、粘質土を混じえている。孔隙多く軟質で崩れ易い。
5	10YR5/6	黄褐色、粘質土、2層よりも小さなブロックで構成されている。孔隙は多く崩れ易い。
6	10YR3/4	暗褐色、粘質で孔隙多い。きわめて孔隙多く軟質である。
7	10YR3/4	暗褐色、粘質で孔隙多い。きわめて孔隙多く軟質である。
8	10YR4/4	褐色、粘質、孔隙多く軟質である。南側で多量の木炭を含む。
9	10YR5/6	黄褐色、粘質、孔隙多く軟質。暗褐色土粒、木炭細粒を含んでいる。



第８図　SK04・SK12・SK30土坑

であるが、その下位を巡る沈線下にはＬ撚紐を縦位に回転させた無節の斜行縄紋が施されている。また、口縁下の沈線のさらに下に加えられた弧線内には先端の尖った工具によって、下から上に向けての刺突紋が充填されている。胎土は緻密で焼成も良好である。11、12は前期、8、9、10は中期末～後期初頭の時期と判断され、8、9、10は遺構の埋没過程の比較的初期の段階で、11、12はほぼ埋没完了間際に周囲から混入したと考えられる。

ＳＫ12

ＳＫ04の北東側、ＬＨ48区、ＬＨ49区で検出された。ＳＫ04同様のフラスコ状土坑である。開口部径86×76cm、底面径136×122cm、確認面からの深さ156cmの規模をもつ。開口部から頚部にかけての崩落はほとんどなく、この部分での断面形は円筒形を呈する。覆土は9層観察されたが大半が地山の再堆積土によって占められている。

第7図7は、覆土下位第7層中から出土した小形磨製石斧である。緑色凝灰岩の偏平な小礫を素材とし、刃部を中心に両面を磨きあげた後、側縁を磨いて仕上げている。基部には手が加えられていない。

ＳＫ30

調査区の南東隅に近いＬＩ44区、ＬＩ45区で検出した。開口部径108×106cm、底面径94×90cm、確認面からの深さ126cmを測る。覆土は7層観察されたが、壁面からの崩落土が主体を占める。坑底部で第12図28の土器を検出した。ＬＲ縄紋の施された深鉢形土器体部片であり、砂粒を含むが焼成は良い。

ＳＫ09

調査区の南東側、ＬＨ46区、ＬＩ46区で検出した。ＳＫ11の北壁を切って構築されている。開口部径216×188cm、底面径240×216cm、確認面からの深さが中央部で112cmを測る。覆土は15層観察された。基本的に黒褐色～暗褐色土、褐色～黄褐色土が互層をなす。坑底から大形の深鉢形土器底部が伏せられた状態で、また別の深鉢形土器半個体分が圧し潰された状態で出土している。

第13図31は体部下半から底部まで直線的に降り下端で僅かに張り出す深鉢形土器の底部である。体部にはＬＲ撚紐を左上－右下の方向で回転し横走する縄紋を施紋している。底面近くは横位にナデ調整されている。胎土には比較的大きな砂粒を含むが焼成は堅緻である。30は平縁の深鉢形土器である。口縁は外反ぎみに立ち上がり、体部上半で膨らんで下半はごく緩い曲線を描きながら下降する。最大径は体部上半にある。体部には全面ＬＲ撚紐を左上－右下の方向で回転し横走縄紋を施紋している。胎土には大粒の砂粒を多く含み、焼成も不良である。口縁部から体部上半にかけての外面に煤の付着が認められる。

ＳＫ11

調査区の南東側、ＬＨ46区、ＬＩ46区で検出した。北側でＳＫ09に切られている。開口部径152×136cm、底面径164×148cm、確認面からの深さ76cmを測る。覆土は7層に分けて観察されたが地山土の再堆積土が主体を占め、全体に褐色～黄褐色を呈する。

明らかに遺構に伴う出土遺物はない。ただし、第20図37～40の土器が南壁の坑外で出土しており、その一部の破片がＳＫ11のプラン確認面でも出土した。

ＳＫ35

調査区中央からやや北西寄りのＬＧ50区で検出した。開口部径124×120cm、底面径116×112cm、確認面の深さ108cmの規模がある。やはり開口部径よりも底面径が大きいフラスコ状土坑である。覆土は6層観察されたが、下層が壁面からの崩落土を主体とする黄褐色～褐色土、上層が坑外からの流入土を主体とする黒褐色～暗褐色土からなる。覆土下位の第5層中、中央から南西側に寄った部分で鉢形土器が倒れた状態で出土した。

第13図33は平縁の小形鉢形土器である。口縁は外反りぎみに立ち上がり、体部上半で膨らみ、体部半ばから底部にかけて直線的に降り、底部はごく僅かに張り出す。最大径は体部上半にある。口頸部と体部との境には2条の平行沈線が巡り、体部は全面ＬＲ撚紐を横位に回転して斜行縄紋を施紋する。胎土にごく僅かながら砂粒を含むが焼成は良好である。内外面とも煤の付着が著しい。

ＳＫ31

調査区の南東隅ＬＩ44区で検出した。開口部径108×104cm、底面径88×80cm、確認面からの深さ132cmを測る。覆土は15層観察された。基本的に坑外からの流入土である黒褐色～暗褐色土と、壁面の崩落土である褐色～黄褐色土が互層をなす。

坑内からの出土遺物はない。

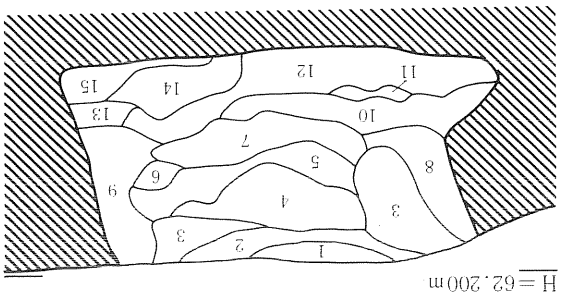
ＳＫ16

調査区の中央からやや南側、ＬＩ47区で検出した。開口部径76cm、底面径124×108cm、確認面からの深さ56cmを測る。覆土は5層観察された。色調は全体に明るく、地山土の再堆積土と判断される。

覆土中に若干量の木炭粒が混入しているほかは、坑内からの出土遺物はない。

ＳＫ05

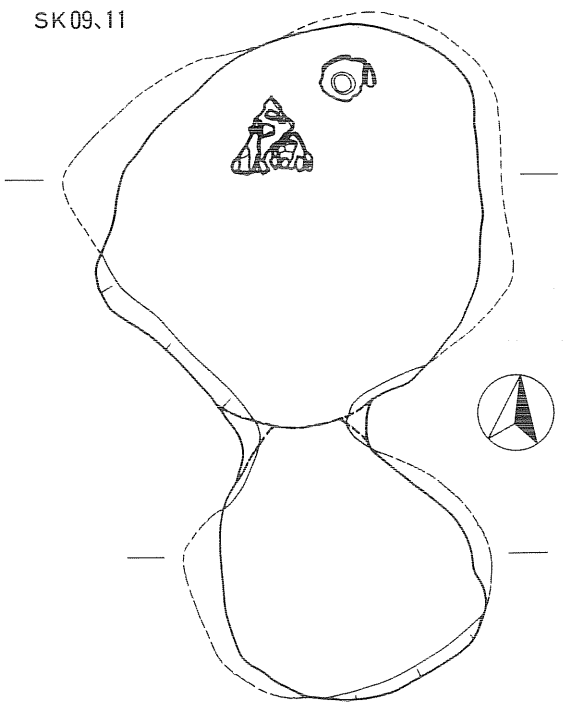
調査区の中央東側、ＳＩ06竪穴住居跡の東隣りに位置する。開口部径112×120cm、確認面からの深さ20cmを測る。覆土は4層観察され、遺物は1層および2層中に包含されていた。第13図33は平口縁の深鉢形土器である。体部上半から口縁にかけて外反して開き、体部下半は緩く膨らみながら降りる。口縁下2～3cmの部位で一部分であるが横位にナデられた段が作り出されて



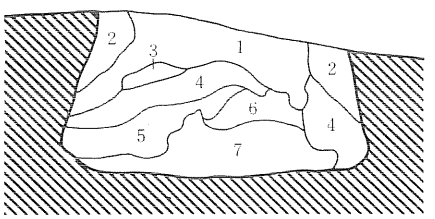
SK09

1	10YR3/4	暗褐色、シルト質、やや孔隙有。指頭による圧迫で凹む。
2	10YR4/6	褐色、シルト質、孔隙有。軟質。微細な木炭粒を含む。
3	10YR4/4	褐色、粘質、孔隙有。軟質。褐色の硬質土ブロックを含むものの全体にキメ細かい。西側では暗褐色土が斑に混じる。
4	10YR2/2	黒褐色、粘質、上部で孔隙少なく硬質、下部で孔隙が多く軟質。黄褐色土の微細粒僅かに含まれる。
5	10YR3/4	暗褐色、粘質、孔隙多く軟質。黄褐色土、褐色土、暗褐色土が斑らに入り込んでいる。
6	10YR4/6	黄褐色、粘質、孔隙少ない。壁面の崩落土であるが、ブロック状に遺構内に入り込んだ土。
7	10YR3/4	暗褐色、粘質、孔隙多く軟質。黄褐色土粒含まれている。土器片出土。
8	10YR4/6	褐色、粘質、孔隙多くきわめて軟質。ごく僅かに木炭含まれる。
9	10YR5/6	黄褐色、粘質、孔隙は少なく、比較的しまっている。壁面の崩落土であり、基本的に8層に対応する。色調、土性の違いは、より台地縁辺に近い8層と、台地内に位置する9層の堆積過程の差に起因すると思われる。
10	10YR4/6	褐色、粘質、孔隙多く、軟質。木炭粒が僅かに混じる。8層に比較し、やや明るい。
11	10YR5/6	黄褐色、粘質、孔隙少なく、比較的しまっている。壁面崩落土のブロック状混入土。
12	10YR4/6	褐色、粘質、孔隙あり、柔らかい。木炭微細粒、僅かに混入している。
13	10YR4/6	褐色、粘質、孔隙多くきわめて軟質。木炭微細粒多く混入。
14	10YR6/6	黄褐色、粘質、孔隙はなく、きわめて堅い。壁面の崩落土。
15	10YR3/4	暗褐色、粘質、孔隙多く、軟質。木炭微細粒含まれる。

SK09、11



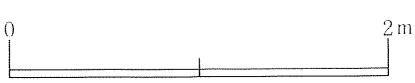
H＝62.200m



SK11

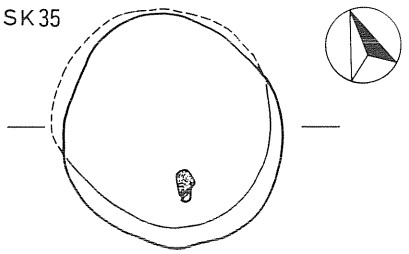
1	10YR3/4－4/4	褐色－暗褐色、シルト質、孔隙多く、軟質。木炭を僅かに含む。
2	10YR5/9	黄褐色、粘質、1層に比較し、ややしまっている（壁崩落土）。ごく僅かに木炭粒を含む。
3	10YR6/6	明黄褐色、粘質、孔隙少なくしまっている。壁面崩落土遺構内混入土。
4	10YR4/4	褐色、粘質、孔隙多く軟質。褐色土粒と暗褐色土粒が混じり合っている。木炭粒僅かに含まれる。
5	10YR5/4－5/6	にぶい黄褐色－褐色、粘質、孔隙多い。黄褐色土の硬質ブロックが斑に入り込んでいる。
6	10YR4/4	褐色、粘質、孔隙多く軟質。暗褐色土粒が混じる。
7	10YR7/4	にぶい黄褐色、粘質であるが、部分的な硬軟の差が大きく全体に脆い

※遺物（徹底起複の施された土器片）は、1層中からの出土である。

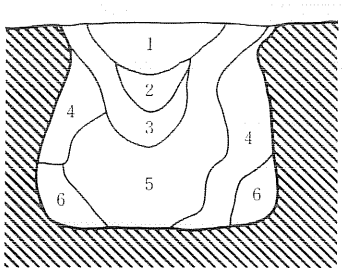


第9図　SK09・SK11土坑

SK35



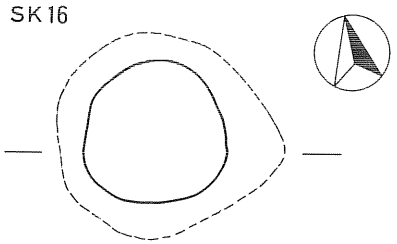
H＝62.000m



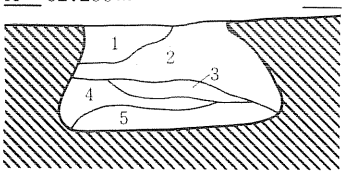
SK35

1	10YR3/2	黒褐色、シルト質、粘質なくサラサラした土、孔隙多く、軟質。黄褐色土粒、木炭粒が僅かに混じる。
2	10YR3/4	暗褐色、僅かに粘性を帯びる。孔隙があり軟質、木炭を含む。
3	10YR4/4～4/6	褐色、粘質、孔隙が多く軟質。
4	10YR5/6～4/6	褐色～黄褐色、粘質、孔隙多く軟質でボソボソした感触。
5	10YR4/4～4/6	褐色、粘質、孔隙多く、軟質。木炭粒を含む。土器包含。
6	10YR5/6	黄褐色、部分的にブロック状に固結している。粘質土で他に比較して孔隙も少ない。

SK16



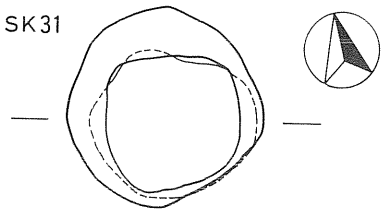
H＝62.200m



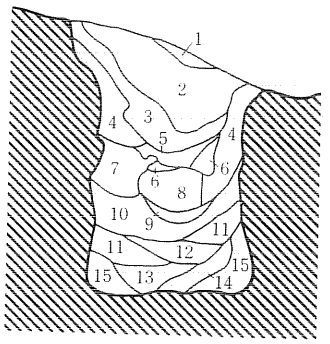
SK16

1	10YR4/6	褐色、シルト質、比較的しまっており、緻密である。木炭粒を多く含む。
2	10YR4/4～4/6	褐色、シルト質、孔隙があり、脆く崩れ易い。ごく少量の木炭粒を含む。
3	10YR4/6	褐色、粘質、僅かに孔隙がある。若干の木炭粒を含んでいる。
4	10YR4/6	褐色、粘質、孔隙が多く、軟質。暗褐色土が斑に混じっている。
5	10YR4/4	褐色、粘質、孔隙多く、軟質。４層に比較し、暗い色調を呈し、暗褐色土の混じりの度合大きい。

SK31

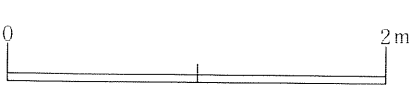


H＝62.100m

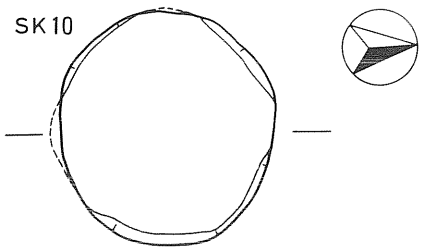


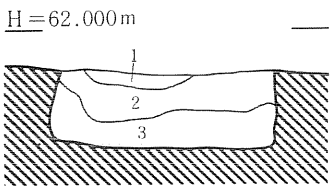
SK31

1	10YR2/2	黒褐色、シルト質、孔隙多く軟質である。粘性はない。
2	10YR3/3	暗褐色、粘質、孔隙が少なく、比較的しまっている。木炭粒を僅かに含む。
3	10YR3/3	暗褐色、シルト質、黄褐色土粒、黒褐色土粒、木炭粒が混じり合った土。孔隙多く軟質。
4	10YR4/6～5/6	褐色～黄褐色、粘質、孔隙ややあり。壁面崩落土。
5	10YR2/3～3/3	黒褐色～暗褐色、シルト質、３層同様、黄褐色土粒、黒褐色土粒、木炭粒が混じり合った状態の土。孔隙多く軟質。
6	10YR3/4～4/4	暗褐色～褐色、３層、５層同様の土であるが、黄褐色土の混入割合が大きい。
7	10YR4/6～5/6	褐色～黄褐色、粘質であるが、孔隙多く軟質。
8	10YR3/3	暗褐色、３、５、６層と同様の土。黒褐色土の混入割合大きい。
9	10YR4/4	褐色、３、５、６、８層と同様の土。黄褐色土の混入割合大きい。
10	10YR4/6～5/6	褐色～黄褐色、粘質、孔隙多く軟質。
11	10YR4/4～4/6	褐色、粘質、孔隙多いきわめて軟質。
12	10YR2/2～2/3	黒褐色、シルト質、３、５、６、８、９層と同質だが、木炭の混入割合大きく、木炭粒自体も径５～７mm程度と大きいものを含む。
13	10YR4/6	褐色、粘質、孔隙多く軟質。
14	10YR3/4	暗褐色、３、５、６、８、９、12層と同質の土。孔隙多く軟質。
15	10YR7/4	にぶい黄橙色、粘質、かたくしまっていて、孔隙はほとんどない。キメ細かい。基盤層下部の崩れた土。



第10図　SK35・SK31・SK16土坑





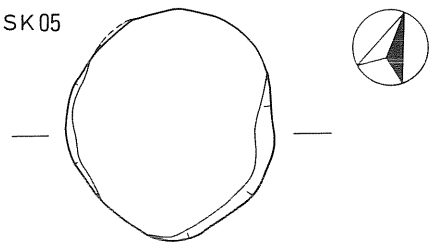
SK10

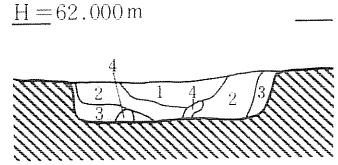
1　10YR6/8　黄褐色、シルト質、粘性はなく、僅かな孔隙がある。炭化物粒が、含まれている。土器はこの層中に含まれている。

2　10YR5/6　明褐色、粘質土、やや孔隙有。

3　10YR4/6　褐色土、粘質土、孔隙多い。

※全体に埋土は第Ⅲ層、ならびに第Ⅳ層の再堆積土と考えられる。極めて明るい色調を呈する土である。遺物は、1層中に含まれているが、この1層は、土坑の全体プランの南西側に偏って、堆積している。





SK05

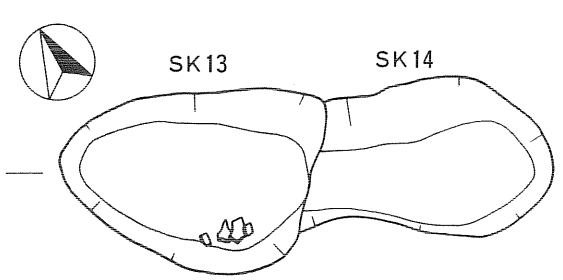
1　10YR5/9　黄褐色、粘質であるが、ブロック状の土が、砕けたような状態。本来、固くしまっていたものと思われるが、根の撹乱によって、ボソボソの状態になったものと思われる。

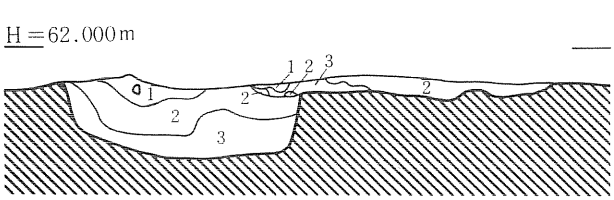
2　10YR5/6　明褐色、粘質、孔隙は少なく、比較的しまっている。焼土粒が混入している。

3　10YR5/6　明褐色、粘質、孔隙は多く、柔らかい。

4　10YR4/6　褐色、粘質、孔隙少なく、固い。ブロック状の土。

※松の木根による撹乱が、断面図をとったラインの西側に認められる。





SK13

1　10YR5/6　黄褐色、粘質土、やや孔隙有。木炭を含んでいる。

2　10YR4/6　褐色、粘質、孔隙があり、柔らかい。微細な木炭粒を含んでいる。

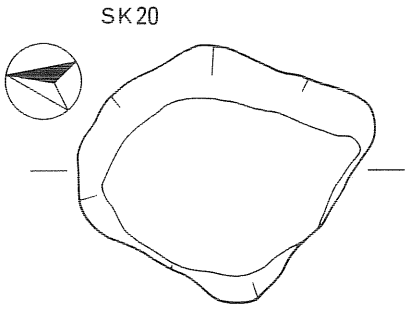
3　10YR4/6　褐色、粘質、孔隙はなく堅くしまっている。

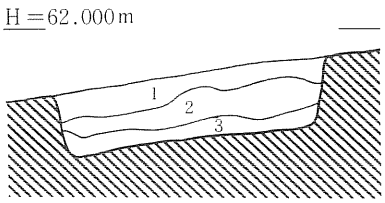
SK14

1　10YR4/6　褐色、粘質、やや孔隙有。焼土粒、木炭粒を含む。

2　10YR5/9　明赤褐色、焼土層、ところどころ暗褐色土が混じり込んでいる。

3　7.5YR6/6　橙色、僅かに焼土化した粘質土層。黄褐色土ブロックを混入する。遺物（縄紋土器）は、遺構確認面上から出土している。



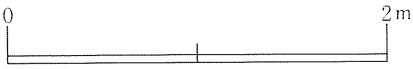


SK20

1　10YR5/6　黄褐色、粘質、孔隙少なくしまっている。暗褐色土粒を混え、遺物（縄紋土器）を包含する。木炭粒を含む。

2　10YR5/9　黄褐色、粘質、孔隙少なくしまっている。

3　10YR5/9～6/9　黄褐色～明黄褐色、粘質、堅くしまっている（基盤層？）。



第11図　SK10・SK05・SK13・SK14・SK20土坑

いる。底部は揚底である。器面には条間隔のあいた縄紋（前段の撚紐のうち一方を他方に巻き付けたＲＬ縄紋）が施紋されているが、その回転方向は口縁部では横位、体部では左上－右下である。器壁は薄く、胎土には少量の砂粒を含むが焼成は良好である。第12図18は、壺形土器の頚部から肩部にかけての破片である。3条を1単位とした平行沈線紋が器周を巡る。器面はミガキ調整が丹念に施されているが、微かに調整以前に施された横位の刷毛目痕跡の残存箇所も認められる。16は第20図44～47と同一個体である。ＬＲ撚紐の回転と細く鋭い沈線による磨消縄紋が施紋されている。17も磨消縄紋の施紋された体部破片。沈線による区画紋内にはＬ原体の縦位回転による無節の斜縄紋が使われている。胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。15はＬＲ原体を縦位回転した体部破片。胎土の砂粒混入が著しい。第13図33の土器は小坂Ｘ式、第12図18も弥生時代の土器であろう。第12図15、16、17は縄紋時代中期末～後期初頭の時期を示す土器と判断される。

ＳＫ10

調査区中央からやや南東側、ＬＨ47区、ＬＩ47区で検出した。竪穴住居跡ＳＩ06の南側に隣接する。開口部径124×112cm、中央部での深さ38cmを測る。覆土は3層観察されたが、全体に明るい色調を呈する。

坑内から第12図14の土器底部が出土している。器面に条間隔のあく縄紋（第13図34と同様の原体による）が施紋され、底面は揚底ぎみに作られている。胎土は精選された粘土を用い、焼成は良好である。

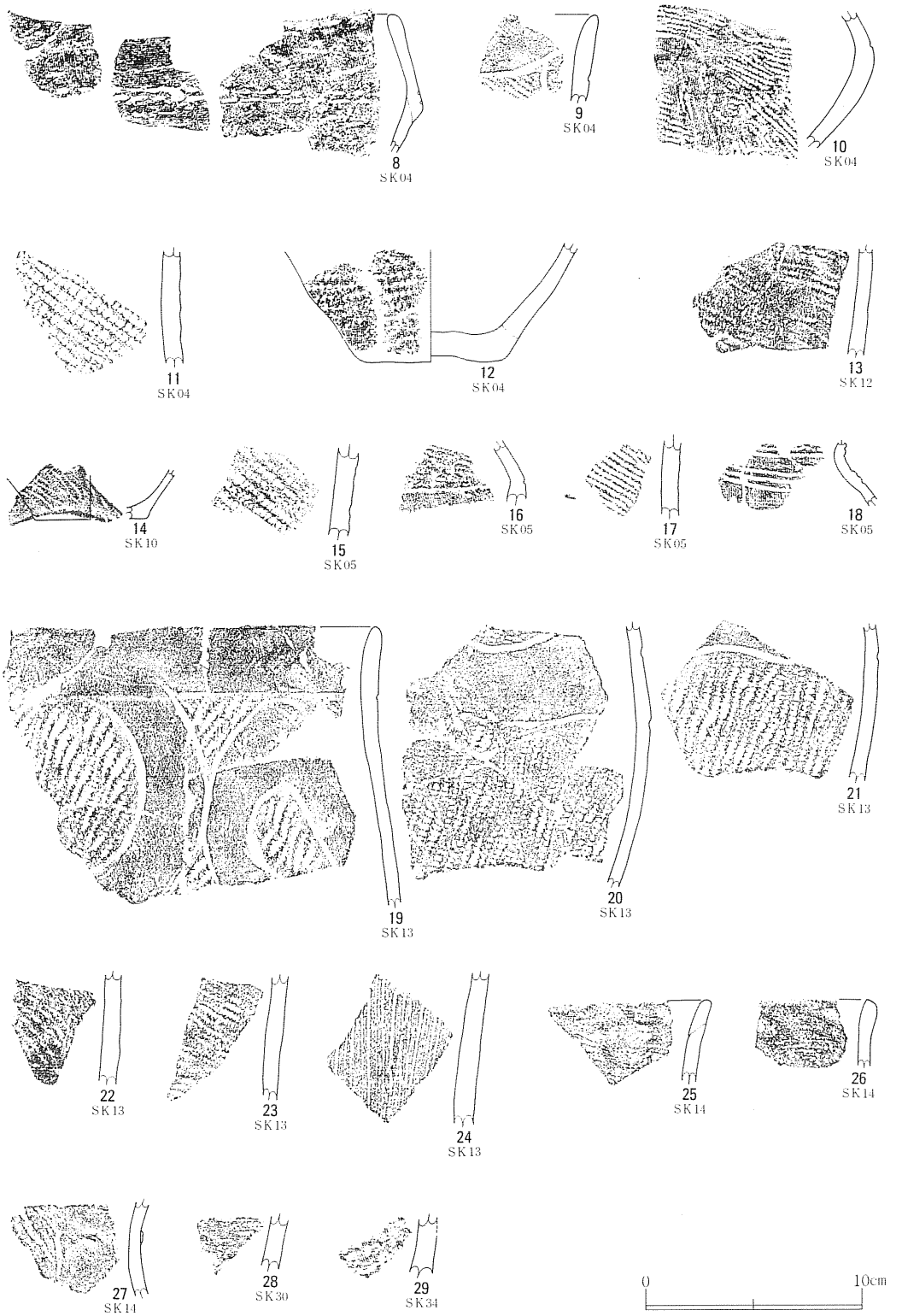
ＳＫ13

調査区中央東寄りＬＨ49区で検出した。開口部径136×96cm、中央部での深さ36cmを測る。平面形はＮ－61°－Ｗに長軸方向をもつ楕円形プランを呈する。覆土はレンズ状に堆積する3層が観察されたが、遺物はこのうち1、2層から出土している。

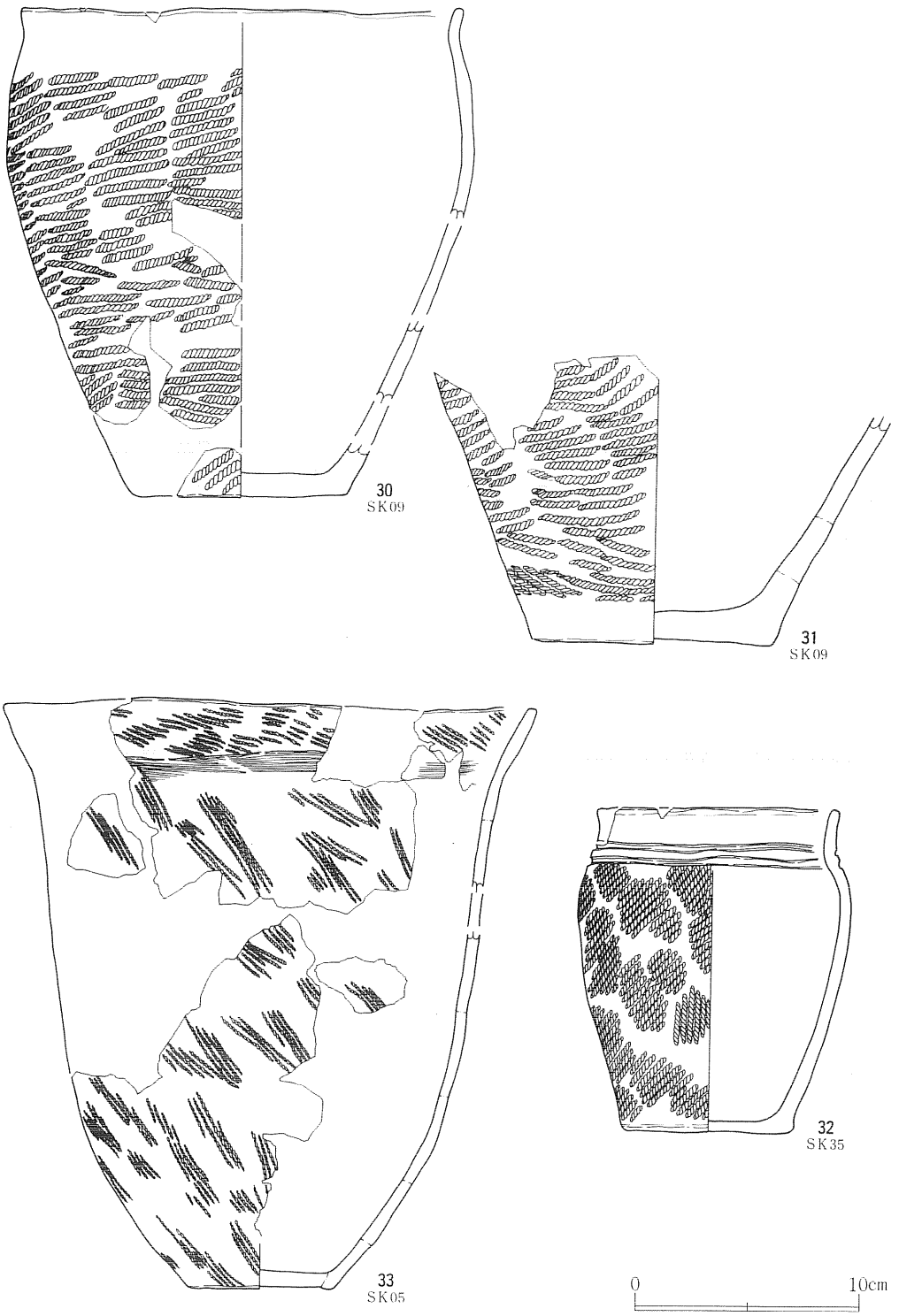
第12図19～24の土器のうち、19～21は同一個体である。体部上半から口縁部にかけて外反し、体部下半で膨らむ平口縁の深鉢形土器に復元される。口縁部はやや肥厚する。口縁下3cm程に1条の沈線が巡り、抱球状の構図を中心とした磨消縄紋手法による紋様が体部上半の紋様帯中に施紋される。体部下半とは波状に巡る沈線によって区画される。縄紋はＲＬ撚紐を縦位に回転施紋した斜縄紋が用いられている。器壁は比較的薄く作られ、胎土には金雲母を含む砂粒が混入されている。焼成は良好である。24は深鉢形土器の体部破片である。縦位の条痕紋が施紋されている。胎土には同じく金雲母を含む砂粒が若干量混入されている。焼成は良い。

ＳＫ14

ＳＫ13と同じくＬＨ49区で検出した。底面の西側延長はＳＫ13の覆土第2層中に検出した。径160×84cmの不整楕円形プランを呈し、長軸方向はＮ－61°－Ｅに向く。深さは中央部でも8



第12図　土抗内出土土器(１)



第13図　土坑内出土土器（２）

cmと浅い。覆土は3層に分けられるが、焼土を主体とし、ＳＫ13と重なる西側部分が最も良く焼けて橙色に発色している。覆土中から第12図25～27の土器が出土している。25、26は深鉢形土器のやや外反する口縁部片であり、27は磨消縄紋手法と鰭状貼付紋の施された深鉢形土器体部片である。いずれの胎土にも僅かの砂粒を含むが焼成は良い。

ＳＫ14は覆土である焼土を除去して確認した遺構であり、焼土の形成面がＳＫ14の確認面上にあることを考えれば、ＳＫ13の覆土堆積がほぼ完了した時点での焼土形成としても、なんらかの関連ある遺構ととらえられる可能性がある。

ＳＫ20

調査区の中央やや西寄りＬＪ48区で検出した。径160×136cm、中央部での深さ32cmを測る。覆土は3層に分けられ、全体に明るい色調を呈する。出土遺物はない。

ＳＫ21

調査区中央のやや西寄りＬＪ47区、ＬＪ48区で検出した。北側が深く南側にそれよりも浅い張り出しがある。径192×164cm、深さは北側中央で76cm、南側で24cmを測る。覆土は全体に明るい色調を呈し、壁面のうち、南東側の一部に焼土の形成が認められた。出土遺物はない。

ＳＫ17

調査区中央ＬＩ48区、ＬＩ49区で検出した。径100×84cm、深さ52cmの小形の土坑である。覆土は2層観察された。出土遺物はない。

ＳＫ18

調査区中央やや南側ＬＩ47区、ＬＪ47区で検出した。径60×52cm、深さ28cmの小形の土坑である。覆土は4層観察された。

出土遺物はない。

ＳＫ19

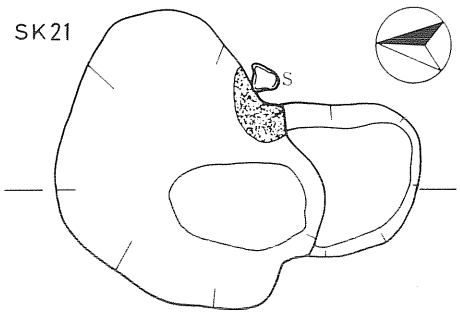
調査区中央やや南側ＬＪ47区で検出された。径108×72cm、深さ28cmの小形の土坑である。覆土は3層観察され、全体に明るい色調を呈する。

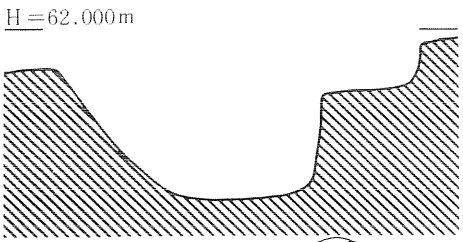
出土遺物はない。

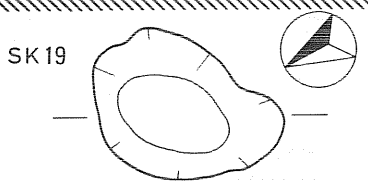
ＳＫ15

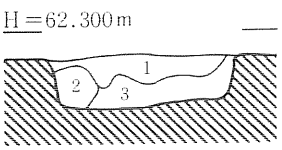
調査区の中央ＬＨ49区で検出した。断面に柱痕跡を確認した小形の遺構である。径60cm、深さ64cmを測る。覆土は4層観察されたが、第4層が柱痕跡にあたり、第2層、第3層が柱と掘り方の隙間への充填土であろう。第1層は柱の腐朽後の堆積土と判断される。

覆土内中位に礫があるが、外に出土遺物はない。







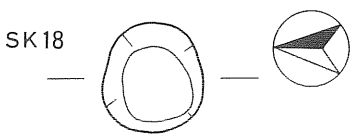


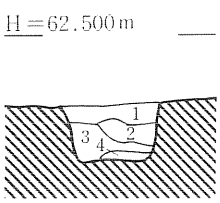
S K 19

1　10YR4/4　　褐色、シルト質、孔隙少なくしまっている。木炭粒を含む。

2　10YR4/6　　褐色、粘質土、孔隙少なくしまっている。

3　10YR5/6　　黄褐色、粘質、孔隙きわめて少なく堅くしまっている。





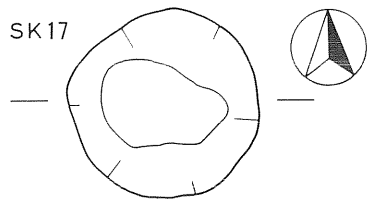
S K 18

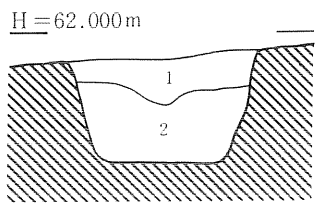
1　10YR4/4～4/6　褐色、シルト質、孔隙があり硬質。木炭粒、焼土粒を僅かに含む。

2　10YR5/6　　黄褐色、シルト～粘土、僅かに粘質、孔隙は多く硬質。

3　10YR4/6　　褐色、シルト質、粘性はなく、孔隙多い。硬質。

4　10YR5/6～4/6　黄褐色～褐色、粘土、粘性大きく孔隙少ない。堅くしまっている。

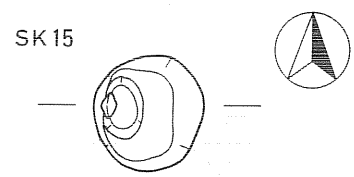


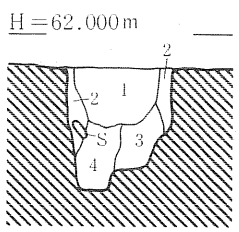


S K 17

1　10YR4/4　　褐色、粘質土、孔隙があり軟質。暗褐色土粒を混える。

2　10YR4/4～4/6　褐色、粘質土、1層に比べ明るい色調を呈する。孔隙少なく比較的しまっている。





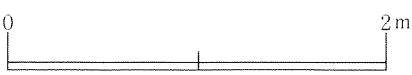
S K 15

1　10YR4/6　　褐色、シルト質、孔隙多く軟質。

2　10YR5/6　　黄褐色、粘質、孔隙多く軟質。両側では暗褐色土が斑に混じる。

3　10YR4/6　　褐色、粘質、孔隙多く軟質。下部でブロック状の黄褐色土（径10～20mm）を多く含む。

4　10YR4/6　　褐色、シルト質細砂。きわめて孔隙多く、脆く崩れ易い。木炭微細粒を含む。柱痕跡であろう。



第14図　SK21・SK17・SK19・SK15・SK18土坑

ＳＫ32

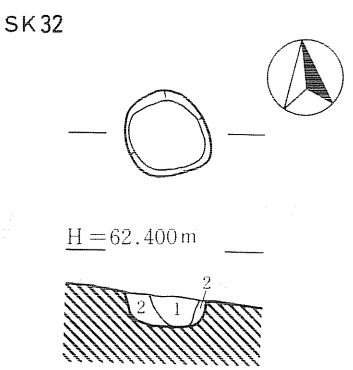
調査区の南東端、ＬＩ44区で検出された。ＳＫ30の南東に隣接する。径48×46cm、中央部での深さ30cmを測る小形の土坑である。覆土は暗褐色、褐色土の2層観察された。

出土遺物はない。

ＳＫ33

調査区の北東隅、ＬＪ44区で検出された。ＳＫ30、ＳＫ31と隣接する。径70×56cm、中央部での深さ16cmを測る小形の土坑である。覆土は褐色を呈する。

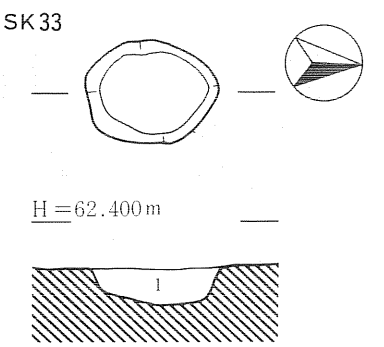
出土遺物はない。



ＳＫ32

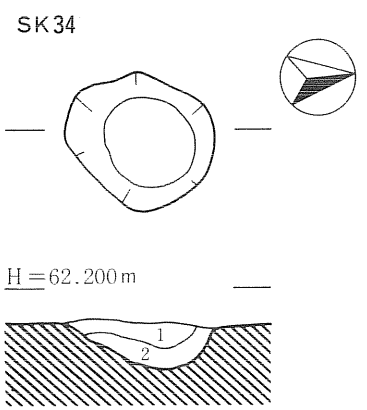
1　10YR3/3　暗褐色、粘質、孔隙少なく、しまっている。

2　10YR4/4　褐色、粘質、孔隙ややあり。



ＳＫ33

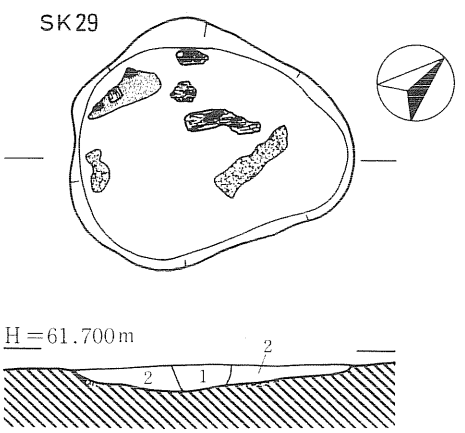
1　10YR4/4～4/6　褐色、粘土質、やや孔隙有。暗褐色土粒を僅かに混入。



ＳＫ34

1　10YR3/4～4/4　褐色～暗褐色、粘質、孔隙少なく比較的しまっている。中央部の深い箇所で黒褐色に近い色調を呈する。土器片はこの層下部からの出土。

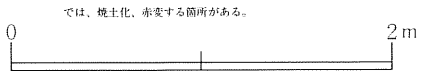
2　10YR5/6　黄褐色、粘質、孔隙はなく硬質。



ＳＫ29

1　10YR4/4　褐色、シルト質、孔隙は少なく、堅くしまっている。木炭を多く含む。

2　10YR4/6～5/6　褐色～黄褐色、シルト～粘土、孔隙多く軟質。若干量の木炭を含み、下部では、焼土化、赤変する箇所がある。



第15図　ＳＫ32・ＳＫ33・ＳＫ34土坑、ＳＫ29炭焼窯

ＳＫ34

調査区の南端、ＬＪ44区で検出した。径80×68cm、中央部での深さ24cmを測る。覆土は暗褐色～褐色土と黄褐色土の2層観察された。覆土内上位で、第12図29の胎土に繊維を含む深鉢形土器体部小片を検出している。

3)炭焼窯

ＳＫ29

調査区の南西側、ＭＢ46区で検出した。台地上の平坦面が西側に向かって緩く傾斜を始める地点にあたる。径150×134cm、中央部での深さ14cmを測る。坑底面中央からやや北西側に焼土化して赤変した部分が広がり、その西側に木炭塊および木炭粒が点在する。覆土は木炭粒を多く混入する暗褐色土を主とする。

木炭以外に出土遺物はない。

4)塚

遺跡の載る台地の北端から10mほど内に入った、ちょうど60mの等高線の内側に入る位置にあたる地点から南に向かって4基の塚が作られている。4基の塚とも台地の上を縦断する遊歩道に東半分を削られて、それぞれの中央に積まれた礫が遊歩道西壁断面に現れている。調査区には4基の塚のうち南側の2基がかかり、南端のものをＳＸ02、その北に位置するものをＳＸ03として調査した。

ＳＸ02

調査前の計測では、頂部での標高61.8mを測る。東側は遊歩道によって切られているが、西側は台地の西斜面へと連続する。現状では塚の上に樹齢30～40年のアカマツが植えられている。腐植土からなる表土をはぎ取った結果、中央頂部とその西側に拳大の礫の広がりが認められ、その周りを幅50cm程の黒色土の充填した溝が径5.3～5.5mの円を描いて巡っていることが判明した。中央頂部の礫は径2mほどの範囲に広がり、一部が東側の遊歩道断面に現れている。西側傾斜面では礫はまばらで、溝に近付いて再び密度を増し、溝の内側の半周分程が礫によって覆われている。礫は溝の中まで連続しているが、溝中の礫は東側の削られた部分にも確認されている。

溝中の覆土は基本的に黒色～暗褐色を呈するシルト質土であるが、その下に黄褐色土の堆積が認められる部分もある。塚の盛り土は褐色～暗褐色を呈する粘土ないしシルト質土であるが、調査区内の基盤層である第Ⅳ層の上に中央頂部で40cmの高さに積まれている。

盛土を除去した後の第Ⅳ層面の中央から僅かに北によった部分で径1.14×0.8mの掘り込みを

確認した。掘り込みは2段にわたっており、北東側は28cm、南西側は16cm程の深さがある。覆土はにぶい黄褐色～暗褐色を呈する粘質土である。盛土を除去した時点で最終的に確認した遺構の規模は、基底部径462×426cm、溝外縁径582×552cm、溝上面幅64～98cm、溝底幅21～51cm、溝の深さ18～27cmである。

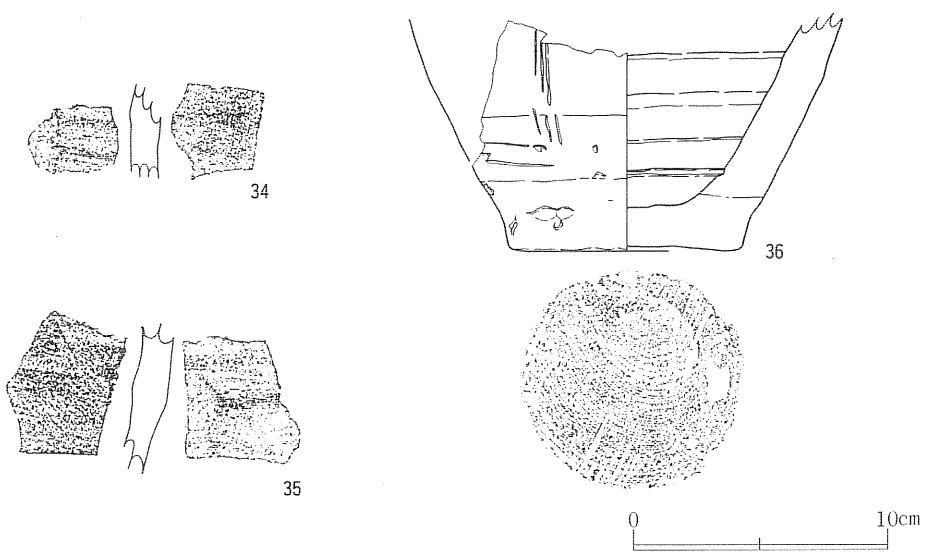
盛土の下部、および溝中から混在と判断される縄紋土器小片が出土しているが、明らかに伴うと判断される遺物の出土はない。

ＳＸ03

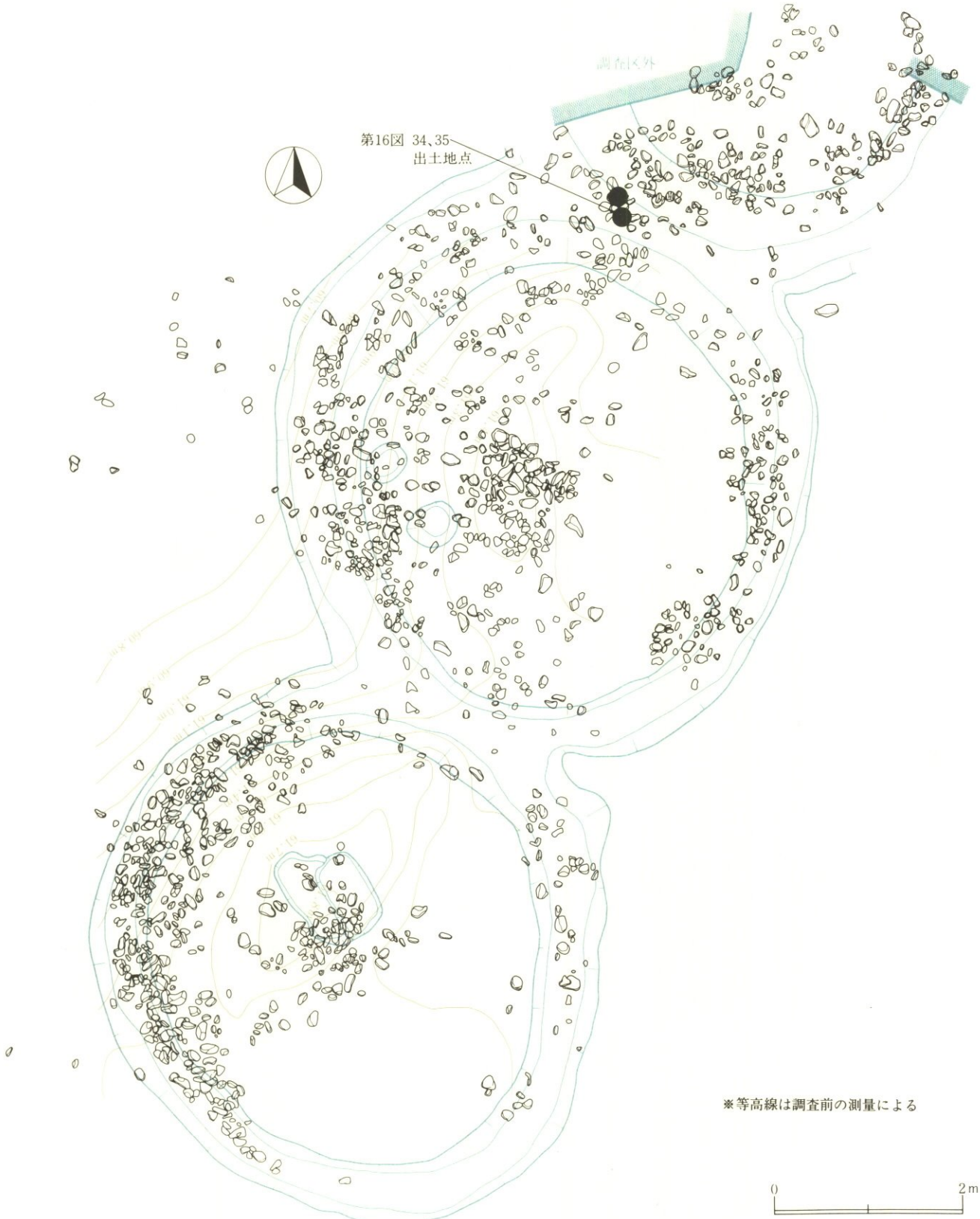
ＳＸ02の北側に隣接する。溝の部分でＳＸ02と重複し、ＳＸ02によって切られる。調査前の計測で、中央頂部の標高は61.45mを測る。ＳＸ02同様、有機質を多く含む表土を除去すると、拳大からそれをやや上回る大きさの礫を積んだ広がりと、径6.1～6.2mの大きさで円形に巡る黒色土充填の溝プランが露出した。礫はＳＸ02同様、中央頂部とその西側に広がるが、中央頂部では径1.5m程の範囲に集中し、その西側では溝に近い程密度が濃くなる。また、礫は溝中まで連続するが、溝中の礫は東側にも多く検出されている。また、さらに別の塚の南端部分が、ＳＸ03の北側に隣接して確認されている。この隣接部分の礫中に混じる状態で第16図34、35、の陶器が出土した。

溝の覆土はＳＸ02同様黒色～暗褐色を呈するシルト質土が主体となる。盛土は中央頂部で第Ⅳ層の上に高さ34cmに積まれている。主に褐色～暗褐色を呈するシルト質の土からなるが、溝に近い部分では黒色～黒褐色土も堆積する。盛土を除去した時点での規模は、基底部径474X420cm、溝外縁径642×582cm、溝上面幅54～120cm、溝底幅21～60cm、溝の深さ21～33cmを測る。

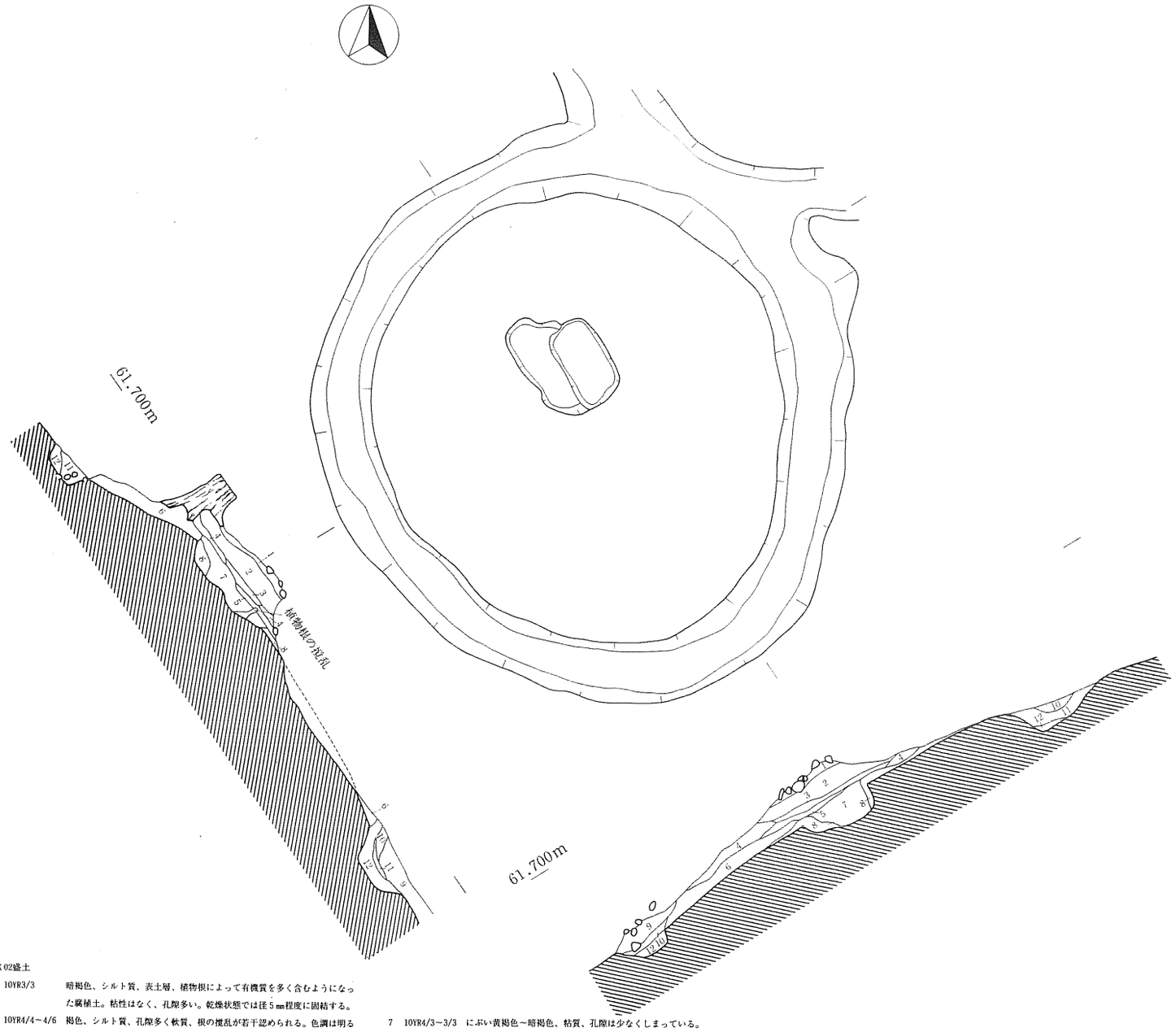
第16図34、35は、ＳＸ03北側から出土した陶器片である。表面は素紋の原体により叩き締め



第16図　ＳＸ03塚出土土器および周辺採集資料



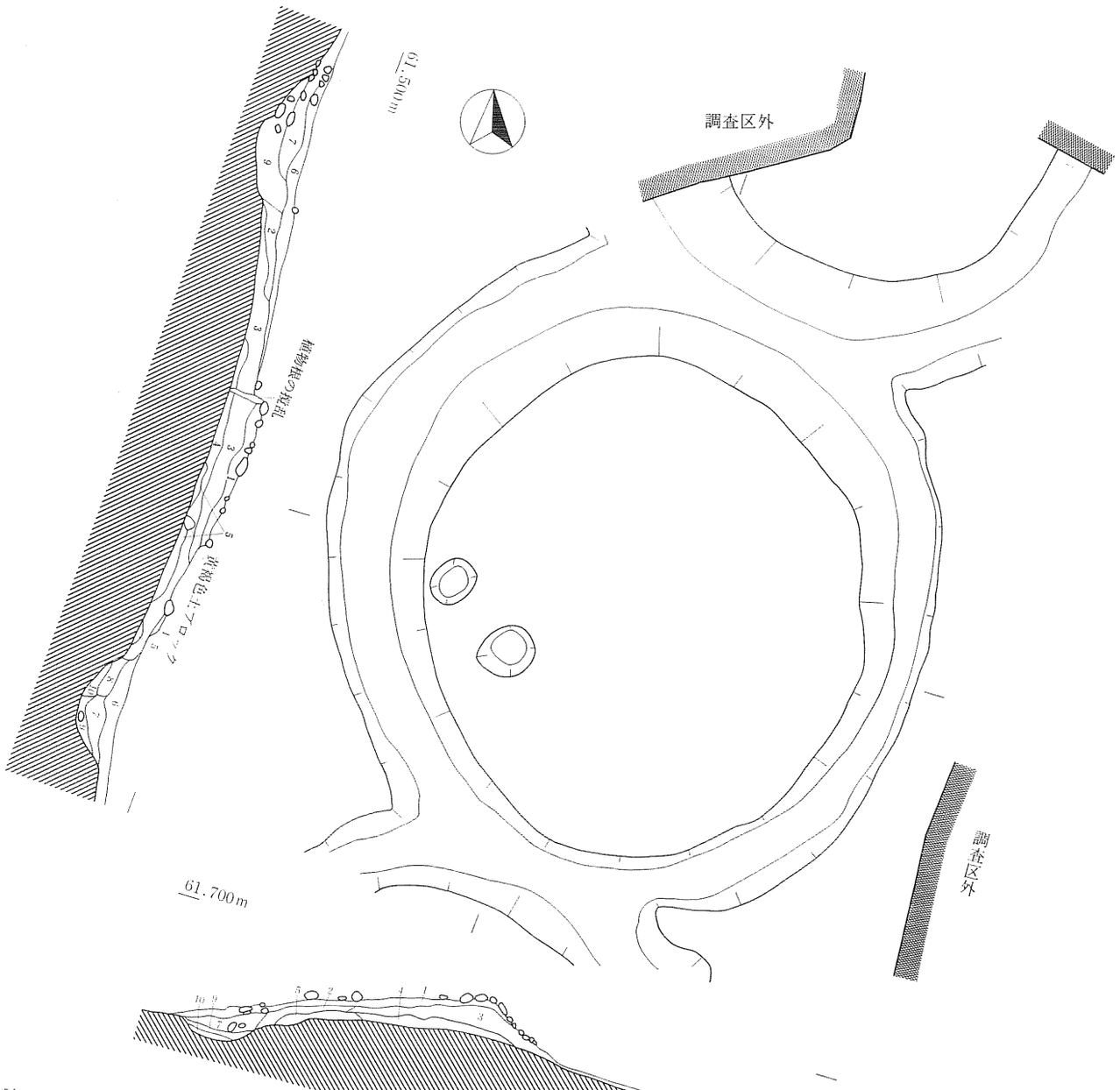
第17図　SX02・SX03塚全体図



ＳＸ02盛土

1	10YR3/3	暗褐色、シルト質、表土層、植物根によって有機質を多く含むようになった腐植土。粘性はなく、孔隙多い。乾燥状態では径５㎜程度に固結する。
2	10YR4/4～4/6	褐色、シルト質、孔隙多く軟質、根の撹乱が若干認められる。色調は明るい。
3	10YR4/4～3/4	褐色ー暗褐色、シルト質であるが２層よりは粘質。また、孔隙も少なく比較的しまっている。色調は暗い。
4	10YR3/4	暗褐色、粘質土、キメ細かく、しまっている。若干の根の侵入有り。色調暗い。
5	10YR4/6	褐色、粘質土、キメ細かくしまっている。微量の木炭細粒を含む。色調明るい。
6	10YR4/4～4/6	褐色、シルト質ながら若干粘性帯びる。僅かながら孔隙有、軟質、木炭微細片を含む。色調中間。
7	10YR4/3～3/3	にぶい黄褐色ー暗褐色、粘質、孔隙は少なくしまっている。
8	10YR5/6	黄褐色、粘質土、孔隙あって軟質である。木炭微細片を僅かに含む。盛土中最も明るい。
9	10YR2/1	黒色、シルト質、多孔隙で軟かい。植物根の多く入る表土層。
10	10YR2/1	黒褐色、シルト質、比較的しまっており緻密である。下部では褐色土粒を混入する。
11	10YR4/6	暗褐色、シルト質土をベースとし、径5㎜前後の褐色土ブロックを多く混入する。またごく僅かながら焼土粒が混じる部分もある。
12	10YR4/6～5/6	褐色ー黄褐色、粘質土。孔隙少なくしまっている。溝壁の崩落土を主体とする。

第18図　ＳＸ02塚基底平面および土層断面



SX03盛土

1　10YR4/4～4/6　褐色、シトル質、表土層、径５～８mm程度のブロックに固結した状態で極めて孔隙多い。植物根著しい。

2　10YR2/1－3/2　黒色～黒褐色、シルト質、孔隙多く粘性を欠く。外側（周溝部近く）では黒色、内側に向かうに従い褐色ぎみとなる。盛土中最も暗い色調を呈する。

3　10YR4/6～5/6　褐色～黄褐色、シルト～粘土、孔隙少なくしまっており、やや粘性も帯びる。木炭微細粒を僅かに含む。

4　10YR4/4－3/4　褐色～暗褐色、シルト質、孔隙少なくしまっているが、粘性を欠く。色調は盛土中２層に次いで暗い。

5　10YR4/6　褐色、シルト質、やや孔隙があり、粘性を欠く。色調は盛土中最も明るい。

6　10YR2/1　黒色、シルト質、多孔隙で軟かい。植物根の多く入る表土層。

7　10YR2/2　黒褐色、シルト質、比較的しまっており緻密である。下部では褐色土粒を混入する。

8　10YR3/2　黒褐色、シルト質、10層よりきめ細かくしまっている。色調もやや明るい。

9　10YR3/4　暗褐色、シルト質土をベースとし、径5mm前後の褐色土ブロックを多く混入する。またごく僅かながら焼土粒が混じる部分もある。

10　10YR4/6－5/6　褐色～黄褐色、粘質土。孔隙な少なくしまっている。溝壁の崩落土を主体とする。

第19図　ＳＸ03塚基底平面および土層断面

られ緩い稜が残る。内面は3×3.5cm程度の円形素紋原体で叩き締めた後ナデている。胎土には白色砂粒が含まれ、焼成は良好で堅く橙色に発色している。

そのほか、出土地点は明確にしえなかったが、第16図36の資料がある。昭和58年東北横断自動車道関係の発掘調査の折り、上祭沢遺跡の遊歩道を工事した関係者から持ち込まれ、遺跡発見の端緒となった資料でもある。工事の関係者によると、ＳＸ02、ＳＸ03のある付近での出土という。壺と判断される陶器の体部下半～底部で、底部内面を除いて内外面ともロクロによる調整で仕上げられている。底部内面の器面調整は施されていない。底面には回転糸切痕が残るが、切り離し後の外周の調整等は行われていない。器壁は厚く、胎土には砂粒が若干残るものの、焼成は良好で還元焔による暗灰色を呈する。

5)遺構外出土土器

第Ⅰ群土器（第20図37～45）

内面調整が条痕によって行われ、褐色～赤褐色を呈する。縄紋時代早期の土器と判断されたが、表面の器面調整、紋様施紋によって2類に分けられる。

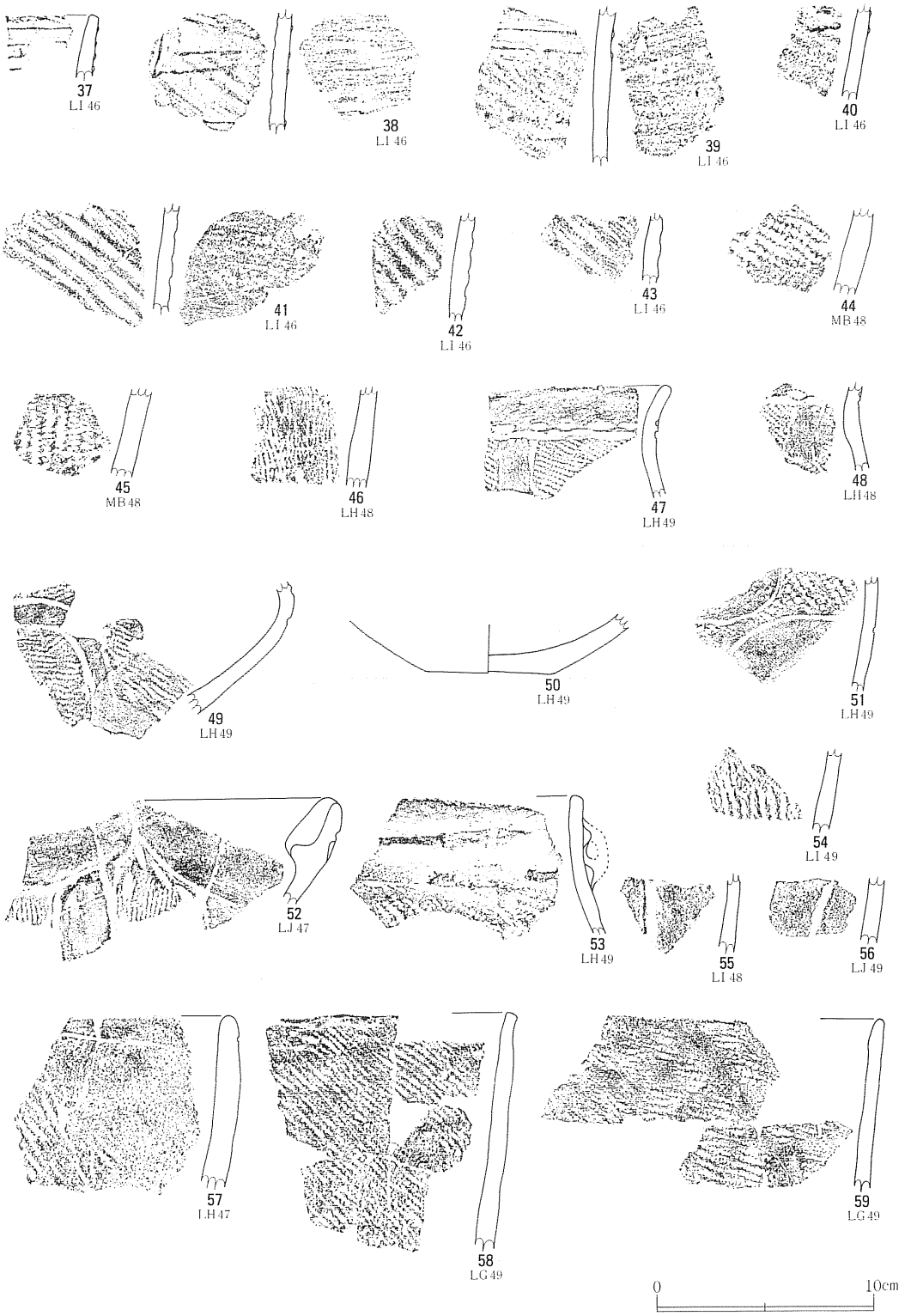
第1類（第20図37～43）

条痕紋(あるいは多条沈線紋)を施紋した後、粘土の貼付けにより細隆起線紋を施す土器。

第20図37～43は同一個体である。計58点の破片が径40cm程の範囲内から出土した。口縁部(37)、体部上半(38～40)、体部下半(41～43)の破片が認められたが、底部の破片は出土していない。器形は口縁部～体部上半が僅かに外反ぎみに立ち上がる平口縁の深鉢形を呈し、底部形状は41、43など体部下半破片の縦横の湾曲具合からおそらく平底に近くなるのではないかと思われる。口縁部は体部に比べやや薄く、口唇は僅かに外そぎぎみに面とりがなされる。その外面には体部まで連続して施紋される条痕紋の端が僅かながら観察され、口縁部以下の紋様帯中には斜位の条痕地に粘土を貼付けた細隆起線紋が施される。条痕紋は条と条の間隔が10㎜と比較的広く、条間の起伏も大きい。先端の丸い棒状工具を施紋具とした沈線と見るべきかも知れない。細隆起線紋は貼付け後断面形が三角形あるいは山形になるよう調整されている。細隆起線紋全体の構成は窺えないが、恐らく紋様帯の上下では平行する条を巡らし(37、39)、その間は幾何学的な構図が描かれている(38)と思われる。また、器表面程に明確ではないが、内面にも横位の条痕が残されている。比較的薄手の器壁には繊維は含まず、金雲母を含む少量の砂粒の混入が認められる。焼成は良好で明褐色を呈する。

第2類（第20図44、45）

第20図44、45は同一個体である。短いＲＬ撚紐を用いた斜縄紋を施す。内面は不明瞭ながら条痕が微かに観察される。器壁は厚く、胎土には細ごく微量の繊維が含まれているほか、細か



第20図　遺構外出土土器(1)

い砂粒も多く混入されている。色調は明褐色を呈する。条痕を伴う器内面の調整、砂粒を含む胎土、明褐色の色調などは第1類と共通する。

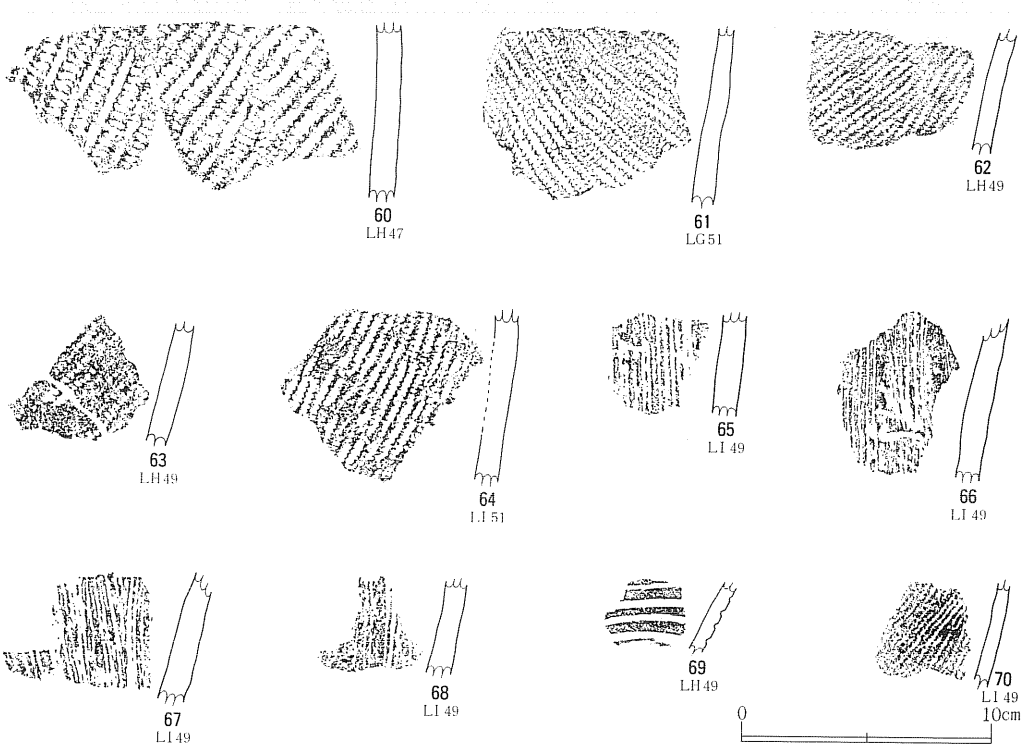
第Ⅱ群土器（第20図46）

木目状撚糸紋を施した土器。原体はＬの撚紐を軸に巻きつけた絡条体である。内面の調整は丹念にかつ緻密に行われ、きわめて平滑に仕上げられている。胎土にはごく僅かの繊維を含み、焼成は良好である。器表面はうすい橙色、内面は灰褐色を呈する。

第Ⅲ群土器（第20図47～56、第22図71）

沈線による曲線的な構図の紋様が描かれる土器。沈線は磨消縄文手法とともに描かれる場合、磨消縄文を伴わない場合がある。

第20図47～50は同一個体である。残存する破片から推定すると、口縁が大きく外反して開き、体部はおそらくその下部に最大径がくるように膨らむ平口縁の鉢形土器であろう。口唇は丸みを帯び、口縁部は幅2cmほどの無紋帯となる。おそらく、最も径の小さくなる頚部には1条の沈線を巡らせた後、その上に工具を右に傾けて連続施紋した刺突を沿わせている。頚部沈線下には細かなＬＲ縄紋を回転させた後、2本の平行沈線によってクランク状のモチーフが描かれ、沈線間は無紋に調整される。沈線は比較的浅く、施紋後の沈線の底に対する調整もほとんど行



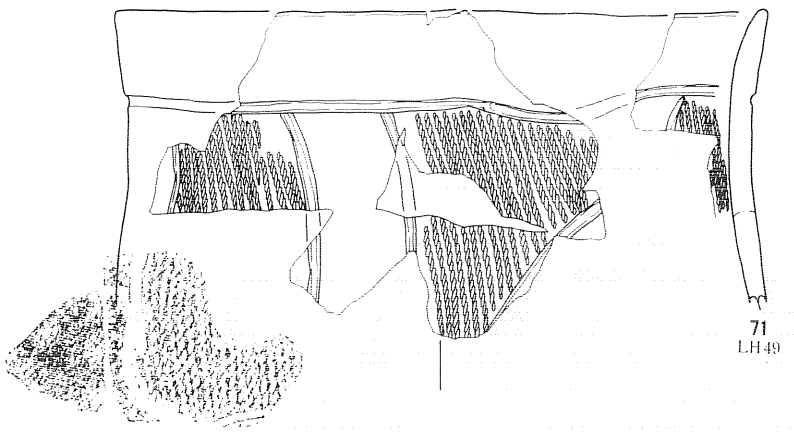
第21図　遺構外出土土器（２）

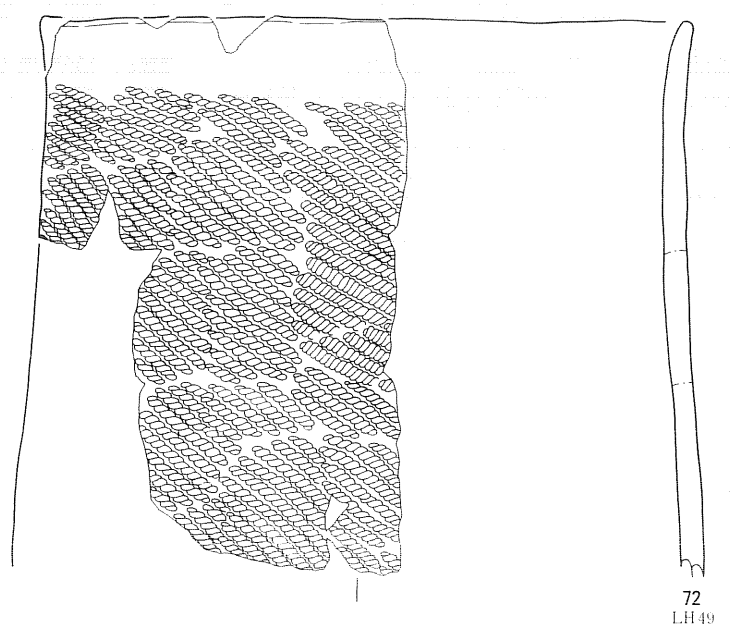
われていない。内面の調整は丹念に行われている。また、樹脂状の塗膜が部分的に残る。胎土は緻密で精選された粘土が用いられ、焼成も良好で、表面、内面ともに灰褐色を呈する。

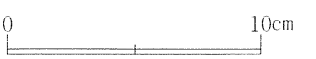
第20図51も磨消縄文手法のとられた土器の体部片である。右下方と左上方からの沈線が対向し、縄紋部分と無紋部分とを画している。第20図47～50の土器に比べ無紋部分が広いが、おそらく、これもクランク状のモチーフが変形したものであろう。縄紋の原体はＬＲであり、沈線は浅く施紋後の調整は行われていない。内面の調整は比較的丁寧に行われている。胎土にはやや粗目の砂粒が混じるが焼成は良好である。灰色を呈する。

第20図52は大きく外傾する口縁部破片である。おそらく、4単位程度の波頂部をもつ波状口縁となり、器形は体部に括れをもつ鉢形土器となろう。口縁部は無紋で波頂部から二又に分かれる沈線下に抱球状の構図をもった紋様帯が設けられる。抱球状の構図内にはＲの撚糸紋が施紋され、さらに下から上に向かっての刺突列が沈線の区画に沿って施される。内面には波頂部から隆起線が降り、さらに器表面の紋様帯上限を画する沈線に対応するように隆起線が巡っている。内面の調整、器表面の無紋部分の調整ともに丁寧に行われている。胎土には若干の砂粒を含むが焼成は堅緻で、うすい橙色を呈する。

第20図53は橋状の把手をもつ平口縁壺形土器の口縁部破片である。口縁部は僅かに外反しながら内傾する。橋状把手は欠損するが、口縁下に貼付けられた隆起帯上から頚部の隆起帯まで架けられていたものらしい。体部にはＬＲ縄紋が縦位に回転施紋され、頚部隆起帯下に沿って引かれた沈線が一部体部まで伸びている。内面の調整は比較的丁寧に行われている。胎土には砂粒を多く含み、焼成は良い。色調は灰褐色を呈する。第20図54はＲ撚りの撚糸紋を地紋として、沈線を加えた土器片。内面の調整は丁寧である。胎土に砂粒を含むが、焼成は良好。灰褐色を呈する。第20図55、56は無紋地に沈線が加えられた土器片。ただし、55の場合は縄紋が施紋されている可能性もある。沈線は浅いが、施紋後の調整が行われ、ことに55では沈線の右側を無紋にするにあたり、沈線の稜を大きくそぎ取っている。内面の調整は55では不良、56は丁寧に行われている。両者とも胎土に砂粒を含むが焼成は良く、灰褐色を呈する。第22図71は口縁が外反ぎみに開く深鉢形土器の口縁部～体部片である。口縁無紋帯部分は体部よりも厚手に作られている。そして、その境には沈線が1条巡り、下位の体部上半にはＬの撚糸紋を地紋として、磨消縄文によるモチーフが描かれている。沈線の描画は丁寧で施紋後の無紋部分の調整とともに沈線自体も再調整されている。内面の調整も土師器のミガキに近く非常に丹念である。胎土には少量の砂粒を含むが焼成は良好である。全体に灰褐色を呈するが、僅かな黒斑部分も認められる。







第22図　遺構外出土土器（３）

第23図　遺構外出土土器（４）

6)遺構外出土石器

石鏃・尖頭器（第24図74、75）

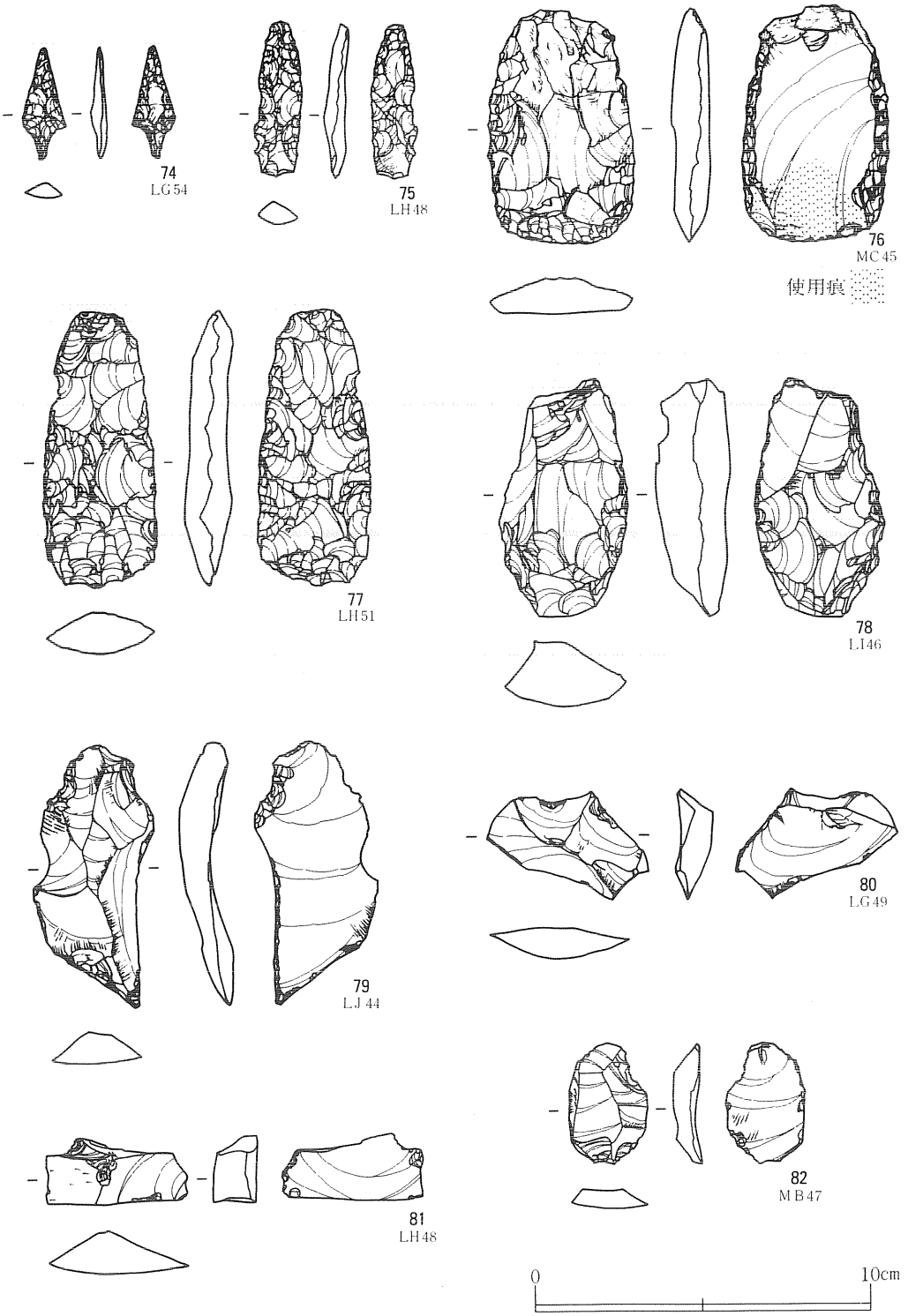
第24図74の有茎鏃は、図右側の面に一部素材の主要剥離面を残すほかは、両面とも側縁からの加工によって形を仕上げている。図左側においた面の右翼は尖るが左翼先端は丸みを帯びる。第24図75は先端を折損する尖頭器である。先端部は素材剥片の打面側に作られ、直線的な基部縁は素材剥片の末端をそのまま残している。図左側の面に加えられた側縁の加工は非対称で、中軸やや左寄りに明瞭な稜を形づくる。対して図右側の面での側縁の加工は比較的平坦である。

篦状石器（第24図76、77）

第24図76は横長の剥片を用いて作られた篦状石器である。素材の表面には主要剥離面から末端と打面側に比較的大きな剥離を加えている。主要剥離面には末端と打面側に表面側からの細かな剥離が連続的に加えられるのみで、主要剥離面自体が大きく残されている。図の下に置かれた刃縁は素材の主要剥離面側から幅3～5㎜の細かな剥離を加えて作られているが、表面からの加工は施されていない。石器基部は母材の礫皮に近く粗い面を呈するが、表面側から3回程、主要剥離面側から4回程の剥離が施されている。図左側の面の刃縁近くには使用による光沢が残されている。第24図77は両面を加工した篦状石器である。側縁に加えられた剥離は表裏両面から交互に施されている。刃縁は図左側の面で縦長の細い剥離を加え、図右側の面では短い剥離を重ねている。図左側の面の稜は顕著であるのに対し、図右側では明確な稜は形成されていない。

剥片（第24図78～第25図87）

第24図78、篦状石器の未製品とも考えられる石器である。肉厚の素材を用い両面とも全面を加工し、上端は図左側の面の左側縁への加撃によって折りとられている。両側縁は両極打法によって潰れ、特に図左側の面の左側縁が著しい。第24図79の縦長剥片は、主要剥離面の打面左に主要剥離面側から数回の調整剥離が加えられ、主要剥離面の左側縁には使用によると思われる微細な剥離が認められる。第24図80の横長剥片は、主要剥離面側の打面の左側縁に僅かに微細な剥離が認められる。第24図81は縦長剥片の末端および打面側を、それぞれ主要剥離面中央と表面の稜を打点としての加撃によって折りとっている。第24図82は両極打法によって得られた剥片である。第25図83も両極打法による剥離痕が表面に残る剥片である。図左側の表面下端より左側の潰れが著しく、また図の上端の打面に近い部分には大きな階段状剥離痕が残されている。第25図84は図の両側縁に階段状剥離が認められる。また、下端は主要剥離面側からの加撃によって折り取られている。第25図85は末端の表面から2回の剥離が加えられた後、逆に主要剥離面から数回にわたって階段状剥離が施されている。第25図86は礫皮を残す剥片である。おそらく、図左側の面の右側縁下の礫皮からの加撃によって分割された剥片を主要剥離面側か

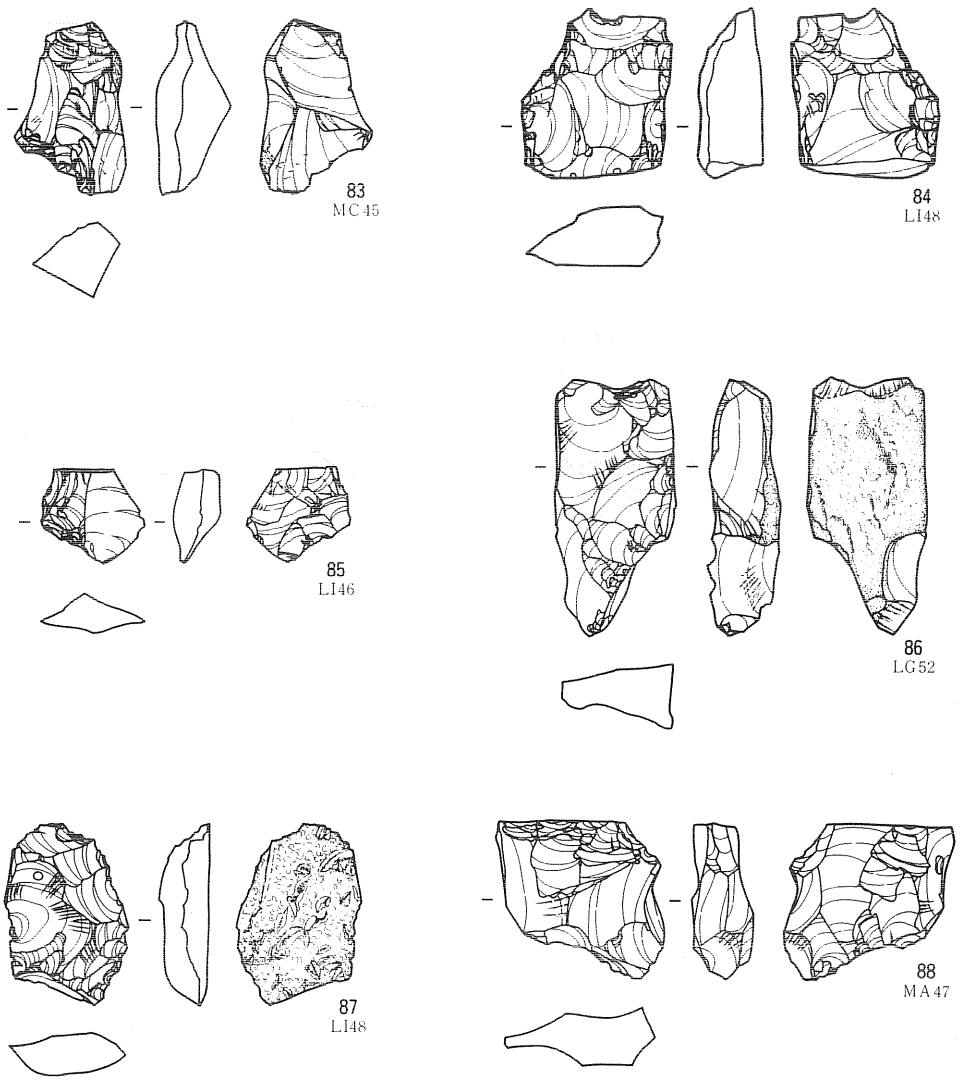


第24図　遺構外出土石器(１)

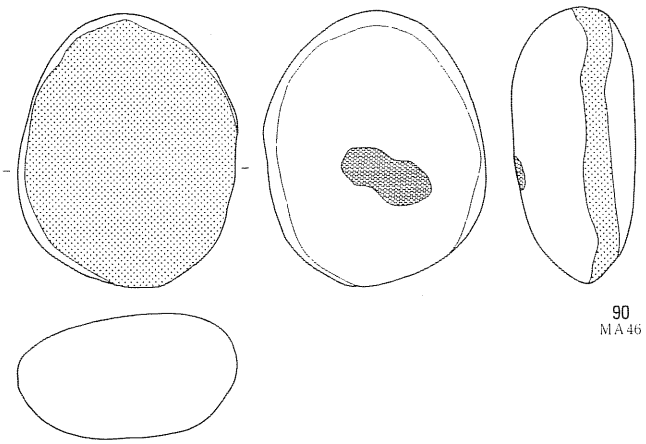
らの加撃でさらに折断し、その両折断面と図上端の礫皮面を打面としての剝離を全面に加えている。結果、主要剝離面は残されなかったものではないか。第25図87も礫皮を残す剝片である。末端が蝶番剝離で終わる図の下端の礫皮からの加撃を除いては、素材の縁辺に亀甲形になるような浅い角度の剝離を加えている。

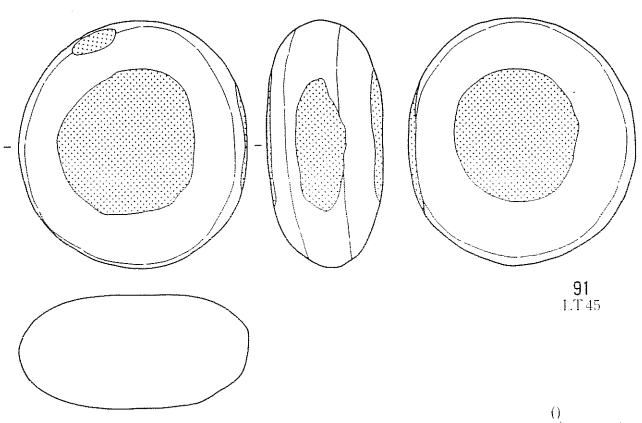
石核（第25図88）

図の上端に母材の節理面を残しそこを打面としての剝離痕が図左側の面に、また、下端に残



第25図　遺構外出土石器（２）





第26図　遺構外出土石器（３）

る剝離面を打面としての剝離痕が図右側の面に残っている。

凹石（第26図89）

偏平な楕円形礫を素材とする。凹みは表裏両面に残されるが、素材の長軸に沿って点々と残る。図の左側の面に残る凹みは深いが、右側の面の凹みは浅い。

磨石（第26図90、91）

第26図90は、やや厚手の楕円礫を素材とし、図の左側においた面と周縁に磨り面を残す。右側の面中央やや下に鋭い縁辺をもつ工具によって連続的に敲打された痕跡が残されている。第26図91もやや厚手の円礫を素材とし、その両面と周縁の一部に磨り面を残している。

第２表　遺構外出土石器出土区・石材・重量一覧

番　号	出土区・層位	石　材	重 量g	番　号	出土区・層位	石　材	重 量g
第24図74	LG54Ⅰ層	頁　岩	1	第25図83	MC45Ⅲ層	頁　岩	１６
第24図75	LH48Ⅱ層	黒色頁岩	4	第25図84	LI48Ⅱ層	頁　岩	３３
第24図76	MC45Ⅲ層	頁　岩	３９	第25図85	LI46Ⅲ層	頁　岩	6
第24図77	LH51Ⅲ層	頁　岩	３９	第25図86	LG52Ⅲ層	頁　岩	３１
第24図78	LI46Ⅲ層	頁　岩	５７	第25図87	LI48Ⅱ層	黒　曜　石	１９
第24図79	LJ44Ⅲ層上	頁　岩	２３	第25図88	MA47Ⅲ層下	頁　岩	２５
第24図80	LG49Ⅱ層	頁　岩	9	第26図89	LG49Ⅲ層上	花崗閃緑岩	５４９
第24図81	LH48Ⅲ層	頁　岩	１１	第26図90	MA46Ⅲ層	砂質凝灰岩	６０５
第24図82	MB47Ⅲ層下	頁　岩	5	第26図91	LJ45Ⅲ層	緑色凝灰岩	６１１

第2章　ま と め

今回の上祭沢遺跡の調査では縄紋時代早期から中世にかけての遺構・遺物が検出された。ここでは、縄紋時代早期の土器と中世の遺構である塚について若干の考察を行い、まとめに代えたい。

第1節　縄紋時代早期の土器について

上祭沢遺跡の調査で出土した遺物の中で、第20図37～42に挙げた第Ⅰ群第1類土器は条痕紋（あるいは多条沈線紋）施紋後、細い粘土紐の貼付けによる細隆起線紋により幾何学的な紋様を施すことを特徴にもつ土器である。同じような特徴をもつ土器は東北地方北部でムシリ1式、中南部では槻木1式と呼ばれ(註1、2)、縄紋時代早期中葉の時期に東北一円に分布する。第3表に隣接地域の類似資料の中からいくつかについてその特徴を整理して示す。

いずれも破片資料が多く、実測図にあたって器形を知ることのできた図上復元資料は青森・売場遺跡の2個体、岩手・上里遺跡の1個体である。これらは口縁～体部にかけてほぼ直線的に立ち上がる円筒形の鉢ないし深鉢形土器であり、底部は偏平な丸底あるいは平底となるようである。本遺跡の資料も口縁部の立ち上がり、体部の湾曲の程度から推察すると、ほぼ同じような形態を示すように思われる。

口縁部の形状には青森・売場遺跡のように指頭による調整でやや丸みを帯びるものと、岩手・下長谷地遺跡のように平らに整形されるものとがあるようであり、山形・いるかい遺跡例も拓影に付けられた断面図を見る限り前者に似て幾分丸みを帯びているようである。本遺跡の場合には、比較的明瞭な面取りがなされ、やや外側に向きながら平らに整形されている。おそらく、岩手・下長谷地遺跡の例に似るものであろう。

器面全体を調整する条痕紋はいずれの遺跡にもあり、ほとんど横位あるいは斜位に施されている。しかし、宮城・富沢遺跡のようにその1条づつの単位が狭いと明記される資料もあり、条痕紋の条間隔には広狭があるようである。本遺跡の資料の体部外面の条間隔は10㎜と極めて広く、あるいは青森・売場遺跡第Ⅵ群Ａ類土器、岩手・上里遺跡第Ⅰ群6類に見られるような多条沈線（条線）と理解すべきかも知れない。

細隆起線紋の施紋方法については青森・売場遺跡例を除いて総て貼付けであるとされている。売場遺跡第Ⅰ群Ｄ1類土器については、箆状工具の先端で工具の移動にそった粘土のめくれを作る施紋法（ａ類、ムシリ型微隆起線）が主体になると報告されている。売場遺跡第Ⅰ群Ｄ1類土器の拓影を見て気付くのは細隆起線の1条づつの間隔が狭くかつ長いものが多いという点

であり、短い細隆起線を加えてハシゴ状の紋様を構成する山形・いるかい遺跡例や宮城・富沢遺跡例とは対照的である。本遺跡例の第20図37、39の口縁部直下および体部の紋様帯上下に水平に巡る部分については、売場遺跡と同種の施紋法が採られた可能性が全くない訳ではない。しかし、おそらく紋様帯中と判断される38については先行して施された条痕紋が明瞭に残されており、貼付けによる施紋であることは確実である。したがって、施紋法においては売場遺跡第Ⅰ群Ｄ１類よりはいるかい遺跡例、富沢遺跡例に近縁の関係をもつものと思われる。

器厚は薄いものが多い。胎土については、山形・いるかい遺跡と岩手・上里遺跡例に繊維を含むものありとされるのみで、繊維の混入は無いのが多いようである。また金雲母を含むことが青森・売場遺跡、岩手・下長谷地遺跡で報告されており、本遺跡例とも共通する。色調は褐色系に傾くようであり、本遺跡例もまた同様である。

各資料の報告内容と本遺跡の第Ⅰ群第1類土器との比較を簡単に行ったが、概して共通点を多く見いだすことができる。ただし、紋様上の最大の特徴である細隆起線の施紋方法ではムシリ１式とされる青森・売場遺跡第Ⅰ群Ｄ１類とその他の資料では大きく異なり、その差は紋様の構成上の違いにも反映されるようである。東北北部のムシリ1式と東北中南部の槻木1式の型式差を端的にこの点に認めれば、本遺跡第Ⅰ群第1類土器は槻木1式の範疇で理解される資料であろう。ちなみに、県内では大館市の上ノ山Ⅰ遺跡で間隔が狭くかつ条の長い細隆起線紋を施

第3表　他地域におけるムシリ１式土器・槻木１式土器の特徴

遺跡名	器形	口縁部形状	条痕紋	細隆起線紋の特徴	胎土・焼成・色調
青森・売場遺跡(註3) 第Ⅵ群Ｄ１類土器	円筒形深鉢、底面平坦、底辺部湾曲	口端は丸みを有し指圧痕残るもの多い	外面：横位 内面：横位	貼付け（ｂ類）は少なく、篦状工具を密に引いて粘土のめくれを調整 （ムシリ型微隆起線）	繊維無、粒子細かく均質、金雲母含むもの有
山形・いるかい遺跡(註4) 第１群９類土器		外傾しながら薄くなる単純口縁	外面：左上～右下 内面：左上～右下 横位ｏｒ無紋	木の葉、レンズ状区画内にハシゴ状の貼付構成、鋸歯状貼付、隆線両側に調整	繊維の有無、両者あり、前者暗灰色系、後者明褐色系
宮城・富沢遺跡(註5) Ⅰ・Ⅲ区Ⅰ類土器			外面：有 内面：有 幅は狭い	隆線は貼付により隆線沿いにナデ、ハシゴ状の幾何学紋 幅2㎜、高さ１㎜、断面山形状	繊維無、にぶい褐色
岩手・下長谷地(註6) 第Ⅰ群ａ類土器		口縁端、平らに整形	外面：有 内面：不明	断面三角形、縦位、斜位、横位に貼付け、うち横位のものが紋様帯を区画	繊維無、金雲母含む暗褐色
岩手・蛇王洞洞穴(註7) 第Ⅱ層土器		平口縁	外面：有 内面：無	口縁部紋様帯中に縦位、格子目の貼付け	
岩手・上里遺跡(註8) 第Ⅰ群７類土器	円筒形の深鉢形土器、底部は偏平に傾く丸底	緩波状、緩く外反	外面：やや左上～右下に傾く横位 内面：有	器高（20㎝程）の半分以上の紋様帯に１～２㎝間隔の斜位 平行の隆線、紋様帯下端に一周の隆線、隆線両側にナデあり	少量の繊維、砂粒混入

した資料１点が得られており（報告書第39図46）、ムシリ1式に比定できうるものと考えられる。(註9)
また、本庄市神沢海岸遺跡では後続する上川名1式に比定された内外面に縄紋を施紋した土器を主体とする中に、槻木1式に比定された細隆起線紋施紋の資料（Ｂ類土器）がある。(註10)ただし、その資料の中には地紋に縄紋を施紋する例が含まれている。本遺跡第Ⅰ群第2類とした縄紋施紋の土器も胎土・焼成の点で第1類と極めて近似するが、あるいはこの神沢海岸遺跡のＢ類土器の在り方に通じるものかも知れない。

第２節　中世の遺構と遺物について

県内でこれまで調査された中世墳墓あるいは経塚としては、平鹿郡雄物川町大沢の北野遺跡、湯沢市松岡にある松岡経塚、雄勝郡羽後町三輪に所在する十三本塚経塚がある。その他、秋田県遺跡地図の一覧表中に経塚あるいは墳墓、もしくは単に塚と記されている遺跡は54カ所存在する（第4表)。県内での分布を見ると、雄物川上中流域の雄勝・横手・平鹿地方と昭和町、井川町など南秋田に集中し、その間をつなぐ河辺郡、仙北郡内や由利郡内にも散在する。県北部では鹿角と能代にそれぞれ1カ所づつあるのみである。

ところで、中世初期の経塚出土の経外陶器の地域相について考察した吉岡康暢は秋田県内の資料として湯沢・松岡経塚、大森・上溝観音寺経塚、雄物川・大沢経塚、横手・閑居長根1号経塚、男鹿・加茂青砂経塚の例を扱っている。(註11)それによると、大沢経塚の中形叩打壺、松岡経塚の中形叩打壺１例と蓋に用いられていた片口鉢、加茂青砂経塚、閑居長根1号経塚の小形壺は須恵器系の製作技法を踏襲した珠洲系陶器と分類され、松岡経塚の中形叩打壺他1例、上溝観音寺経塚の中形叩打壺は須恵器系と瓷器系の製作・焼成技術を合わせ持った須恵器・瓷器折衷系陶器として分類されている。そして、後者資料の製作年代を在銘経筒の年代に合わせ、松岡経塚の例を12世紀後葉、上溝観音寺経塚の中形叩打壺にはおよそ12世紀後半の年代を与えている。(註12)

本遺跡ＳＸ03から出土した第16図34、35の資料は器形を復元することのできない小片であるが、外面は素紋板状原体、内面は円形素紋の原体で叩き締めて成形し、かつ橙色に発色している。この特徴は、吉岡が須恵器・瓷器折衷系陶器の特徴としてあげた叩打成形技法と酸化焔焼成による赤褐色の器面発色の組み合わせと対応するのではないかと思われる。もし、この観察に違いがなければ、本遺跡の資料は吉岡が挙げた松岡経塚、上溝観音寺経塚の中形叩打壺とほぼ同じような製作年代が与えられ、したがって、ＳＸ02、ＳＸ03には平安時代末期から鎌倉時代の初めにかけての年代が与えられる。

県内で調査された経塚のうち、羽後町十三本塚経塚は江戸期の絵図によれば始め13基の円丘が列をなしていたとされるが、明治期から昭和35年までの間にすべて消滅している。幸いにも

昭和28年の段階で残存していた7号および10号の2基については調査記録されている(註13)。そのうち径7～7.2m、高さ1.22mの規模をもつ10号の記録によれば、表土直下中央にやや大きめの石を中心として477個の一字一石経らしい小石が径60～65cm、厚さ16cmの塊状にあり、宋銭、人骨片などが周囲から出土したという。経石はなかったが塚中央に小石の集積が認められる点は、本遺跡ＳＸ02、ＳＸ03の頂部の状態に類似すると言えなくもない。十三本塚経塚の報告者はその造営の時期を鎌倉時代におかれる可能性があると述べている。

本遺跡のＳＸ02、ＳＸ03についてはその両者ともおよそ半分を削られており、初期の中世陶器と思われる陶器片が出土したものの、それが墳墓にともなう蔵骨器であったのか、経外容器であったのか判然としない。県内の塚を伴う中世墳墓、また経塚とも調査例が少なく、比較を容易に行えないのが現状である。また十三本塚経塚のように一字一石経とともに人骨片が出土するような、墳墓とその追善供養の痕跡が同一の遺構に残される例もあるようである。いずれ、年代、性格、さらに東北北部の中世史の中での位置付けなど、類似遺跡の調査が進むことで明らかになることが多いと言わざるを得ない。

註

註１　型式名に用いられる数字についてはアラビア数字を用いた。ムシリ1式については設定者自身がローマ数字を用いている経緯があるが、戦後の型式名に用いられる数字の混乱については次の文献が詳しい。
柳沢清一「加曾利Ｅ式の細別と呼称」『古代』80　1985(昭和60年)

註２　ムシリ1式土器の主体となる土器は早稲田3類中にも見られる沈線紋の施された土器で、細隆起線紋の施された土器の割合は少ない。売場遺跡では第Ⅵ群Ａ類がこれにあたる。ムシリ1式土器に2種類の土器が存在することは、槻木１式土器との関係を考える上で重要な点であるが、ここではその問題には触れず、単に細隆起線紋の施された土器に限って考える。なお、槻木１式は関東地方野島式との対比が言われるが、林（1982）が指摘するように、その直接の関係はないものと思われる。管見の限りではあるが、胎土・器厚の点においてその差は著しい。野島式土器の細隆起線の施紋法に関しては売場遺跡報告者が野島型隆起線としてムシリ1式土器の施紋法と対比している。槻木1式土器の貼付けの手法がどちらにより近いものかは不明である。
林謙作「縄文早前期の土器ー北海道南部、東北地方」『縄文土器大成１早・前期』講談社　1982(昭和57年)

註３　青森県教育委員会「売場遺跡発掘調査報告書」1984（昭和59年）

註４　山形県教育委員会「いるかい遺跡発掘調査報告書」1983（昭和58年）

註５　仙台市教育委員会「富沢遺跡第28次発掘調査報告書」1988（昭和63年）

註６　岩手県教育委員会「御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書」1982（昭和57年）

註７　岸沢長介・林謙作「岩手県蛇王洞洞穴」『石器時代』第7号 1965（昭和40年）

註８　岩手県埋蔵文化財センター「上里遺跡発掘調査報告書」1983（昭和58年）

註９　秋田県教育委員会「国道103号大館南バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ」1988（昭和63年）

註10　本荘市教育委員会「神沢海岸遺跡」1971（昭和46年）

註11　吉岡康暢「経外容器からみた初期中世陶器の地域相」『紀要』第14号 石川県立郷土資料館 1985（昭和60年）

註12　松岡経塚:建久7年[1196]、上溝観音寺経塚:久安5年[1149]

註13　奈良修介・豊島昂「秋田県の考古学」吉川弘文館 1967（昭和42年）

参考文献

山内清男「関東北に於ける繊維土器」『史前学雑誌』第1巻第2号 1929（昭和4年）

山内清男「同 追加 第一」『史前学雑誌』第1巻第3号 1929（昭和4年）

林謙作「縄文文化の発展と地域性－東北」『日本の考古学Ⅱ縄文時代』河出書房 1965（昭和40年）

縄文文化検討会「東北・北海道における縄文時代早期中葉から前期初頭にかけての土器編年について」第4回縄文文化検討会シンポジウム資料 1989（平成元年）

第4表　県内塚一覧(秋田県教委「秋田県遺跡地図」1976より作成)

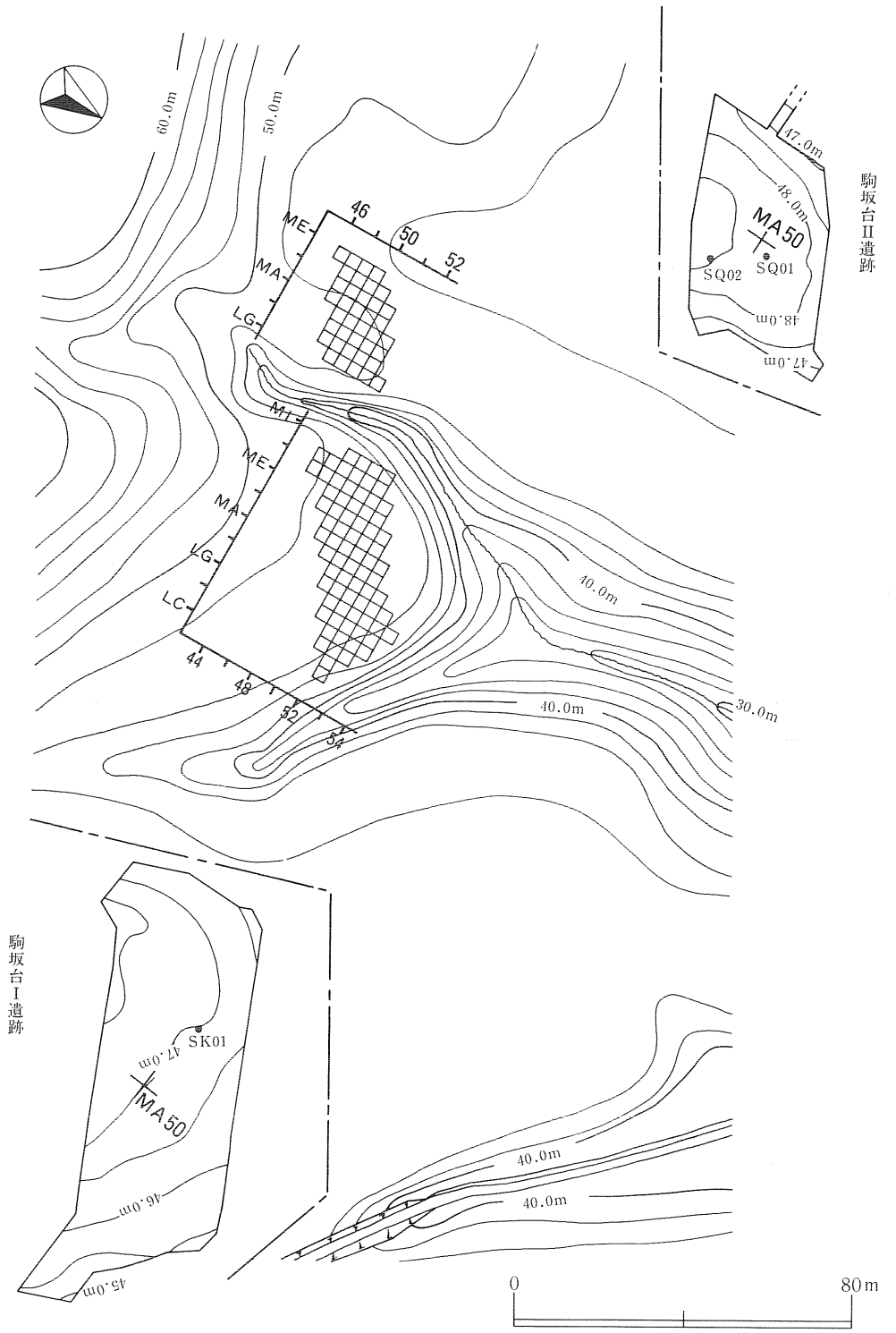
遺跡名	所在地	規模（単位m）	塚・基数	遺構・遺物
河戸川経塚	能代市河戸川			須恵器・経石
石野遺跡	鹿角市十和田瀬田石			経石
北野Ⅰ遺跡	秋田市金足			骨壺・火葬人骨
小林Ⅱ遺跡	秋田市上新城	径8×7、高さ1		
空素沼Ⅰ・Ⅱ遺跡	秋田市寺内	径5×6、高さ1	2	
根笹山遺跡	秋田市寺内	径6、高さ1		
館岡B遺跡	南秋田郡井川町蒲田			土師器壺
南台遺跡	南秋田郡井川町八田			骨壺(須恵器、土師器)、人骨
白洲野盛土群	南秋田郡昭和町大久保			
槻木盛土群	南秋田郡昭和町豊川槻木			須恵器壺
大部沢遺跡	南秋田郡昭和町豊川上虻川	径8、高さ1		
文覚台遺跡	南秋田郡昭和町豊川上虻川			鈴、錫杖頭金具
薬師積石群	南秋田郡昭和町豊川上虻川			壺3
大工沢遺跡	南秋田郡昭和町豊川上虻川			須恵器片
蛭根遺跡	秋田市寺内	径7、高さ1.5	3	
飛沢遺跡	河辺郡河辺町三内			須恵器
鍛冶屋敷遺跡	河辺郡河辺町岩見			一字一石経
上屋敷Ⅰ遺跡	仙北郡田沢湖町田沢			
湯ノ日遺跡	河辺郡雄和町川添			須恵器片
長者森遺跡	河辺郡河辺町式田			須恵器片
大楽Ⅱ遺跡	仙北郡西仙北町土川	径2、高さ1		
土川遺跡	仙北郡西仙北町土川			一字一石経
高寺経塚	大曲市内小友			一字一石経
大森観音寺経塚	平鹿郡大森町上溝			経筒、経甕
陀弥長根遺跡	仙北郡仙南村金沢			双鶴文鏡、土師器、須恵器片
一字山遺跡	仙北郡仙南村金沢			経筒
鳥井長根経塚群	横手市金沢		3	箱、刀、斧、経筒、経文、須恵器
隅居長根経塚群	横手市金沢			古鏡蓋付陶製経筒（須恵器）、古鏡蓋付銅製経筒(鎌倉)
保土森古墳	横手市金沢中野			骨壺、須恵器片
根城経塚	由利郡由利町川西			
九日町経塚	由利郡矢島町元町			経石
大沢遺跡	平鹿郡雄物川町大字根羽子沢			経壺、経筒、紙本経
廻館十三塚	平鹿郡雄物川町東里			
台山Ⅰ	由利郡東由利町老方			土師器、須恵器
増田多古屋敷	平鹿郡増田町増田			経石、曲玉
松岡経塚	湯沢市松岡			金銅経筒 須恵器、土師器、刀子、菊花双雀文鏡
鎌沢盛遺跡	田沢湖町梅沢			
三本杉経塚	仙北郡神岡町北楢岡			経石
東山本経塚	仙北郡仙南村飯詰			
坊の塚遺跡	平鹿郡平鹿町浅舞			
郷Ⅰ遺跡	平鹿郡雄物川町今宿			
睦成字七日市塚群	横手市睦成		2	
小吉山塚群	横手市大鳥町		5	積石塚
小吉山火葬墓	横手市大鳥町		2	積石塚、石棺
大鳥井山十三塚	横手市大鳥町			須恵器
塚堀字塚腰塚	横手市塚堀		1	
城野岡塚群	横手市赤坂		2	
館の下十三森	雄勝郡羽後町田沢		複数(墳塚列)	
貝沢拾三本塚	雄勝郡羽後町貝沢		13	経石、宋銭
浦田山十三森	雄勝郡羽後町西馬音内		複数(墳丘列)	
大谷経塚	雄勝郡稲川町			
首切森・積石塚	秋田市上新城白岩	径2×1、長方形積石		
七ツ森遺跡	秋田市楢山金照町			
向山（加茂青砂）	男鹿市戸賀加茂青砂			須恵器経壺

駒坂台Ⅰ遺跡

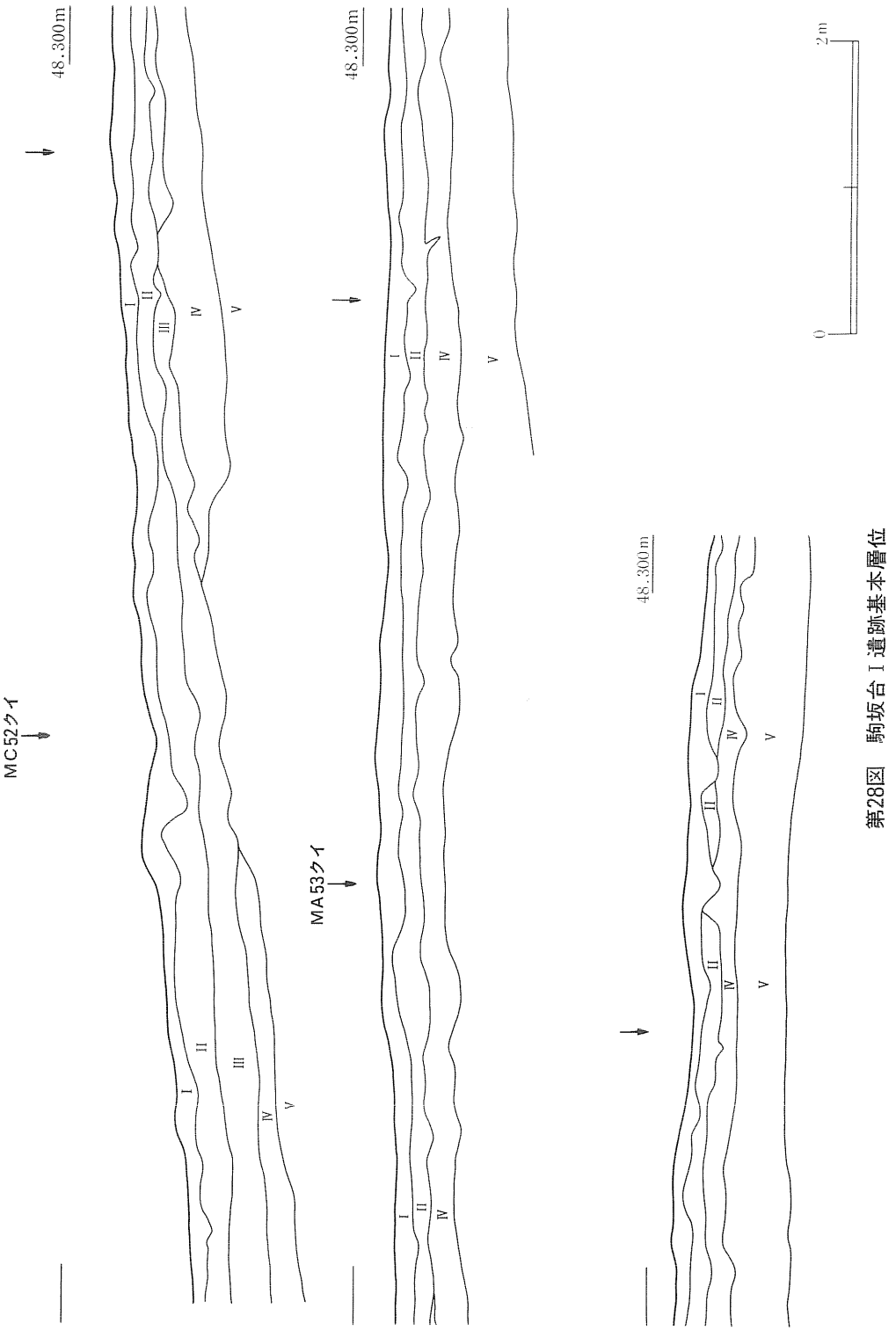
(5KZDⅠ)

駒坂台Ⅱ遺跡

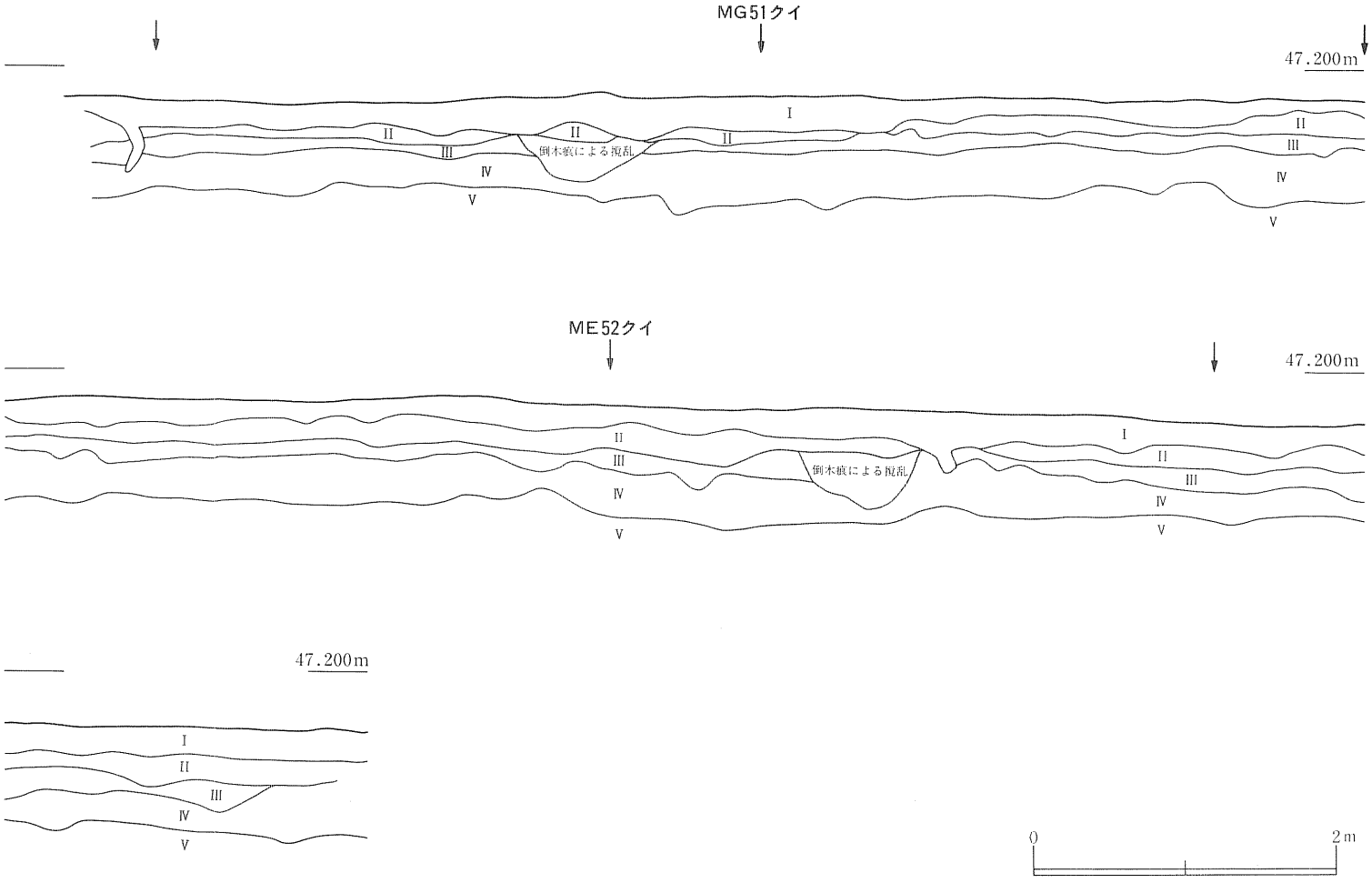
(5KZDⅡ)



第27図　駒坂台Ｉ遺跡・駒坂台II遺跡周辺地形およびグリッド配置図



第28図　駒坂台Ⅰ遺跡基本層位



第29図　駒坂台II遺跡基本層位

第1章　調査の記録

第１節　遺跡および調査区の地形・層位

駒坂台Ⅰ遺跡、駒坂台Ⅱ遺跡は、白熊沢川南西側の台地上に位置する。白熊沢川南西側の台地を北西側から開析する谷は、台地の西縁から120m程入った地点で大きく2つに分かれるが、そのうち南側の小支谷の先端は浅く2つに分かれている。駒坂台Ⅰ遺跡の調査区は、この浅い二又に分かれた沢頭が挟んだ舌状台地の中央部分にあたり、駒坂台Ⅱ遺跡の調査区はその南側に隣接する舌状台地の付け根南東部分にあたる。駒坂台Ⅰ遺跡は調査区中央で標高37mを測り、駒坂台Ⅱ遺跡は39mを測る。両調査区の間にある沢との比高は駒坂台Ⅰ遺跡側で+8.5m、駒坂台Ⅱ遺跡側で+9.5mである。また、駒坂台Ⅱ遺跡側の舌状台地は東から西に向かって緩い斜面になっている。調査区の設定された箇所、台地の付け根南東部分はその最も高位の地点である。基本層位は両調査区で共通し、

第Ⅰ層　10YR2/2 黒褐色、乾燥状態では2.5Y6/2灰黄色を呈する。腐植土。

第Ⅱ層　10YR3/3～3/4 暗褐色、やや粘性を帯び孔隙も僅かに認められる。木炭粒を含む。

第Ⅲ層　10YR5/4～4/4 にぶい黄褐色～褐色、Ⅳ層との漸移層で僅かに木炭粒を含む。

第Ⅳ層　10YR5/4～5/6 にぶい黄褐色～褐色、粘性強く堅く締る。

第Ⅴ層　10YR5/4 にぶい黄褐色、堅く締まり部分的に砂質土を混じえる。

の順である。

遺跡の載る台地の大半は山林であるが、白熊沢川に面した一部は耕作地である。

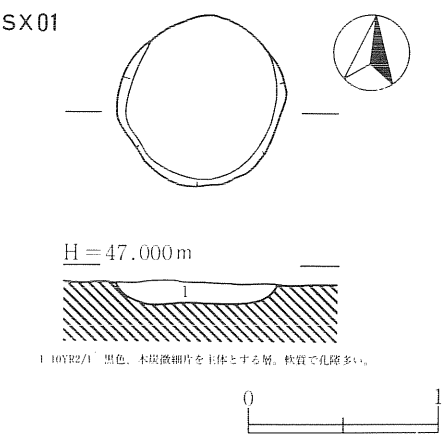
第２節　検出された遺構と遺物

検出された遺構は少なく、駒坂台Ⅰ遺跡で土坑1基、駒坂台Ⅱ遺跡で炉跡1基、組石遺構1基である。遺構外からの遺物は駒坂台Ⅰ遺跡で35点、駒坂台Ⅱ遺跡で851点を数えるが、いずれも縄紋時代の土器片、石器および剥片類である。

1)土坑(駒坂台Ⅰ遺跡)

ＳＫ01

駒坂台Ⅰ遺跡調査区の中央やや西寄り、ＭＤ50区で検出した。径86cm程の円形を呈し、深さ11cmを測る。覆土は、木炭砕片を多量に含んだ黒色土



第30図　駒坂台Ⅰ遺跡ＳＫ01土坑

からなる。出土遺物はなかった。確言できないが、伏焼の炭焼窯である可能性が大きい。

2)石組炉(駒坂台Ⅱ遺跡ＳＱ01)

駒坂台Ⅱ遺跡の調査区中央、ＬＪ50区で検出した。深鉢形土器の体部を埋め込み、南西側を除いた周りを5個の礫によって囲っている。また、南側に4個の礫を配列し、その先端近くで両脇にも小礫を1個づつ配している。さらに炉に近くやや南に偏った部分の東西にも1個づつの礫が置かれている。焼土は埋め込まれた土器の東側に20×15cm程の範囲で確認された。土器の埋められた部分の周囲には径65cm程度に広がる暗褐色土が認められたが、断面の観察で土器埋設時の掘り方内の充填土であることが判明した。

第31図92は埋め込まれていた深鉢形土器の体部である。器面全面にＲＬ撚紐を縦位に回転施紋した斜行縄紋が施されている。器壁は比較的薄手に作られている。胎土には砂粒を含み、二次加熱による器面の剝落が認められるものの、焼成は良好である。縄紋時代後期前葉の時期のものであろう。

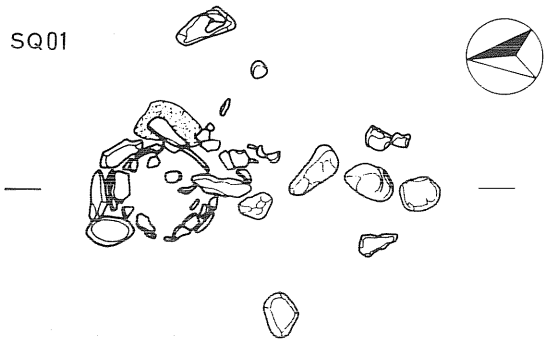
3)組石遺構(駒坂台Ⅱ遺跡ＳＱ02)

調査区の南側、ＬＩ48区で検出した。

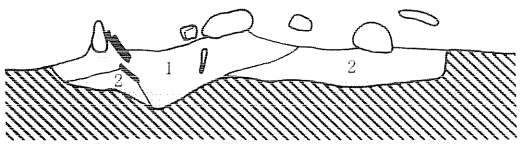
径5～35cm程度の礫16個を70×55cmの範囲に組み合わせ、作り上げている。構築にあたっては、長径25～35cm、短径10～20cm程度の比較的大きな礫4個を組んだ後、その隙間を埋めるかあるいは上部に積み上げるように拳大の礫12個を配している。拳大の礫のうち一部のものは、下部中央に置かれた大きな礫が火熱をうけて弾けたものであり、幾つかは接合する。しかし、組石の周囲を精査したが焼土化した痕跡は認められなかった。

組石の北東側には深鉢形土器の体部片が埋め込まれている。土器は細片に砕けており、図示しえたのは第31図の2片である。器面全体にＬＲ縄紋を縦位に回転施紋している。胎土には若干の砂粒を含み、この2片に限っては比較的堅緻に焼き上がっている。

SQ01

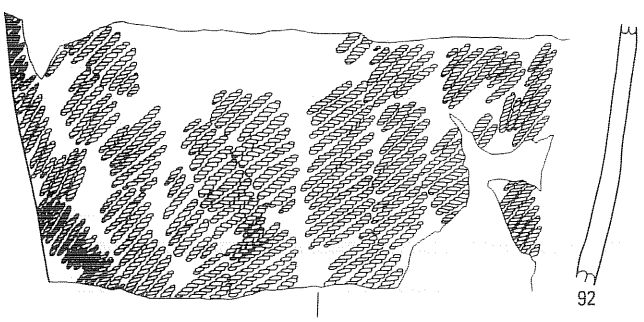


H＝48.500m



1　2.5Y6/4～5/4　にぶい黄～黄褐色。やや粘性を帯びるが孔隙多く、径5㎜以下のブロックに固結した状態。暗褐色土粒も混じる。

2　2.5Y4/4　オリーブ褐色。粘質であるが孔隙多く軟質である。微量の焼土粒を含んでいる。

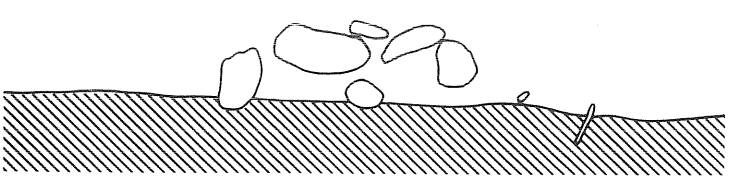


92

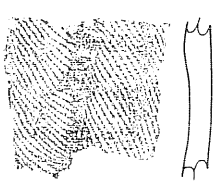
SQ02

※スクリーン・トーン部分
火熱をうけ弾けた同一母岩の礫

H＝48.900m



93



94

0　土器スケール　10cm

0　遺構スケール　1m

第31図　駒坂台Ⅱ遺跡SQ01石組炉、SQ02組石遺構および出土土器

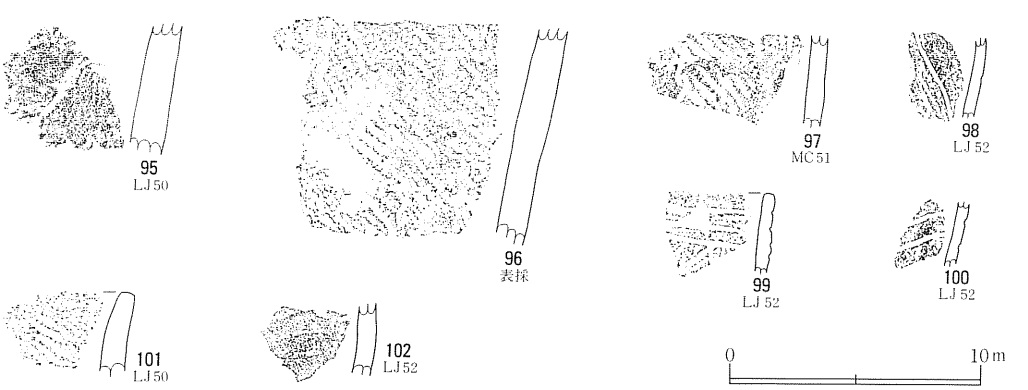
4)駒坂台Ⅰ遺跡遺構外出土土器

第32図95は鉢ないし深鉢形土器の体部破片である。器表面は摩耗し種別の判断はつかないが、縄紋が施されている。器壁は厚く繊維を含む。胎土に用いられた粘土は精選され、焼成は良い。第32図96も深鉢形土器の体部破片である。器表面にはＬＲ縄紋が縦位に回転施紋されている。内面には比較的丹念に横位の調整が施されている。やはり器壁は厚く、ごく少量ではあるが繊維を含む。胎土には僅かに砂粒が混入されている。焼成は良好。第32図97も鉢ないし深鉢形土器の体部破片。器表面には結節部を設けたＬＲ縄紋が縦位に回転施紋されている。内面は摩滅が著しく胎土に含まれた砂粒が露出している。焼成は比較的良い。第32図98～100は同一個体。99の口縁部資料、98、100の体部資料から判断するに、おそらく波状口縁で体部に緩い膨らみをもつ鉢形土器と考えられる。口縁部には3条の平行沈線が引かれ、さらに体部にも平行沈線紋がＲＬ縄紋を地紋として描かれている。内面の調整は丁寧に行われ、胎土にも精選された粘土が用いられ、焼成も良好である。第32図101はごく僅かに外反する鉢ないし深鉢形土器の口縁部破片である。器表面にはＬＲ縄紋が縦位回転施紋されている。胎土に砂粒を多く含み、内面の調整は粗く粘土中の砂粒が露出している。焼成も不良である。第32図97は鉢ないし深鉢形土器の体部破片。器表面は丹念に横位の器面調整がなされ、内面も丁寧な調整が施されている。胎土に用いられた粘土は精選されており、焼成も良い。

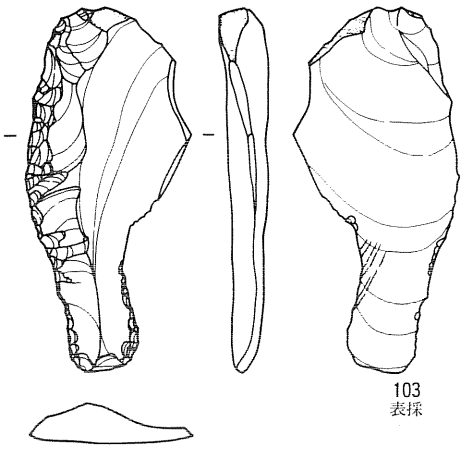
5)駒坂台Ⅰ遺跡遺構外出土石器

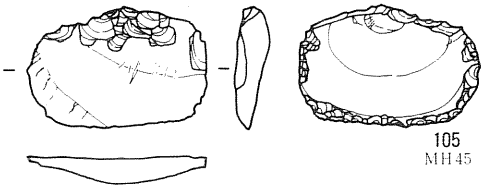
剥片(第33図103～108、第34図109)

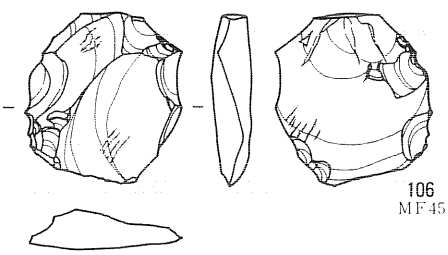
第33図103は、末端が蝶番剥離で終わる縦長剥片を用い、図左側の面、左側縁の全部と右側縁末端近くでは主要剥離面側から剥離が加えられている。また、右側縁の上部は2回にわたって折断されている。第33図104は、末端が節理面で折れた縦長剥片を用い、図左側の面、左側縁には使用による微細な剥離が認められる。左側縁下には末端が蝶番剥離で終わる先行剥離で

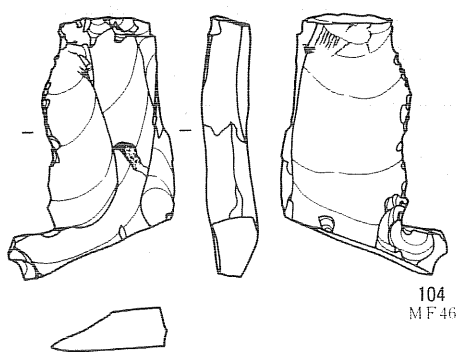


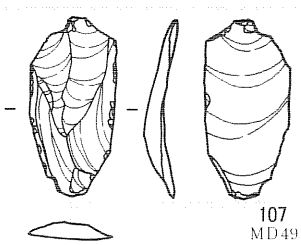
第32図　駒坂台Ⅰ遺跡遺構外出土土器

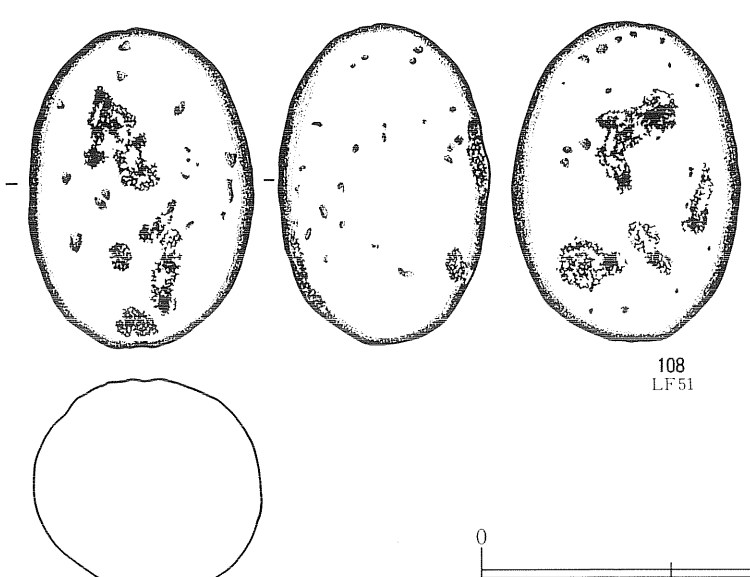










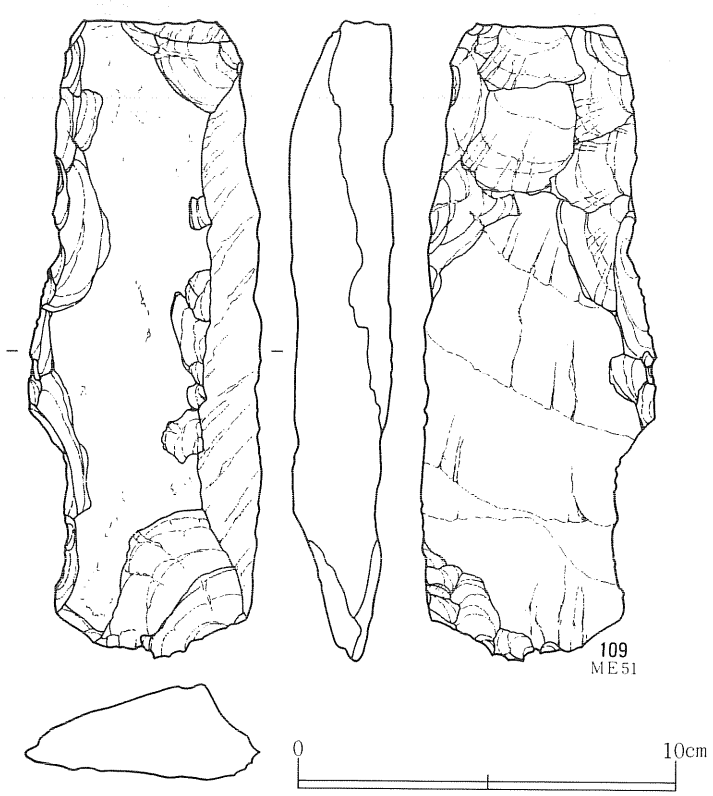


第33図　駒坂台Ⅰ遺跡遺構外出土石器(1)

できた突起があるが、表面からの剥離で加工しようとしたか、または折りとろうとした意図が窺える。第33図105は、横長の剥片を用い、直線的に終わる末端を主な刃縁とするための細かな剥離を表面から連続的に加えている。その調整剥離は側縁まで及ぶが、側縁での調整剥離は概して粗く、図左側の面、右側縁では折断した後のごく小さな剥離が加えられているのみで、折断面自体は大きく残されている。第33図106は末端が蝶番剥離で終わる剥片である。末端両側に調整剥離が加えられているが、図左側の面、左下端では表面側から1回の大きな剥離の後主要剥離面側から数回の小さな剥離が加えられている。右下端では表面側から3回程度の剥離が加えられているのみである。また、右側縁上部、打面の右側にも僅かではあるが主要剥離面からの細かな剥離が複数回認められる。第33図107は点状打面を有する縦長の剥片である。両側縁には使用によると思われる微細な剥離が部分的に認められる。第34図109は1側縁を刃縁として用いた大形の縦長剥片である。石材が凝灰岩のため、縁辺および剥離自体も粗いが、主要剥離面の打面に近い上部は、両側縁および打面からの加撃によって調整されている。また、末端の表面、主要剥離面にも調整が加えられる。図左側の面、左側縁が刃縁として用いられているが、下部の大きく湾曲した剥離は急斜度であり、上部の潰れ痕とともに使用の結果であろうかと思われる。

凹石（第33図108）

楕円形礫の表面に敲打による凹みが残されている。局所的な凹みを有する偏平礫のものと異なり、敲打痕跡は表面に散在する。



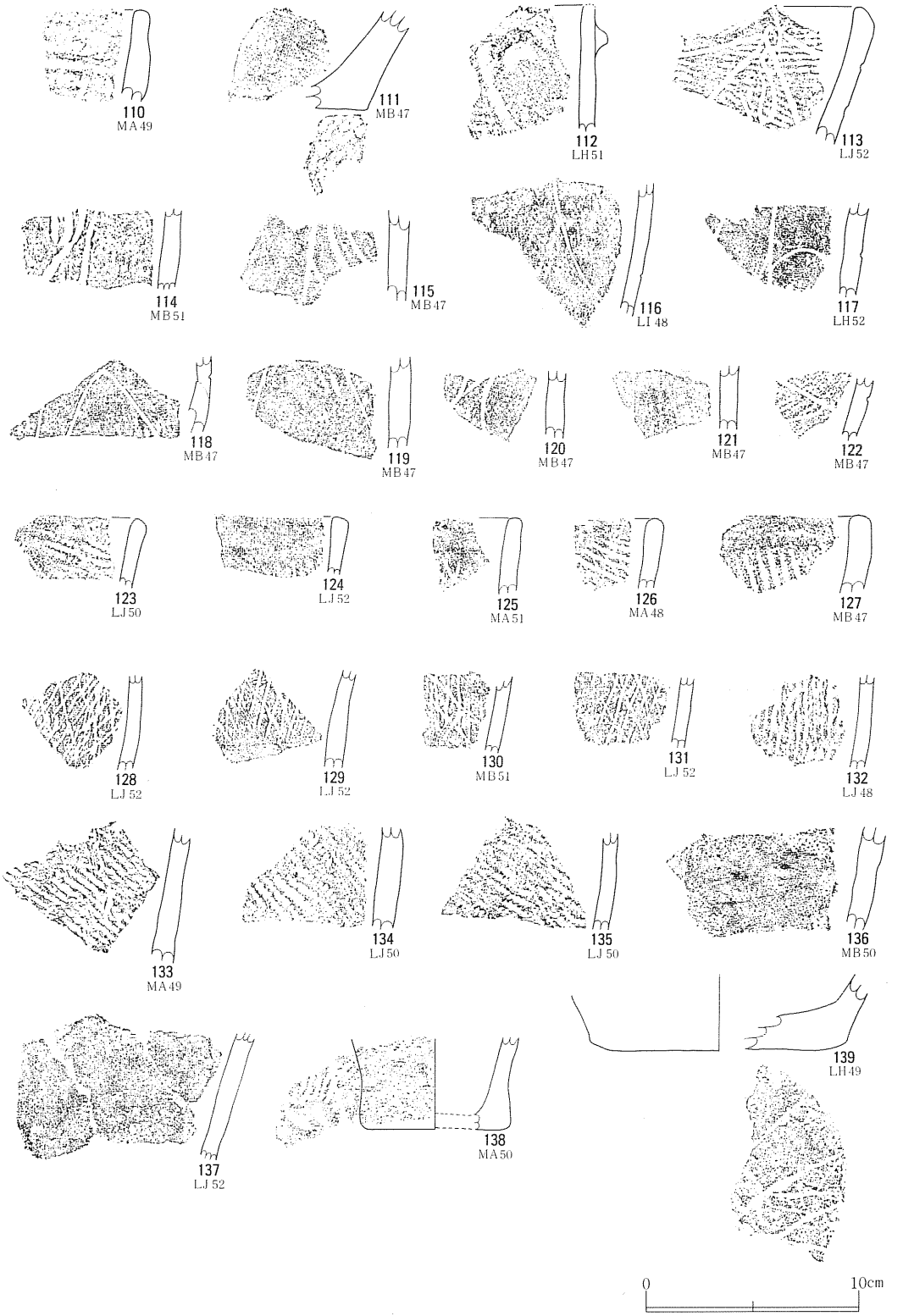
第34図　駒坂台Ⅰ遺跡遺構外出土石器（２）

第５表　駒坂台Ⅰ遺跡遺構外出土石器出土区・石質・重量一覧

番号	出土区・層位	石質	重量ｇ	番　号	出土区・層位	石質	重量ｇ
第33図103	調査区外表採	頁岩	３７	第33図107	MD49Ⅰ層	頁　岩	4
第33図104	MF46Ⅰ層	頁岩	３４	第33図108	LF51Ⅱ層	凝灰岩	３４７
第33図105	MH45Ⅱ層	瑪瑙	１２	第34図109	ME51Ⅱ層	凝灰岩	２９０
第33図106	MF45Ⅱ層	頁岩	２２				

6)駒坂台Ⅱ遺跡遺構外出土土器

第35図110は深鉢形土器の口縁部破片である。器表面には太いＬＲ撚紐が左上－右下の方向で回転されて横走する縄紋が施されている。内面の調整は丁寧に行われている。胎土には砂粒が含まれ、ごく僅かに繊維の混入も認められる。焼成は不良で、摩滅して脆い。第35図111は深鉢形土器の底部破片である。器表面は横位の調整で無紋とされて、底面には平織の網代痕が残されている。内面の調整は丁寧に行われている。器壁は厚く、若干量の砂粒と繊維を含んでいる。焼成は良い。第35図112はほぼ直立に近く立ち上がる深鉢形土器の口縁部破片である。口縁直下には鰭状の突起が貼り付けられ、太い沈線による磨消縄紋が施されている。縄紋の種別は摩滅しているために判別は困難である。内面の調整は丹念に行われ平滑に仕上げられている。胎土には砂粒を含み、器表面に多く露出している。焼成はあまり良くない。第35図113はおそらく4単位の波頂部をもつと思われる深鉢形土器の口縁部破片である。口唇部は外そぎに作られ、上端が僅かに内湾する。口縁～体部にはＬＲ縄紋を地紋としての沈線紋が描かれる。口縁部下には１条の沈線が巡り、波頂部下には小さなＪ字形の沈線紋とそこから垂下するＳ字形沈線紋、さらにその両側を斜めに降りる沈線紋が描かれている。内面の調整は丁寧に行われている。胎土には砂粒を多く含む。焼成は良好である。第35図114から122は沈線紋の描かれた深鉢形土器の体部破片である。114と122は地紋に縄紋が施されているが、ほかは無紋地に沈線を施している。内面の調整は摩滅している114と122を除いて丁寧に行われている。いずれも胎土に若干の砂粒を含み、焼成は良好である。第35図123～136は縄紋あるいは撚糸紋が施された深鉢形土器の破片である。口縁部資料123～127では、縄紋あるいは網目状撚糸紋の施された123～125が直線的に立ち上がり、平行撚糸紋の施された126、127がごく僅かに内湾ぎみに立ち上がる。縄紋の施された123の原体はＬＲである。撚糸紋の施された125～127の原体は、127の資料がＬの撚糸紋であるほかはすべてＲの撚糸紋が用いられている。第35図133～136は縄紋の施された深鉢形土器の体部破片である。133はＲＬであるがほかはＬＲの撚紐が用いられている。第35図137は器表面が無紋となる例である。底部に近いと思われるが、あるいは体部には第35図114～122のような沈線紋が描かれている可能性もある。123～137の資料とも内面の調整は丁寧に行われており、胎土には砂粒を含むものの焼成は良好である。第35図139の深鉢形土器底



第35図　駒坂台Ⅱ遺跡遺構外出土土器

部は底面に木葉痕が残されている。内面の調整は丁寧で、胎土に少量の砂粒をふくむが焼成は良い。第35図138の外反して立ち上がる底部は器表面にＲＬ縄紋が施紋されている。胎土に僅かな量の砂粒を含むが、内面調整、焼成とも良好である。なお、この資料は二次的な加熱により赤変している。

7)駒坂台Ⅱ遺跡遺構外出土石器

石鏃(第36図140)

両面ともに丹念に加工された有茎鏃である。両側縁からの剥離により両面とも中軸線にそった稜が形成されている。本体と茎部の境にはアスファルトの付着が観察される。図左側の面、左翼先端を折損している。

嘴状石器(第36図141)

小形のスクレーパーである。一方の側縁が大きく湾曲し、他方が直線的になる左右非対称の形状を呈する。基本的に両面加工であるが、図右側の面には素材となった剥片の主要剥離面が残され、素材には横長の剥片が用いられていることがわかる。素材の打面、すなわち湾曲する方の側縁中央は、主要剥離面側からの加撃によって折断されている。また、図の下端、石器の基部もごく僅かではあるが、素材主要剥離面側から折り取られている。類似の石器は、県南部増田町の八木遺跡で多数検出され、この呼び名で分類されている。

楔形石器(第36図142、143)

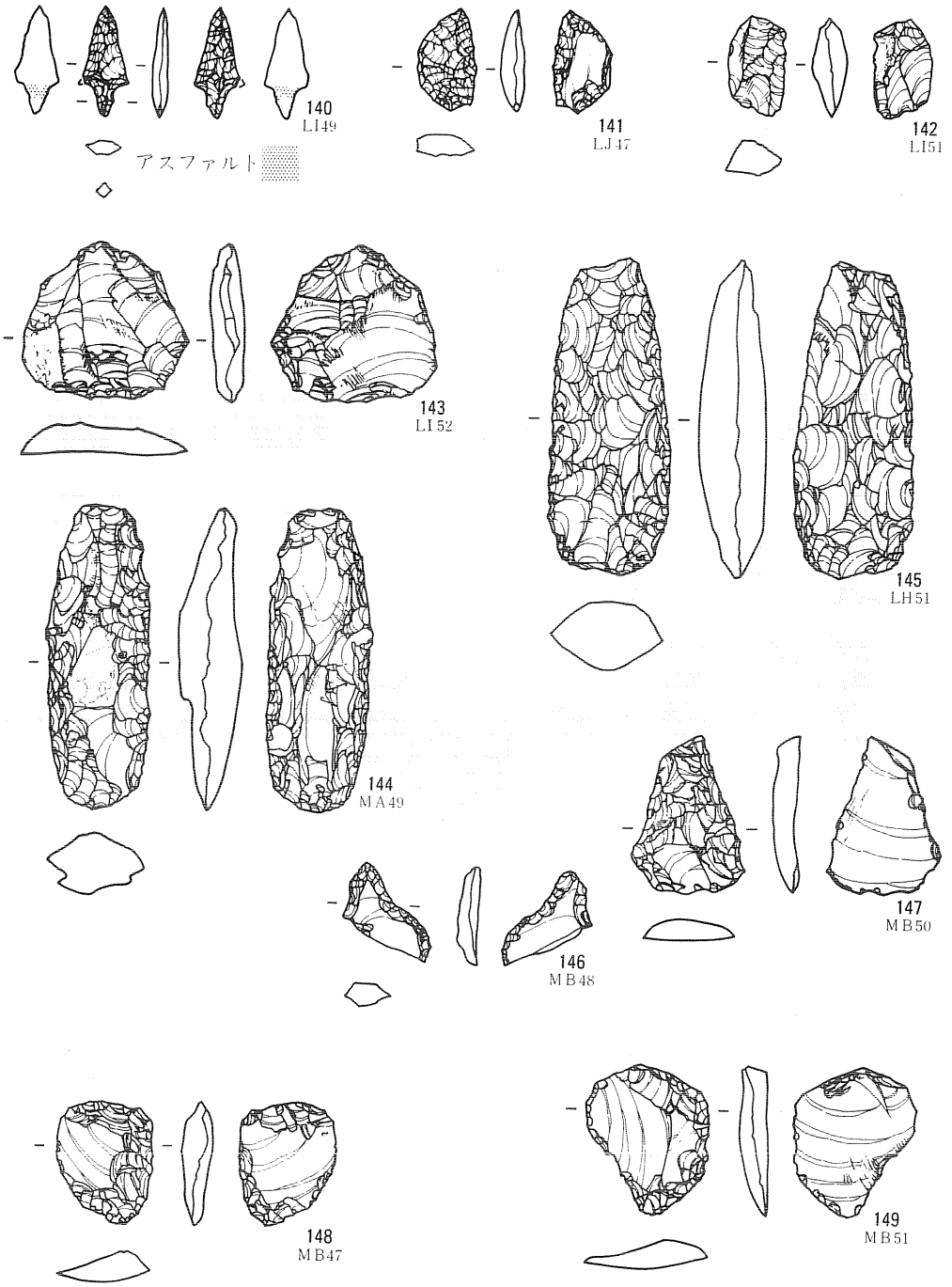
黒曜石の小円礫を打ち割った剥片を素材とし、図右側の面、左上部に礫皮が僅かに残る。図の上下に両極打法による加撃痕が認められる。ほかに、図左側の面、左側にはスポール状の剥片が剥がれた截断面が残っている。第36図143も礫皮のある剥片を素材とする。両極打法による加撃は位置をずらして行われ、大きく、図左側の面の上端左側縁と下端右側縁、上端右側縁と下端左側縁とに分かれて認められる。また、上端右側縁には截断面が観察される。

篦状石器(第36図144、145)

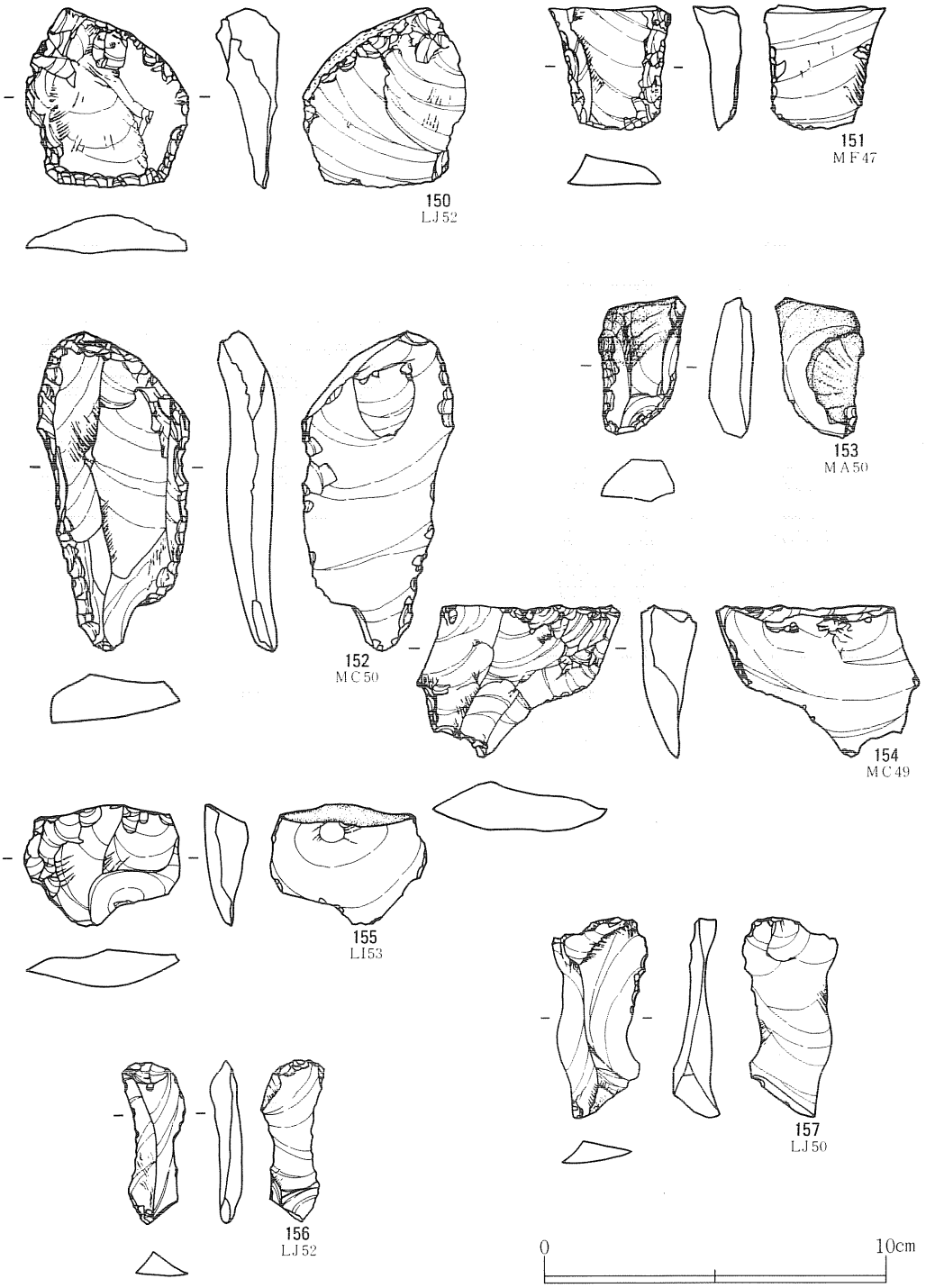
第36図144は両面加工の篦状石器である。両側縁には短い階段状剥離が加えられ、先端部は押圧剥離による細長い剥離が両面に施される。基部は、図右側の面からの加撃により折断されている。第36図145も両面加工の篦状石器であるが、一部に礫皮面を残す。144と同様、両側縁は階段状剥離が連続的に加えられ、先端および基部には縦長の細い剥離が重ねられている。基部には素材となった剥片の剥離面が残っているが、基部に加えられる縦長の剥離はそれを打面として加えられている。

スクレーパー(第36図146～149、第37図150～153、第38図161～164)

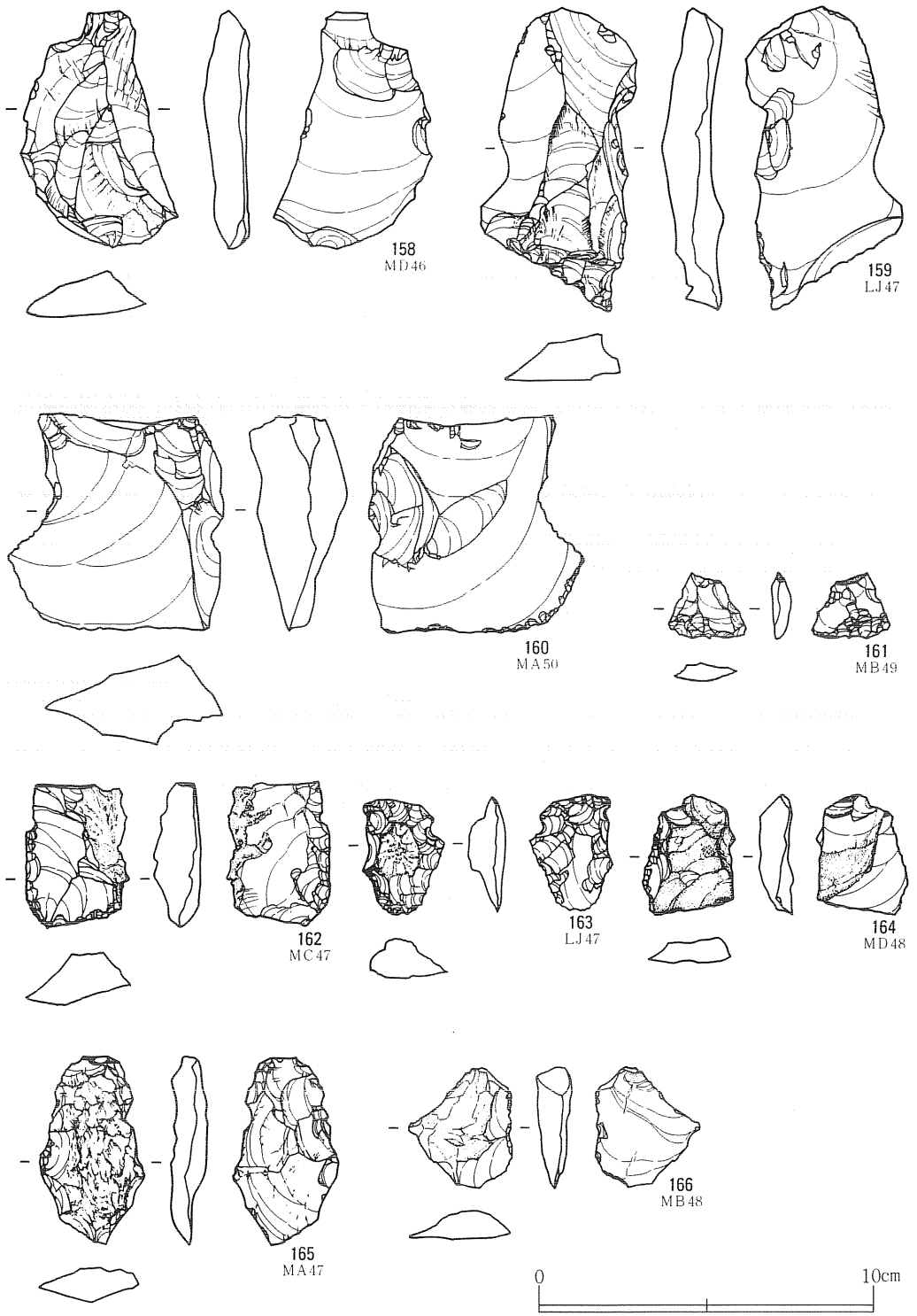
第36図146～149、第37図150～153は二次的な加工によって刃縁状の縁辺を作り出している



第36図　駒坂台Ⅱ遺跡遺構外出土石器（１）



第37図　駒坂台Ⅱ遺跡遺構外出土石器（2）



第38図　駒坂台Ⅱ遺跡遺構外出土石器（３）

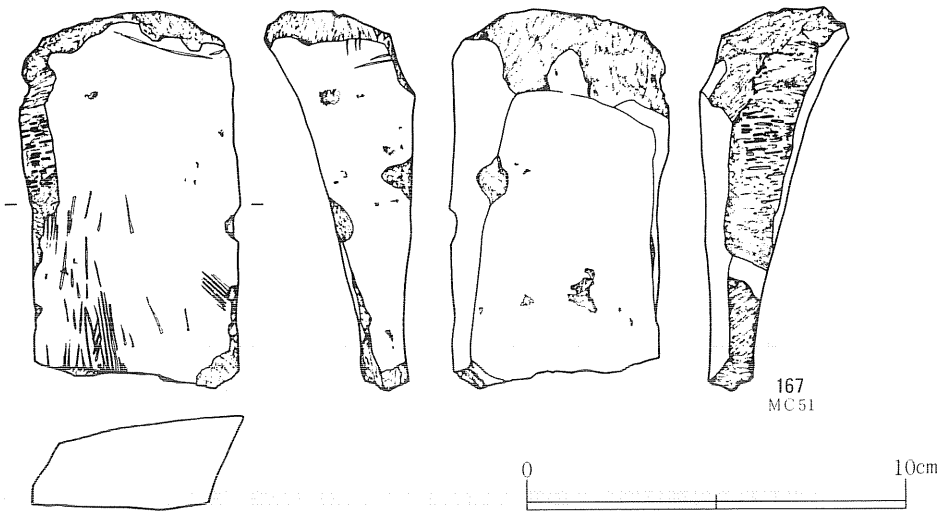
石器である。第36図146は素材剥片の縁辺に両面から相互に連続的な剥離を加え、突出する尖端を作り出している。石錐とも思われるが、尖端部を回転して使用したような痕跡は認められない。下端は折損している。第36図147は素材剥片の表面全面を加工した石器である。素材の加工は主要剥離面側から行われ、表面側からの加工は、僅かに図右側の面、右側縁に認められのみである。素材の打面側は折り取られている。第36図148は素材剥片の末端一部を除いた縁辺に、両面相互の調整剥離が加えられた石器である。素材の打面は剥ぎ除かれている。第36図149も148同様に素材剥片の縁辺に調整剥離を加えた石器であるが、この場合は加工は主要剥離面側からのみ行われ、表面側からの加工は施されていない。また、素材の打面も残されたままである。第37図150は礫皮を含む剥片の末端のみ調整剥離を加えた石器である。直線的な刃縁に仕上げられた末端への加工は、主要剥離面側からのみ行われている。第37図151は剥片の両側縁に調整剥離を加えた石器である。調整剥離は素材の主要剥離面から行われ、図右側の面左側縁下3/4程に加えられた剥離は、かなり急斜度に行われている。対して、右側縁に加えられた剥離は素材の先行剥離面が急傾斜であることもあって極めて浅い。第37図152は末端が蝶番剥離で終わる剥片の両側縁に調整剥離を加えた石器である。剥離は素材の主要剥離面から行われている。図左側の面、右側縁は比較的傾斜のきつい剥離が一部末端まで施されている。左側縁は素材の先行剥離面が主要剥離面と急傾斜をもつため、ごく浅い剥離しか施されていない。打面側は折断されている。第37図153は礫皮をもつやや肉厚の剥片を用い、節理面で剥がれた主要剥離面側からの調整剥離を施している。礫皮の側への加工はない。第38図161～166はその石質から同一の母材から得られた石器および剥片と判断される。第38図161は、素材剥片の末端および図左側の面の打面右側の側縁に、 表面と主要剥離面と相互に調整剥離を加えている。右下端が尖るため、石鏃の未製品とも考えられるが、いずれ、素材の表面、主要剥離面、打面とも大きく残されている。第38図162は縦長の剥片の一方の側縁に表面、主要剥離面の双方から調整剥離を加えている。図右側の面、左側縁に刃縁が作られ、右側縁には礫皮が残されている。また、図の下端に打面があるが、上におかれた素材末端側は折断されている。第38図163は小形の横長の剥片のほぼ全周に調整剥離をほどこしている。剥離は素材の表面と主要剥離面相互に行われるが、僅かに図の下端では表面側からの剥離は施されていない。図左側の面、左側縁中ほどに位置する打面は主要剥離面側からの加撃で折り取られている。また、中央には礫皮の一部が大きく盛り上がって残存する。第38図164は縦長の剥片を素材とし、図左側の面、左側縁に主要剥離面側から調整剥離が施されている。打面は上端右側にあり、図の下においた素材の末端側は折断されている。素材の表面には礫皮が残る。

剝片（第37図154～157、第38図158～160、165、166）

第37図154は末端および、図左側の面右側縁の一部に僅かながら二次調整が施されている。末端の調整は主要剝離面側から、右側縁の調整は表面側から行われている。ほかに右下の内湾する縁辺にはごく微細な剝離が局所的に認められる。第37図155は図左側の面の末端左側に僅かに二次調整が認められる。調整は剝片の縁を主要剝離面側から折り取るように施されている。第37図156は内湾する両側縁に使用によると思われる微細な剝離が認められる縦長の剝片である。打面は表面、主要剝離面相互に加えられた剝離により除かれている。素材末端もまた折り取られている。第37図157も156同様、湾曲する1側縁に微細な剝離痕を残す縦長剝片である。打面は残り、末端は折り取られている。第38図158は打面の下が節理面で剝がれた剝片である。節理面を打面として表面側へ剝離を加え打面のある図の上端を突出させている。また節理面の下にあったと思われる打瘤は同じく節理面を打面とする2回の剝離で除かれている。湾曲する側縁および反対側の直線的な側縁にもごく部分的に二次調整が認められ、末端も表面側から折断されている。打面近くの調整状態から石匙の未製品の可能性も否定できない。第38図159は末端が折断された縦長剝片である。折断面を打面として表面側に複数回の調整剝離が施され、図左側の面、 右側縁中央やや上部でも表面からの2回の剝離の後、主要剝離面から加撃して縁辺を折り取る作業がなされている。第38図160の肉厚の剝片は、図左側の面、右側縁に表面から厚さを調節するための2回ほどの剝離を加えた後、主要剝離面側から大きく加撃している。左側縁から下縁にかけては、おそらく使用によると思われる微細な剝離が連続的に認められる。第38図165は161から164までの瑪瑙製のスクレーパーと同じ母材から得られた縦長剝片であるが、図左側の面、左側縁には剝片の厚さを調節するため、一部は右側縁まで及ぶ表面側からの数回の剝離が施されている。さらにその後、主要剝離面から3回ほどの剝離が施され、左側縁にあった礫皮は除かれている。また、末端の一部は折り取られている。第38図166も同じ瑪瑙の母材から得られた礫皮を含む剝片であり、図左側の面、左側縁に剝離面をもつが、この剝離面は165と異なりこの剝片に先行して母材に加えられた剝離の一部である。その縁辺には使用によると思われる微細剝離が認められる。

砥石（第39図167）

3面を砥面として用いている。図左側の面左下と、砥面として用いられていないその左側面上部には、刃物の切先を当てた線条痕が残されている。下端は折損する。



第39図　駒坂台Ⅱ遺跡遺構外出土石器（４）

第６表　駒坂台Ⅱ遺跡遺構外石器出土区・石材・重量一覧

番号	出土区・層位	石　材	重量g	番　号	出土区・層位	石　材	重量g
第36図140	LI49Ⅱ層	頁　岩	1	第37図154	MC49Ⅱ層	頁　岩	30
第36図141	LJ47Ⅱ層	石　英	3	第37図155	LI53Ⅱ層	頁　岩	16
第36図142	LI51Ⅱ層	黒曜石	4	第37図156	LJ52Ⅱ層	頁　岩	5
第36図143	LI52Ⅱ層	頁　岩	19	第37図157	LJ50Ⅱ層	硅質頁岩	9
第36図144	MA49Ⅱ層	頁　岩	38	第38図158	MD46Ⅱ層	頁　岩	30
第36図145	LH51Ⅱ層	頁　岩	61	第38図159	LJ47Ⅱ層	頁　岩	45
第36図146	MB48Ⅱ層	頁　岩	3	第38図160	MA50Ⅱ層	頁　岩	87
第36図147	MB50Ⅱ層	頁　岩	8	第38図161	MB49Ⅱ層	瑪　瑙	2
第36図148	MB47Ⅱ層	頁　岩	6	第38図162	MC47Ⅱ層	瑪　瑙	19
第36図149	MB51Ⅱ層	頁　岩	10	第38図163	LJ47Ⅱ層	瑪　瑙	6
第37図150	LJ52Ⅱ層	頁　岩	30	第38図164	MD48Ⅱ層	瑪　瑙	8
第37図151	MF47Ⅱ層	頁　岩	14	第38図165	MA47Ⅱ層	瑪　瑙	14
第37図152	MC50Ⅱ層	頁　岩	58	第38図166	MB48Ⅱ層	瑪　瑙	8
第37図153	MA50Ⅱ層	頁　岩	12	第39図167	MC51Ⅱ層	凝灰岩	198

第2章　まとめ

今回の駒坂台Ⅰ遺跡、駒坂台Ⅱ遺跡の調査では縄紋時代前期から後期にかけての遺物が出土しているが、その主体をなすものは縄紋時代後期前葉の土器である。遺構としては駒坂台Ⅱ遺跡の石組炉、組石遺構の2基のみである。調査された範囲がごく狭く、ことに駒坂台Ⅱ遺跡側はおよそ30,000㎡の広さをもつ舌状台地の南東側付け根の一部分を調査したに過ぎず、これらの遺構の位置も遺跡の中心ではなくその周縁部分にあたる可能性もある。しかし、駒坂台Ⅰ遺跡、駒坂台Ⅱ遺跡の北東側に隣接する七曲台遺跡群でも約90,000㎡と広大な面積を調査しているが、この後期前葉の遺構検出は極めて少ない。また、南側にある椿川地区の遺跡群でも僅かに1遺跡で土坑1基を検出しているのみである。

こうした傾向は前代の中期後葉の時期の遺構群、ことに住居跡の濃密な分布との比較において極めて対照的である(註1)。七曲台でのこうした変化に対しては、遺跡群の通時的な変遷を見通した中で、土地利用上の変革、すなわち、中期後葉の居住を中心とした利用から他の行動領域に移行したのではないかとの解釈が試みられている(註2)。岩見川の下流域左岸で縄紋時代の集落が営まれる可能性ある段丘面は第1段丘である七曲台とその1段高位面にあたる上野台面であり、前者については前述の七曲台全域の調査で後期前葉の規模の大きな居住域のないことは明らかであり、後者については今回の駒坂台Ⅰ遺跡、駒坂台Ⅱ遺跡、上祭沢遺跡の調査や昭和56年の調査が行われているものの、やはり規模の大きな集落の存在する可能性は薄いと言わざるを得ない。とすれば、縄紋時代を通じて人間の行動しうる範囲にさほど変化はなかったとの前提の上で、居住域は段丘面を降りての沖積地かあるいはより高位の丘陵地に移ったと考えた方が良いのだろうか。確かにそうした居住の選択地を替えたような徴候が認められなくもない。例えば内陸部ではあるが、やはり雄物川支流の皆瀬川の右岸にある増田町・八木遺跡には縄紋時代後期前葉からの大規模な墓域が営まれ、出土遺物からその集団が漁撈に多くを依存した生業形態を採っていたことが推測されている(註3)。同じようなことは北上川支流の雫石川沿いの萪内遺跡にも見ることができる(註4)。はたして、河川に依存するような生業形態を採ることが居住域の立地をも替えたのであろうか。

秋田県内においては現在までのところ後期前葉の大規模な集落はみつかっていない。恐らく、明確に時期判断できる住居数を数えても10指に満たないであろう。さきにも触れたように中期後葉の時期と比較するとき、その間にはなにか大きな断絶を想わせる。岩手県内でも松尾村・長者屋敷遺跡や都南村・湯沢遺跡に中期後葉までの大規模な集落が営まれるのに対し、後期前葉には盛岡市・萪内遺跡を除いて目立った集落の検出例はない。青森県内で最近調査されてい

る六ケ所村富ノ沢遺跡でも300軒以上の住居群が検出されているが、その時期は中期後葉から末葉までで後期には至らないと聞いている。同様な傾向はどうやら東北北部地域に共通して見られるのである。もう一度、七曲台での遺跡の分布に目を転じれば、報告書第3篇第1表(註5)に示されるように遺跡の数そのものは前代の中期後葉に比較してむしろ増える傾向がうかがえるのにもかかわらず、居住の痕跡は希薄なのである。

一つの可能性として言い得ることは、何らかの要因により前代までに発展した集団構成原理が変質した結果、後期前葉には規模の大きな集落が分化し、遺跡を残した集団は移動性の高いより小さな単位へと移行したのではないかということである。(註6.7)こうした想定に立てば、集団の拠点となる集落が管理する生活領域もより細かな単位へと多数分散し、大きな集落は形成されないまでも、領域圏の維持・管理だけは複数の小集団によって保たれたことも考えられ、その痕跡である遺跡（居住域としては常に不安定であったとしても）が随所に残る事実も頷けるのではないかと考える。そして、この後期前葉から顕在化する集落から独立して存在する大規模な墓地遺跡（墓域）は、それら小集団の上位レベルすなわち領域圏を単位とするような形で存在し、それら小集団を非日常的な場面で結びつけ、領域圏内部の基本的な集団構造を維持し続ける役割を果たしていたのではないかと考えられる。

現象面にあってはおそらくこうした分散居住とも言えるような形態が、大規模墓域をその内部にもつような地域でも採られていたものであろう。駒坂台Ⅰ遺跡、駒坂台Ⅱ遺跡を含め、七曲台および周辺地域の後期前葉の遺跡の在り方は、そうした居住形態の日常的な側面を示す可能性も考えられるのである。

註

註1　本地域から西に4.5km離れた御所野台地の遺跡群では、1986年までの数字で192軒の竪穴住居跡が検出されている。これらの時期は大木9式、大木9－10中間式、大木10式期であるが、この時期は県内の縄紋時代各期を通して最も住居検出数の多い時期でもある。

註2　秋田県教育委員会「第3篇第1章」『東北横断自動車道秋田線埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』1986（昭和61年）

註3　総数1,035点の漁網錘、魚の解体用具と目される52点の嘴状石器などが出土している。
秋田県教育委員会「八木遺跡発掘調査報告書」1989（平成元年）

註4　岩手県教育委員会「御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書盛岡市萪内遺跡（Ⅰ）」1982（昭和57年）

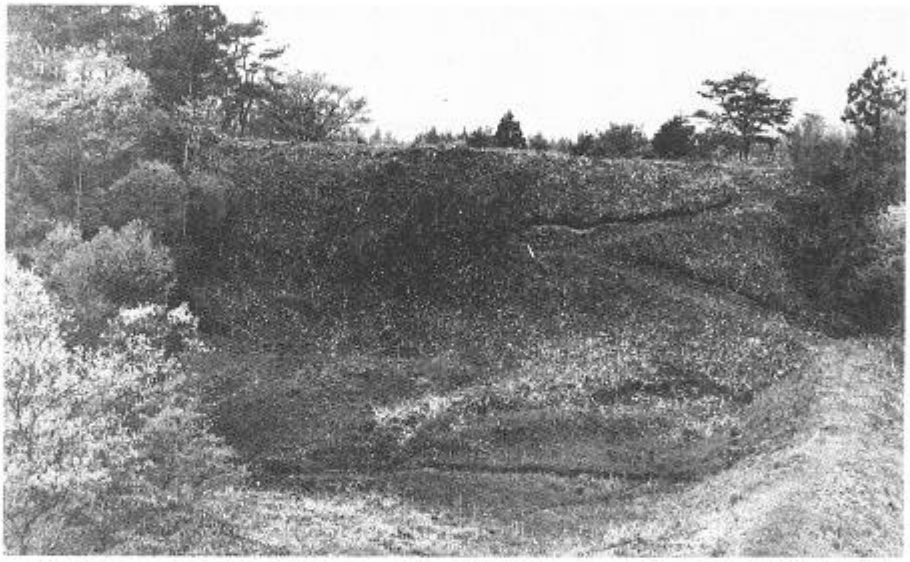
註5　註2文献に同じ

註6　無論、その変質を促した要因とその機構こそが問題であり、一般には気候の変動がもたらした環境変化に対する生態適応として説明される。確かにマクロな視点ではそうした説明でも納得がいくが、遺跡およびそこに存在した集団を見据える視座をもった時、必ずしもそれのみで充分な解釈がなされるとは思えない。集団の構造自体が本質的に動的なものであることにもその要因が求められるのではないか。

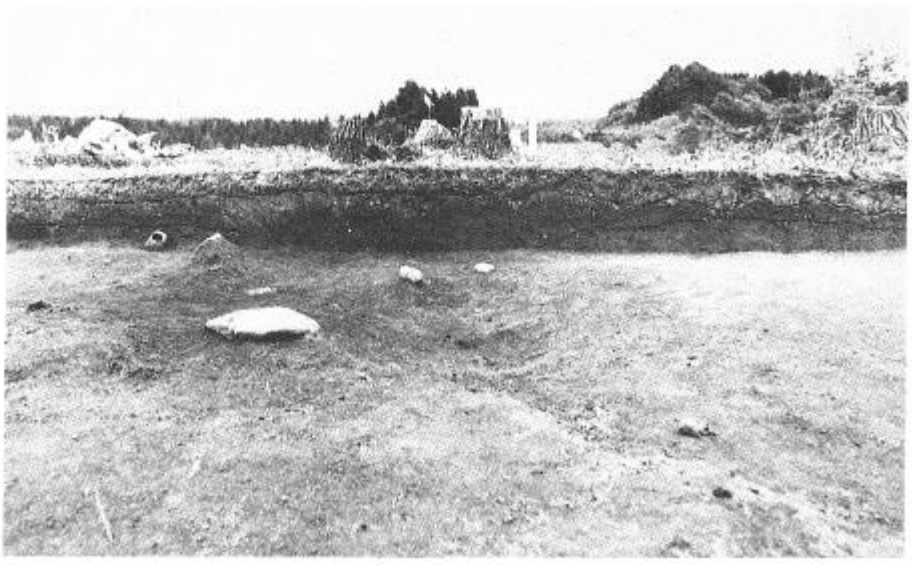
註7　同様の現象については佐々木彰が岩手県・水沢周辺を対象として論じている。
佐々木彰「遺跡にみる拡散化現象について」『法政考古学』8　1983（昭和58年）
同　「再び遺跡にみる拡散化現象について」『北奥古代文化』15　1984（昭和59年）

図版1　上祭沢遺跡

1.
調査前全景
（東→西）



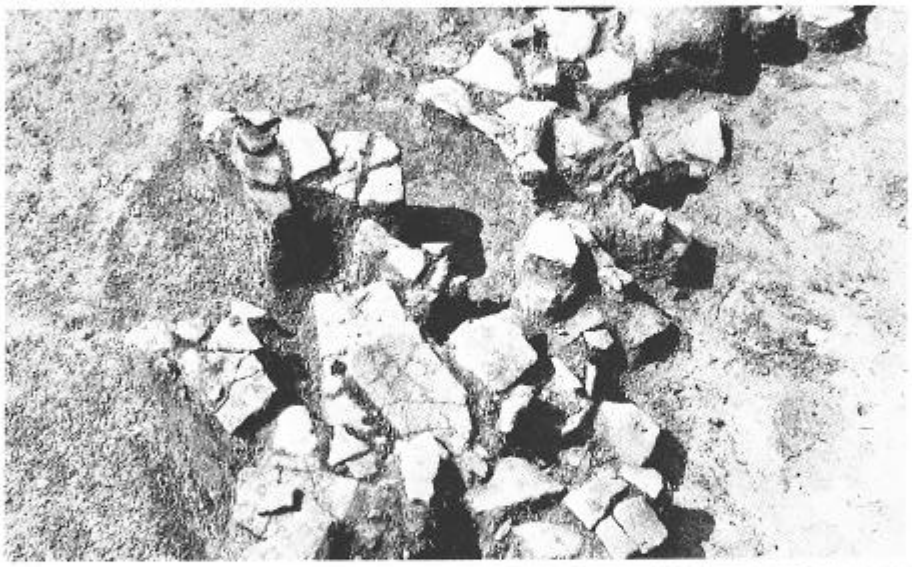
2.
調査前全景
（南→北）



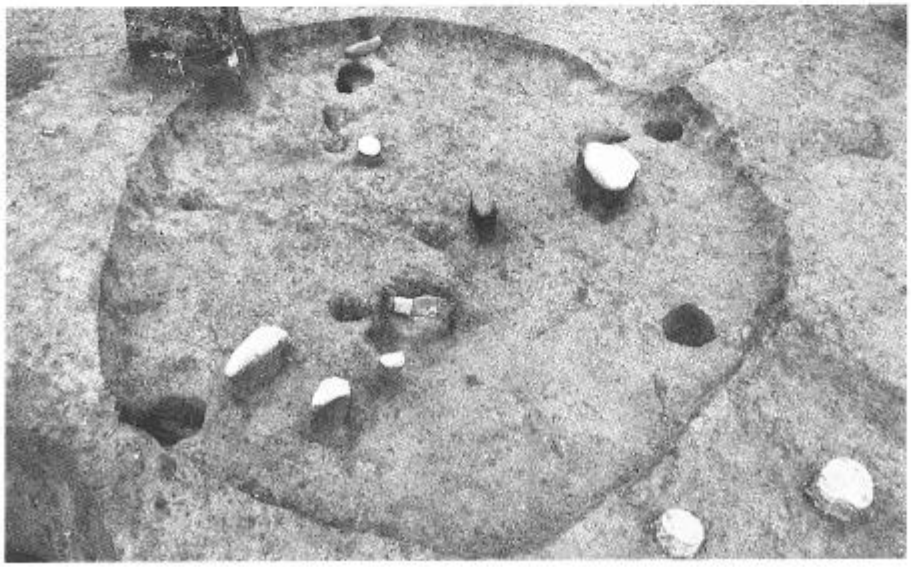
3.
L147～49基本層位
（西→東）

図版2　上祭沢遺跡

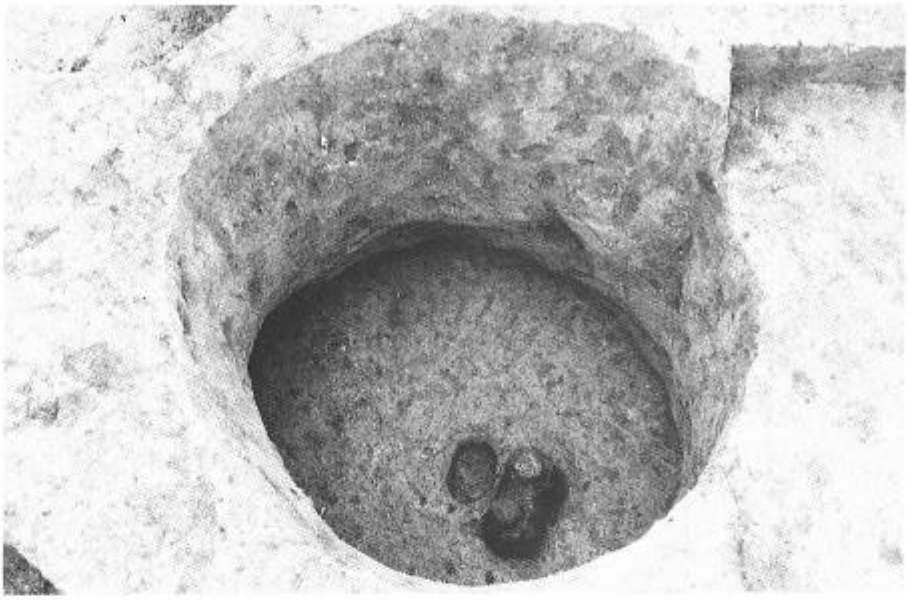
1.
LH45区、LH46区
土器出土状態



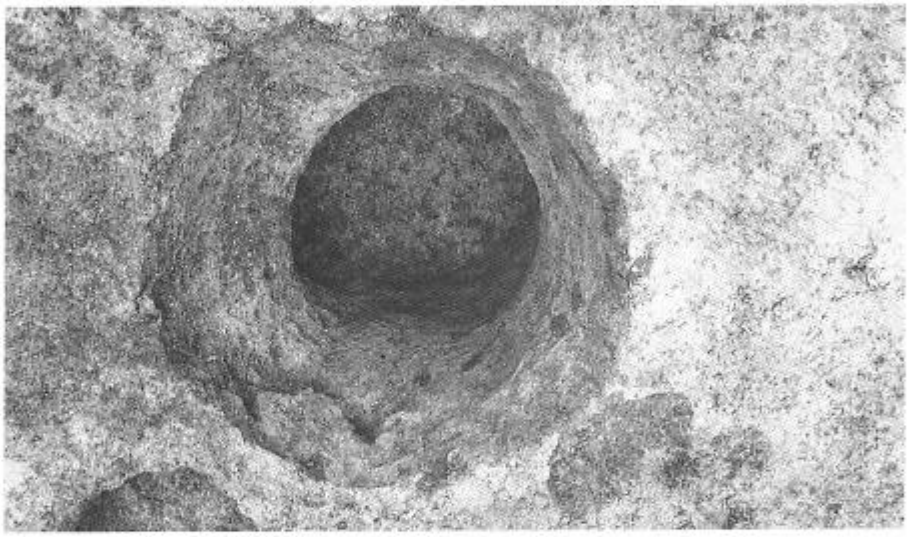
2.
LH49区
土器出土状態



3.
S106竪穴住居跡



1.
SK04土坑

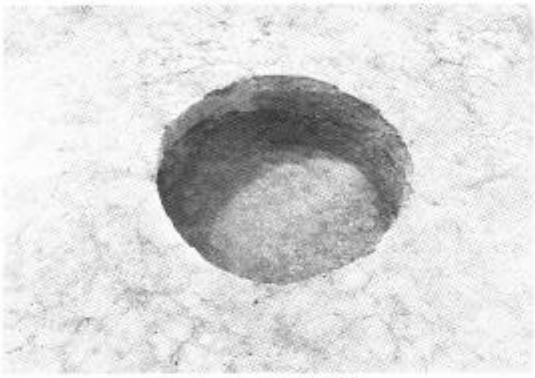


2.
SK30土坑

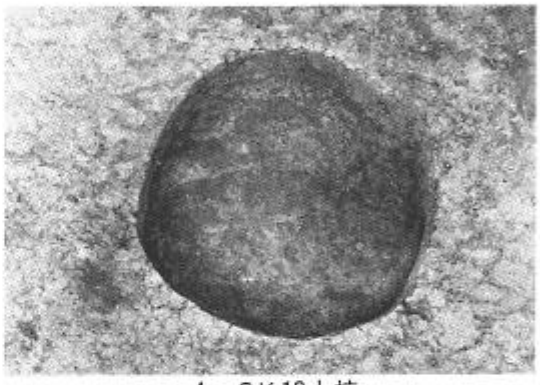
3.
SK09、SK11土坑

1．SK35土坑

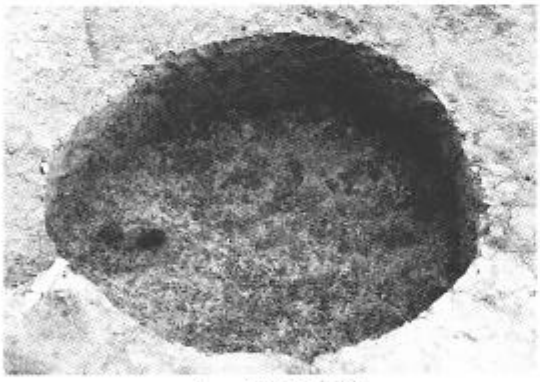
2．SK31土坑



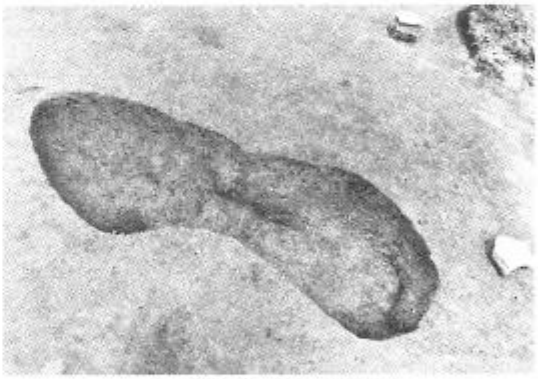
3．SK16土坑



4．SK10土坑

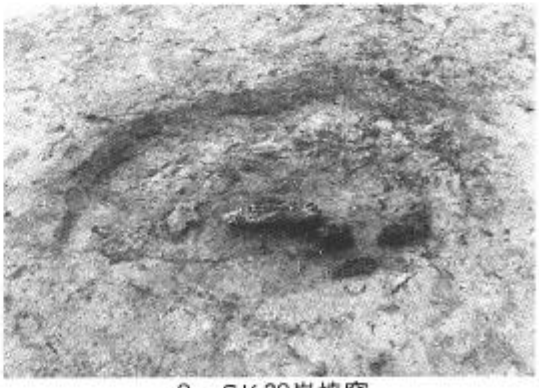


5．SK05土坑



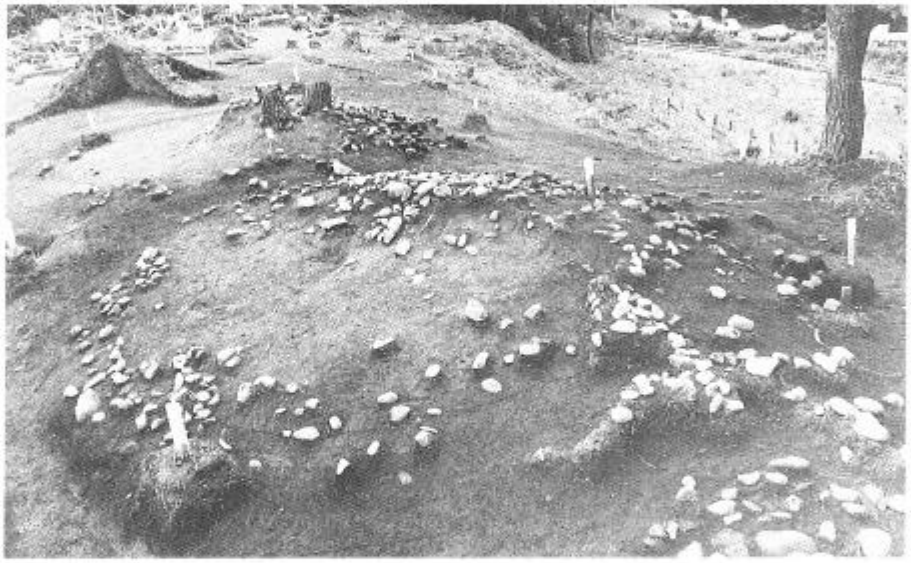
6．SK13、SK14土坑

7．SK15土坑



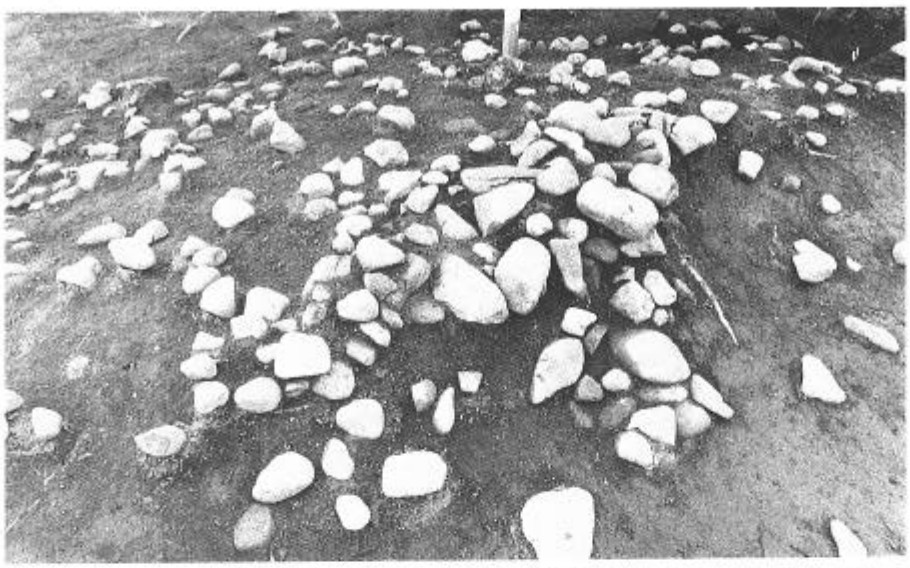
8．SK29炭焼窯

1.
SX02、SX03塚
確認状態
（南→北）



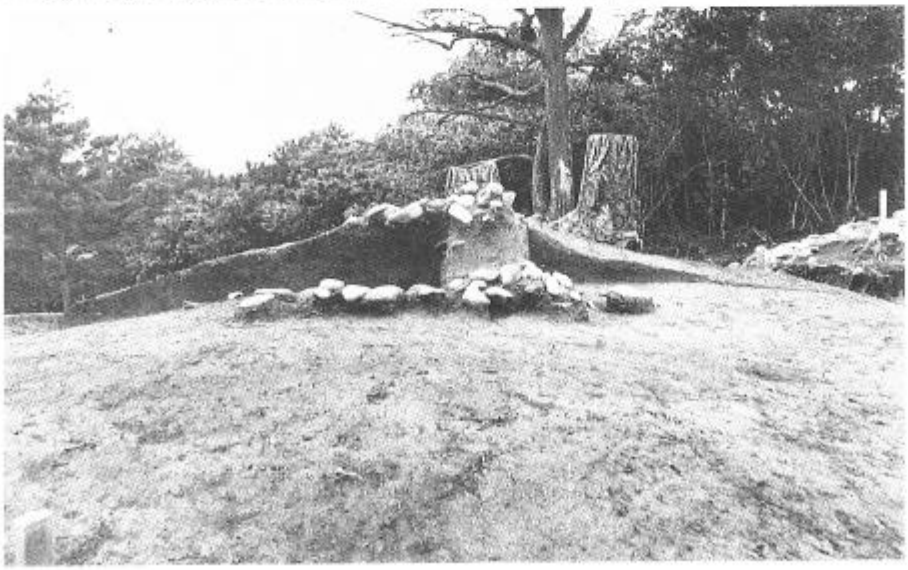
2.
SX02、SX03塚
確認状態
（北→南）

3.
SX02塚中央部
礫集積状態

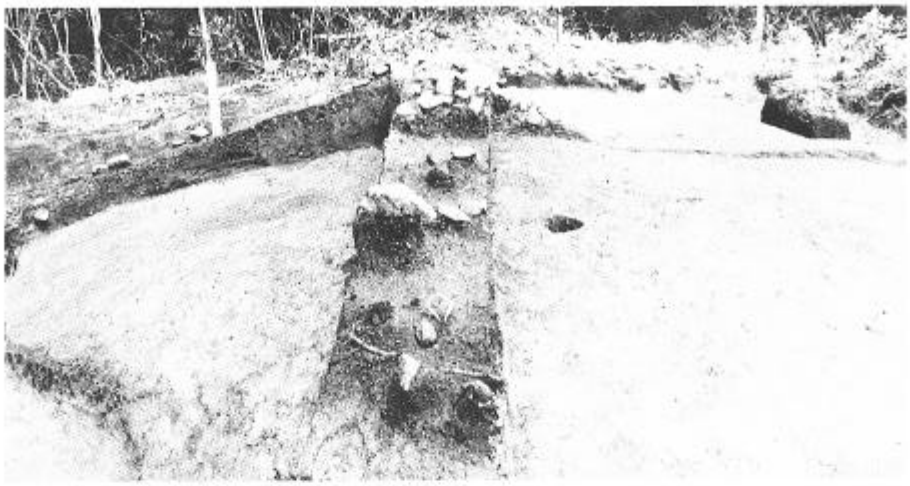


1.
SX03塚中央部
礫集積状態

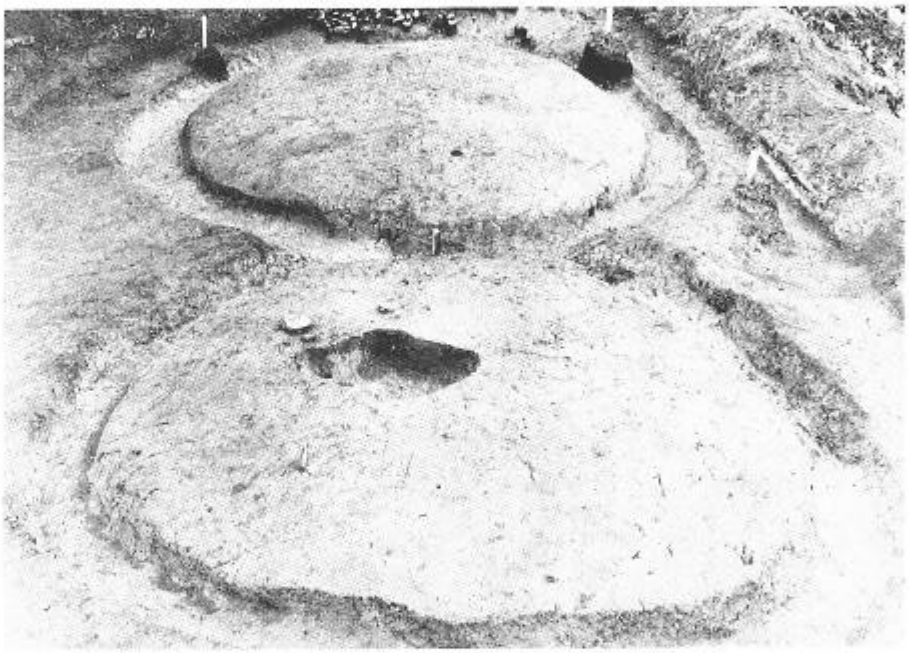
2.
SX02塚
礫敷設状況
(西→東)



3.
SX02塚盛土断面
(南東→北西)

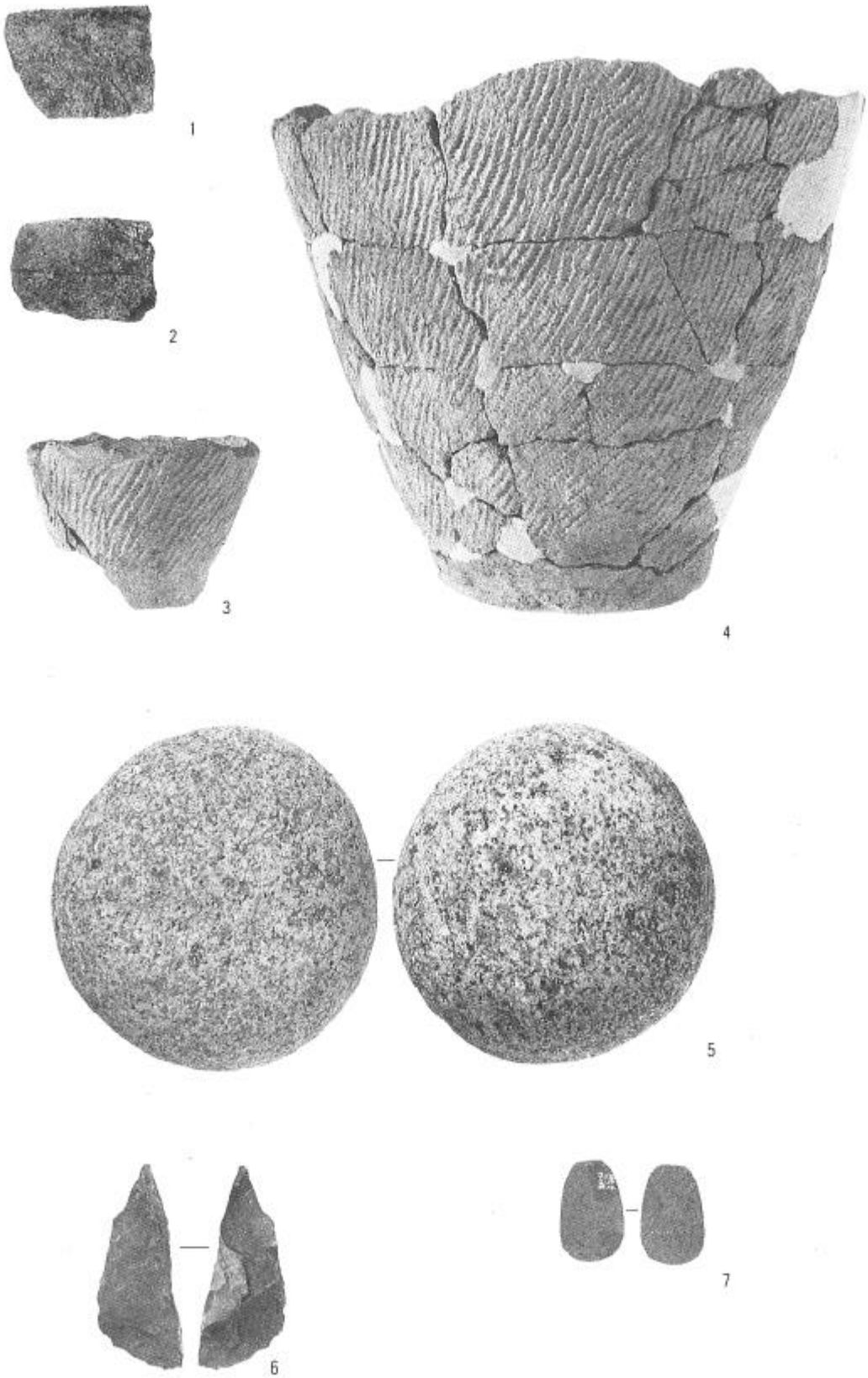


1.
SX03塚盛土断面
（南西→北東）

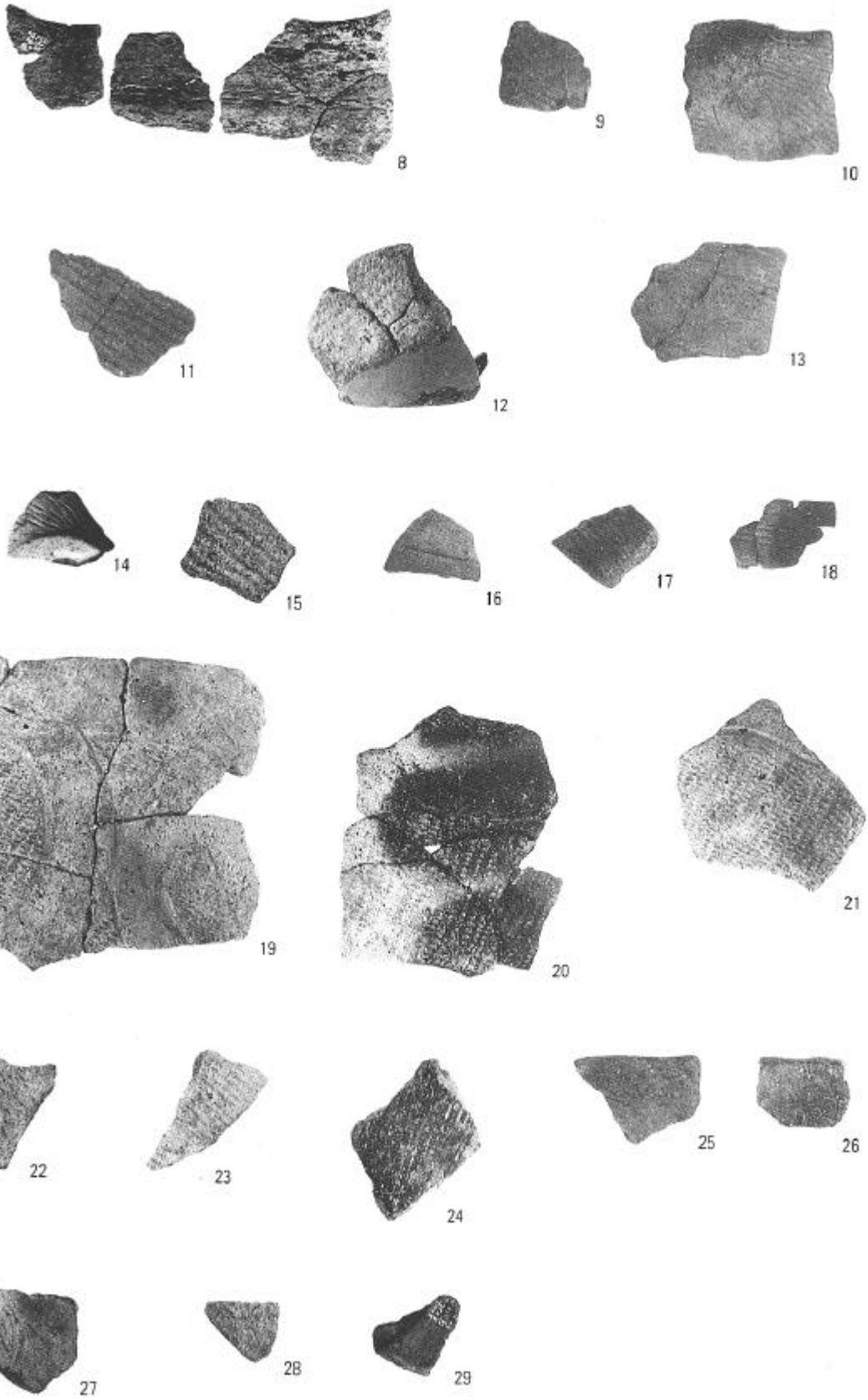


2.
SX02、SX03塚
完掘状態
（南→北）

3.
調査後全景
（南→北）



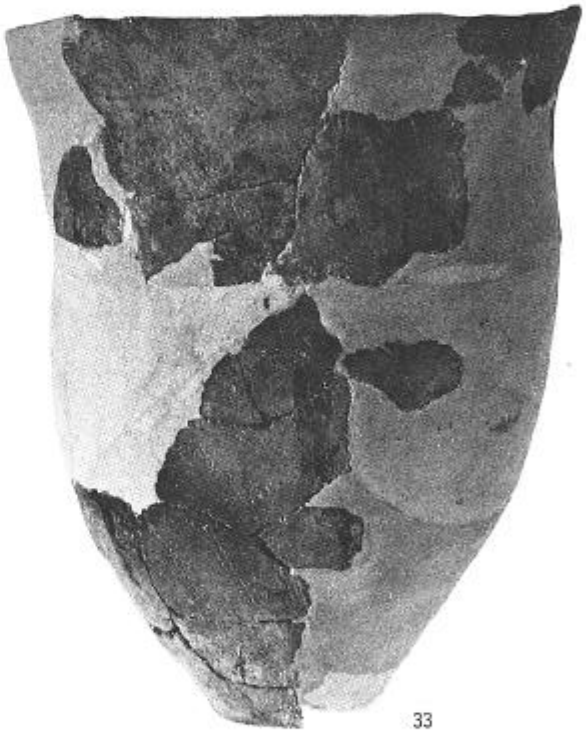
遺構内出土遺物（1）



遺構内出土遺跡（2）

30

31


33

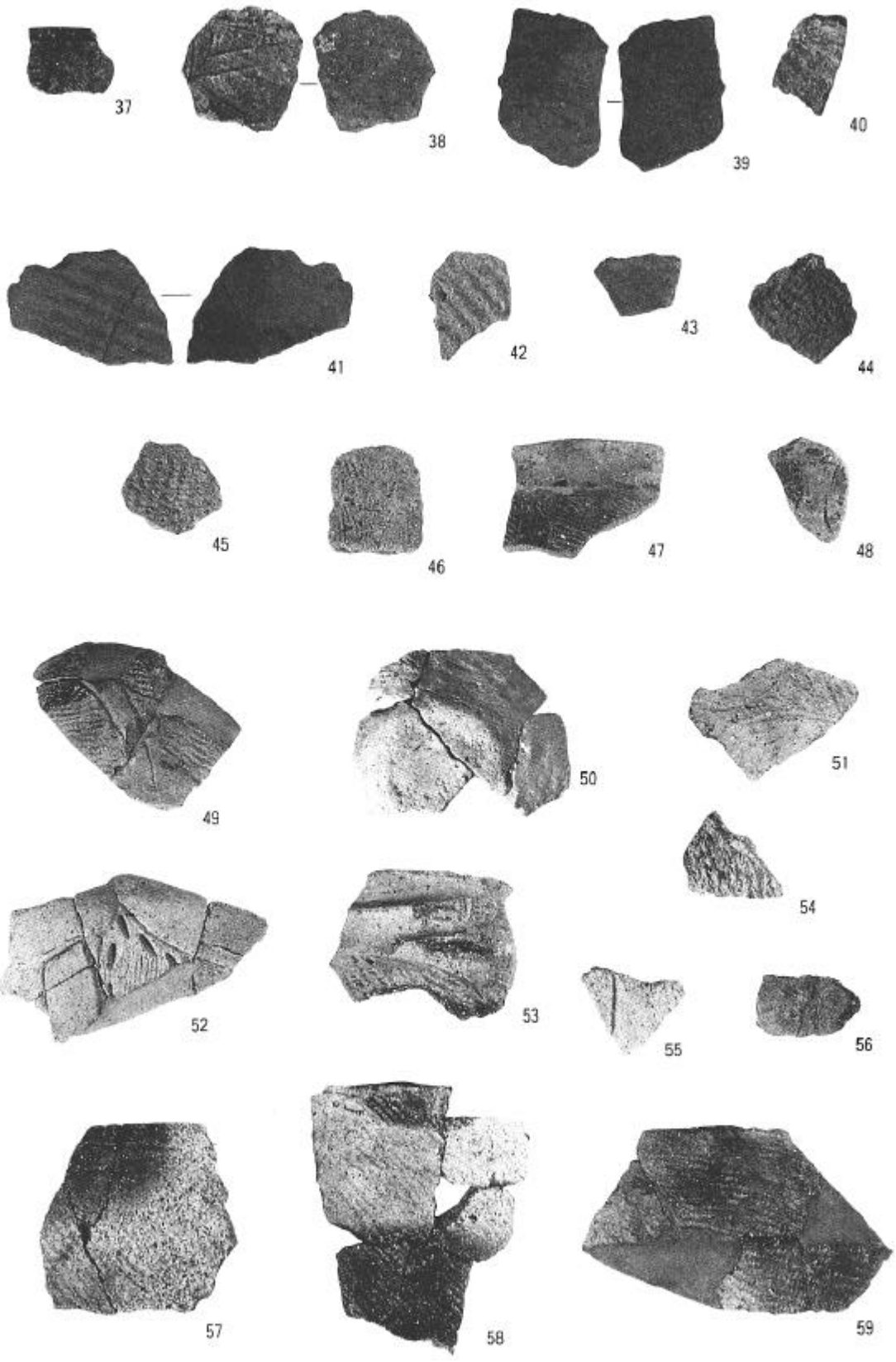
32

34

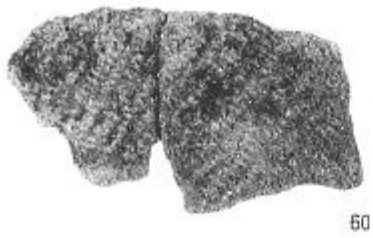
35

36

遺構内出土遺物（３）



遺構外出土土器（1）


60

61

62

63

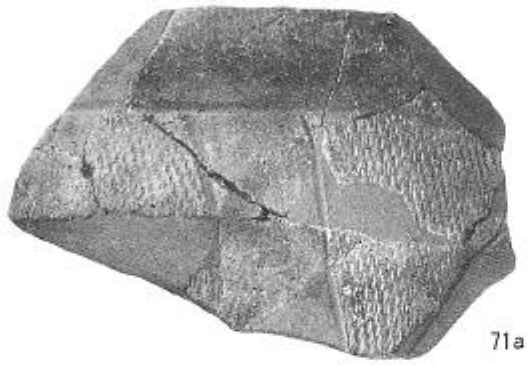
64

65

66

67

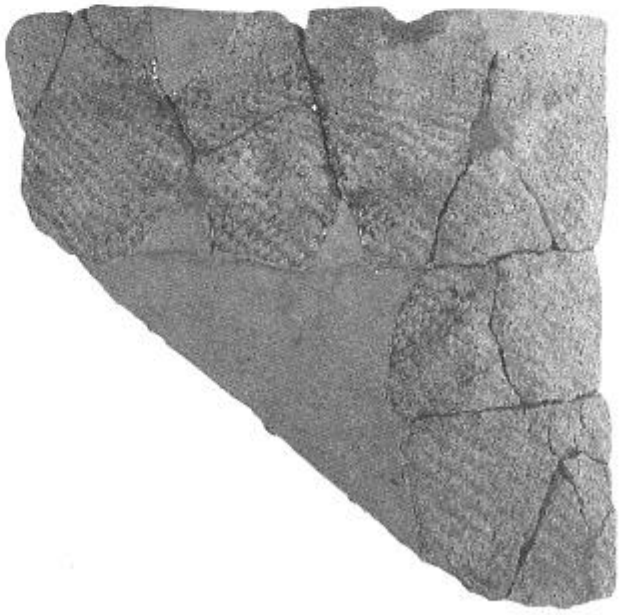
68


71a

69

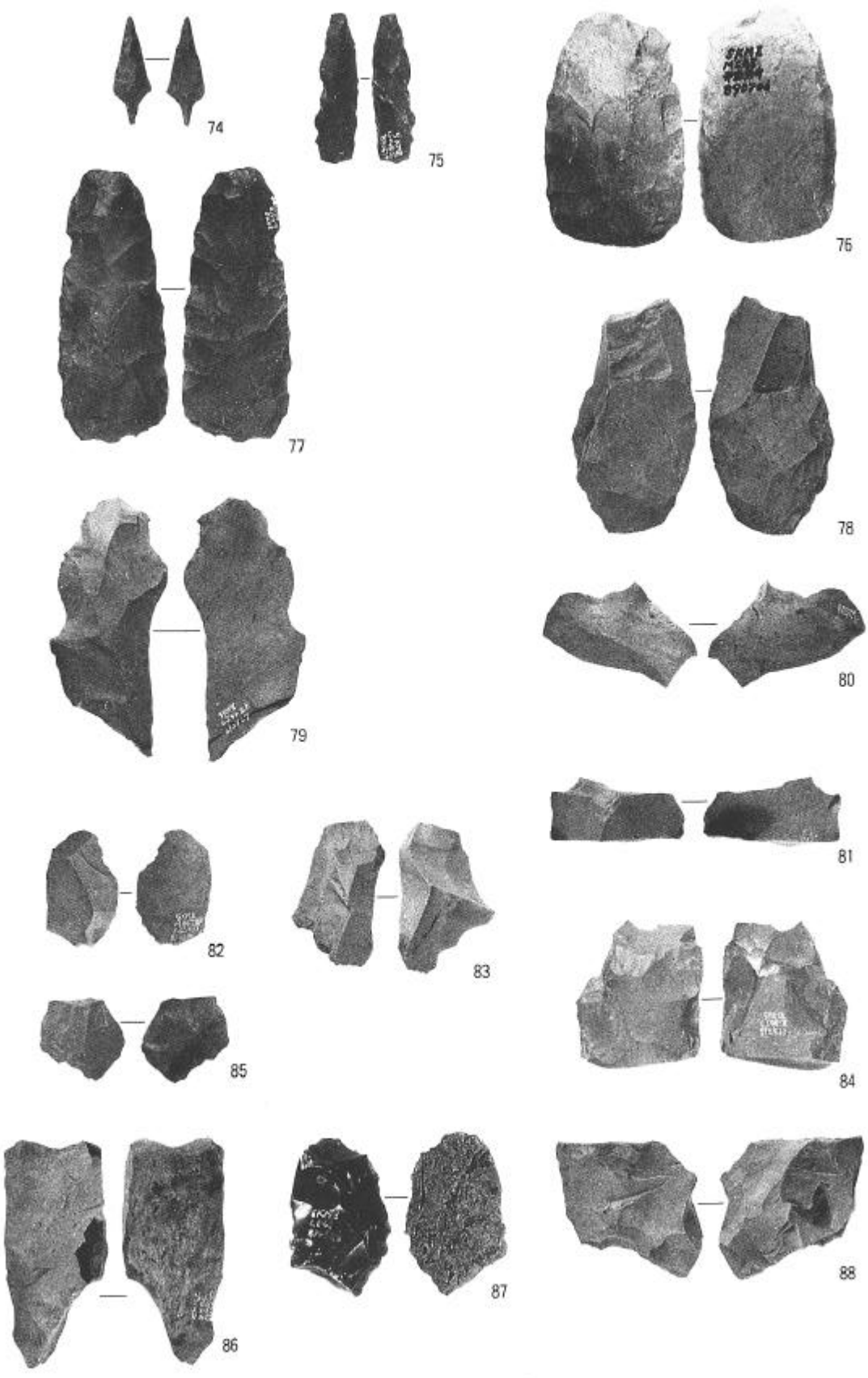
70

71b

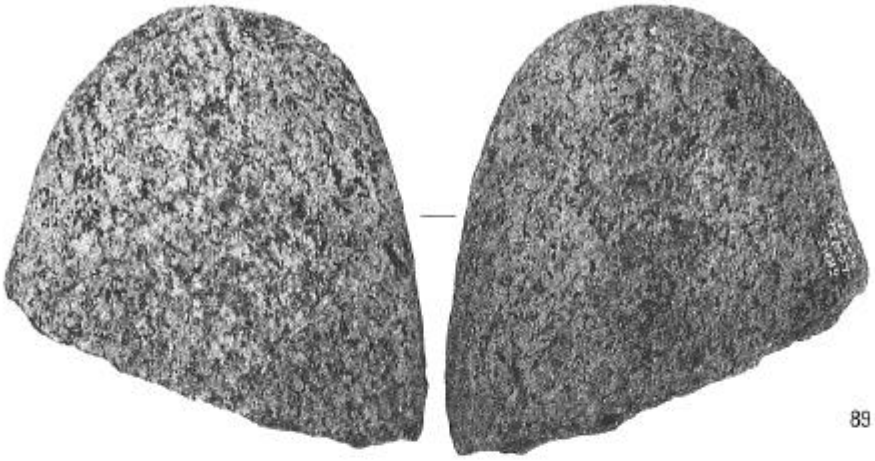

72

遺構外出土土器(2)

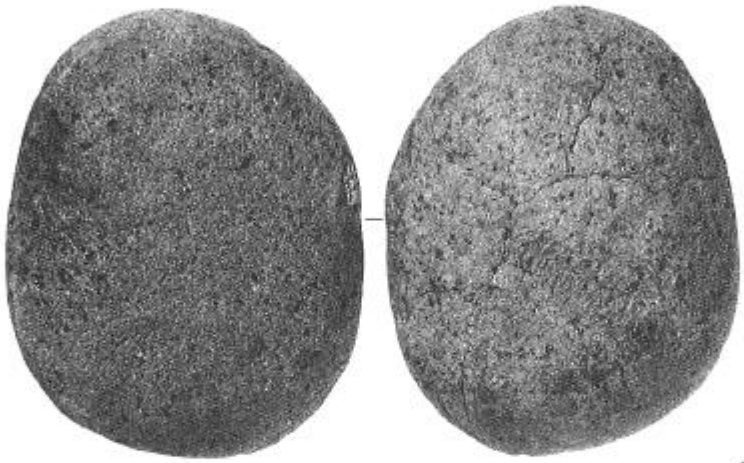
遺構外出土土器（3）



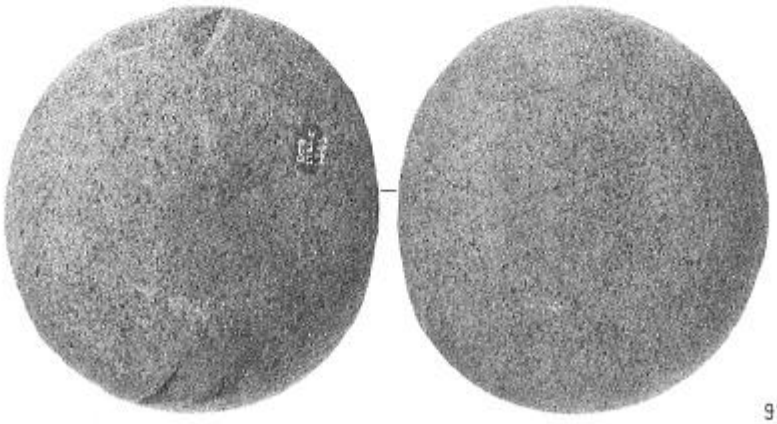
遺構外出土石器（1）



89

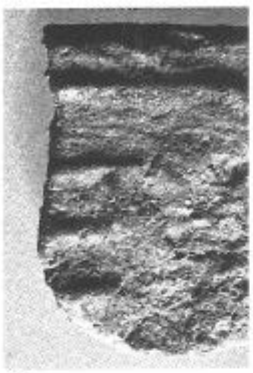


90

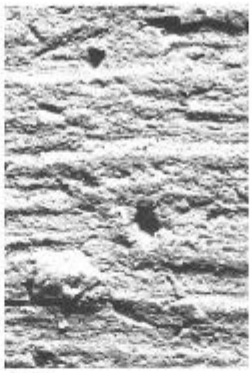


91

遺跡外出土石器（2）


37

38 外面


内面

42

39 外面

内面

45 外面

内面

35 外面

内面

34 外面

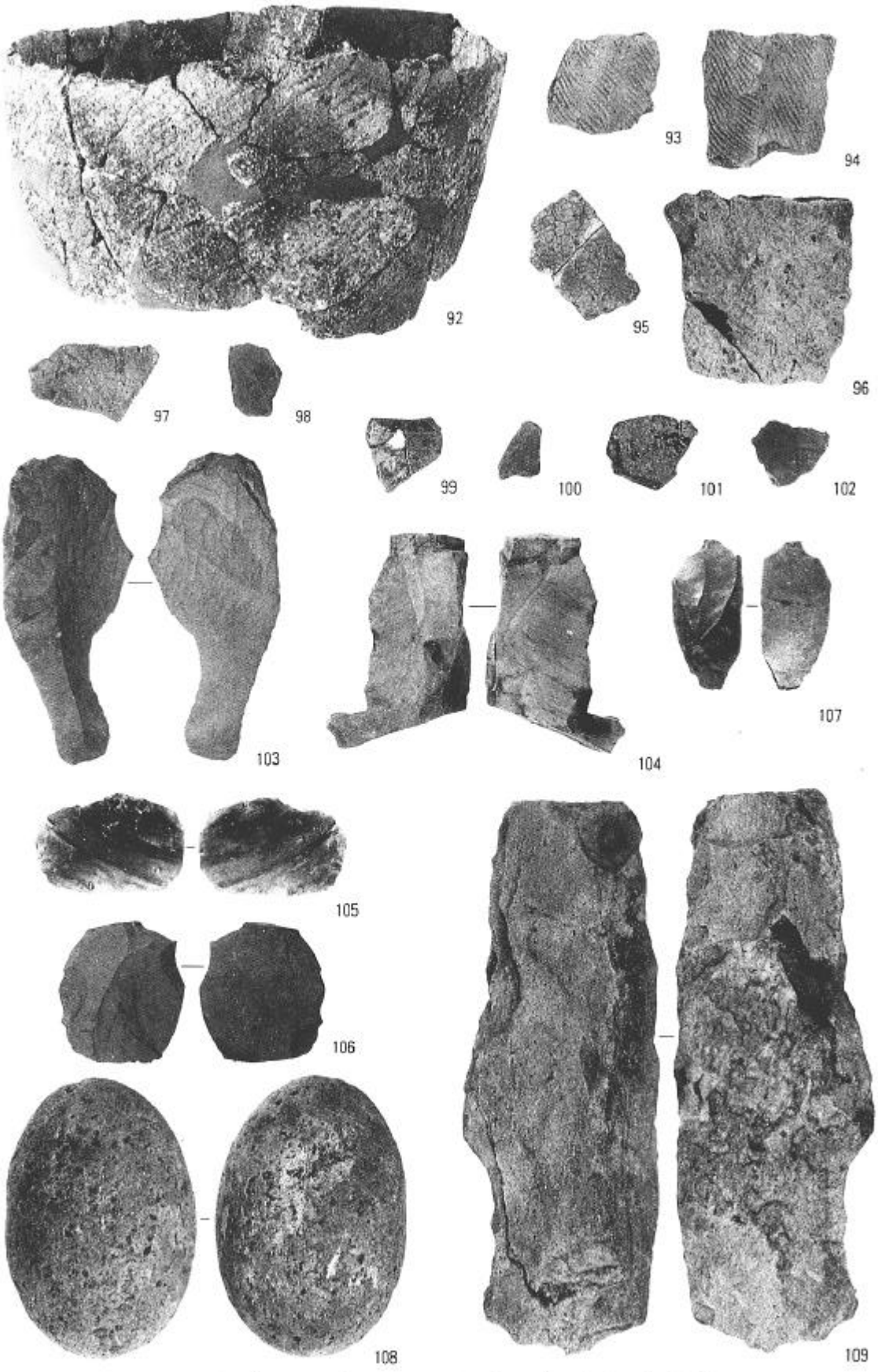
内面

36 内面

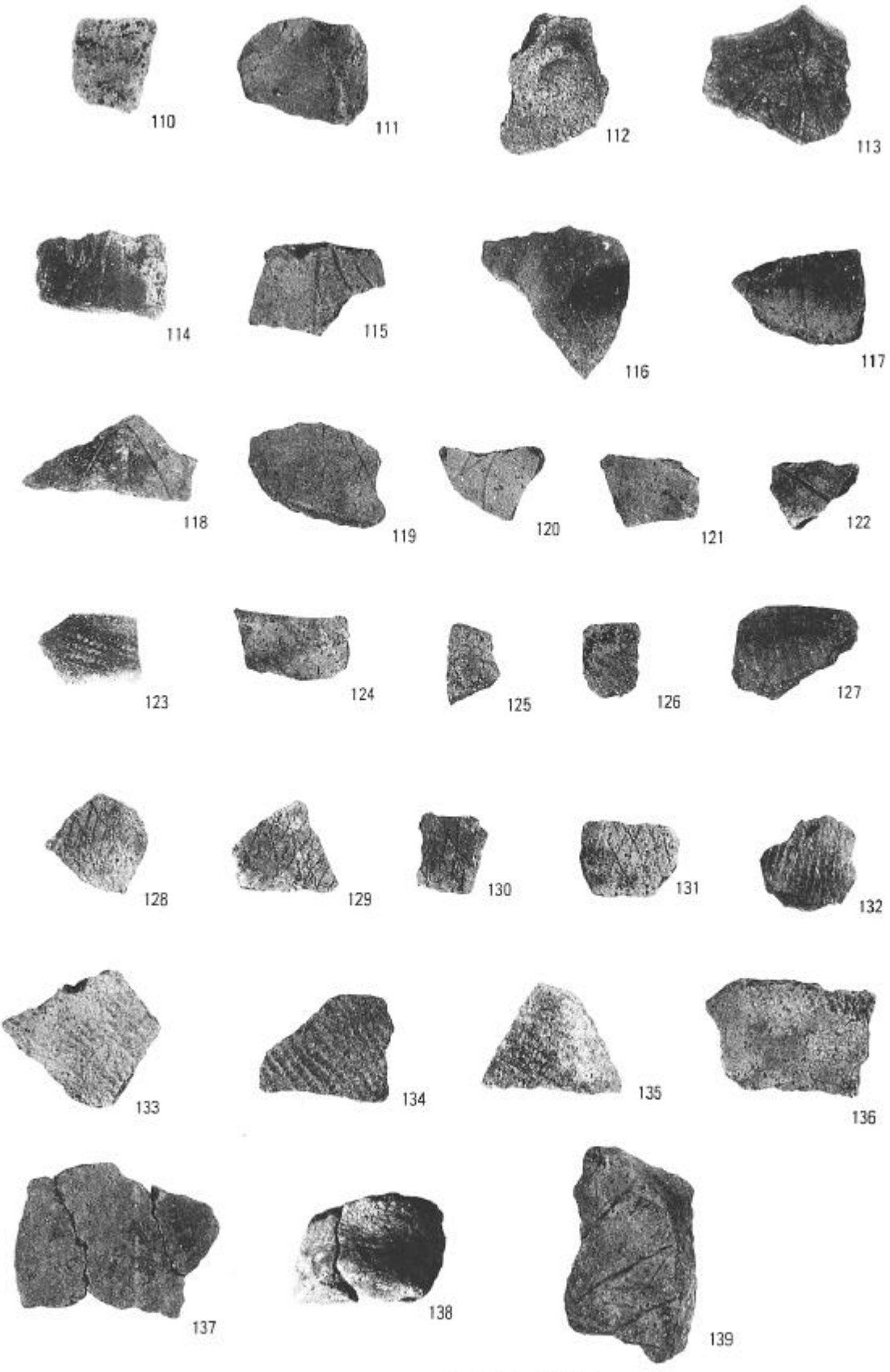
外面

底面

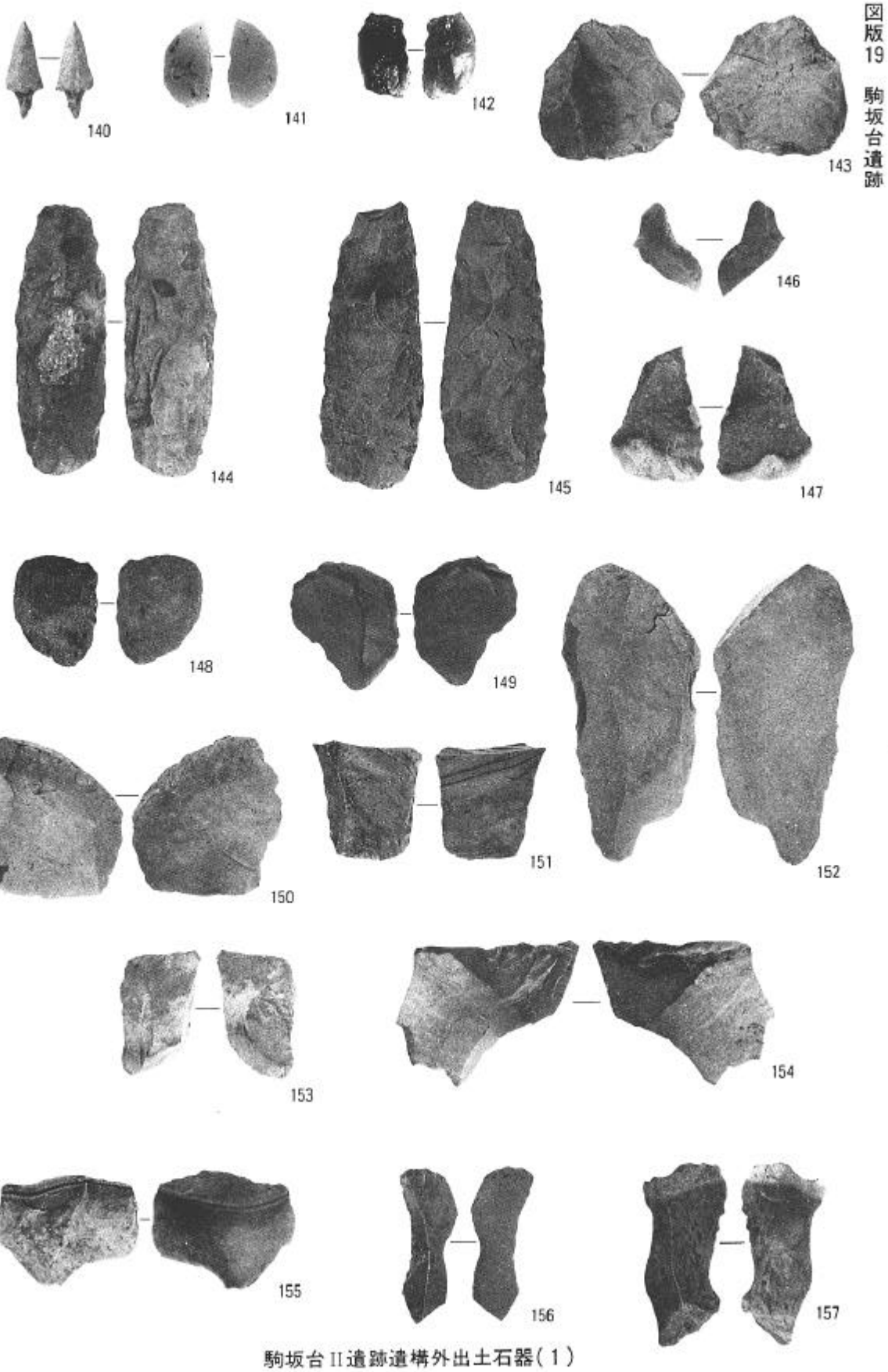
出土土器部分



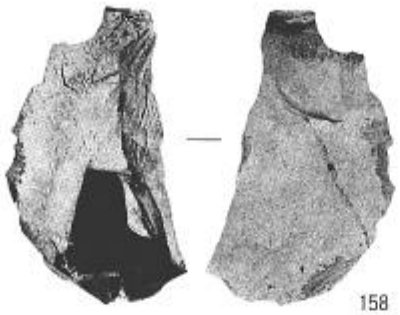
駒坂台II遺跡遺構内出土土器・駒坂台Ⅰ遺跡遺構外出土遺物



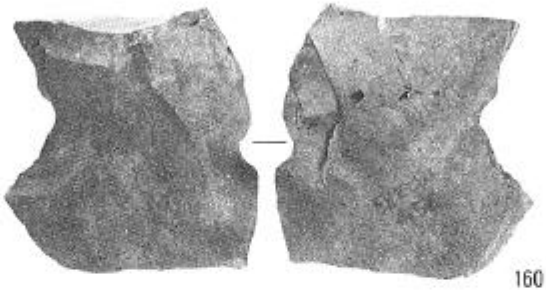
駒坂台II遺跡遺構外出土土器

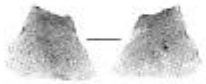


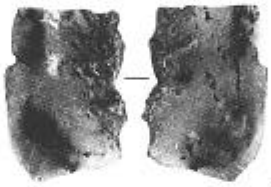
駒坂台II遺跡遺構外出土石器(1)


158

159


160

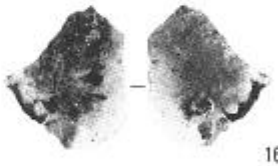

161

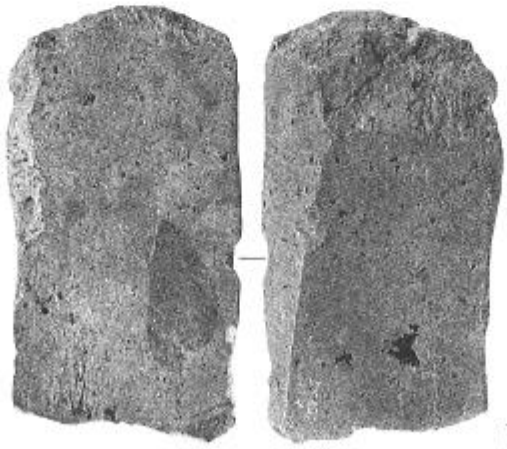

162

163

164

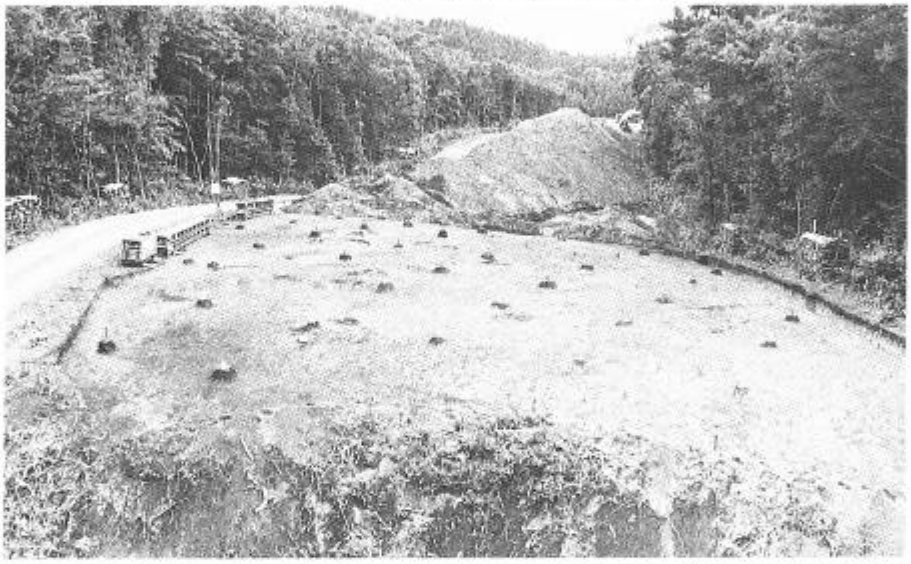
165


166


167

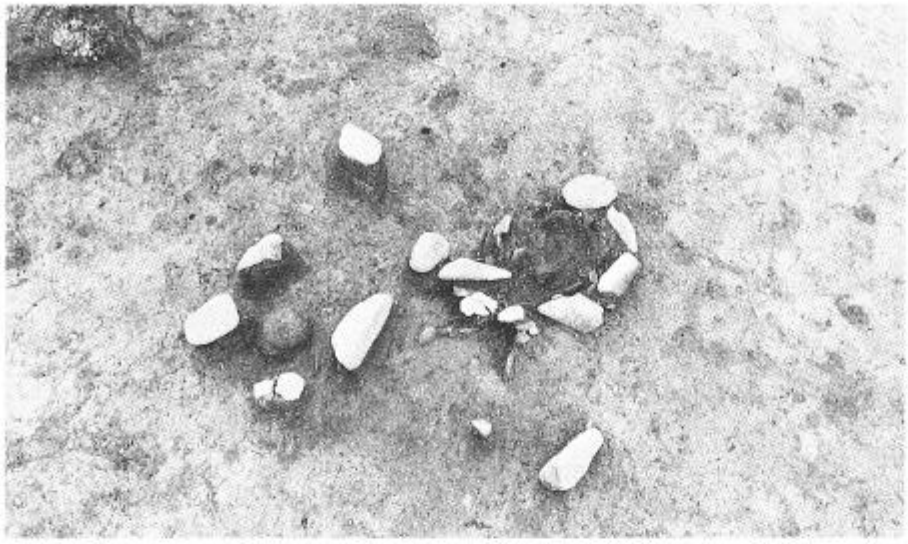
駒坂台II遺跡遺構外出土石器（２）

1.
駒坂台Ⅰ遺跡
調査後全景
（北→南）

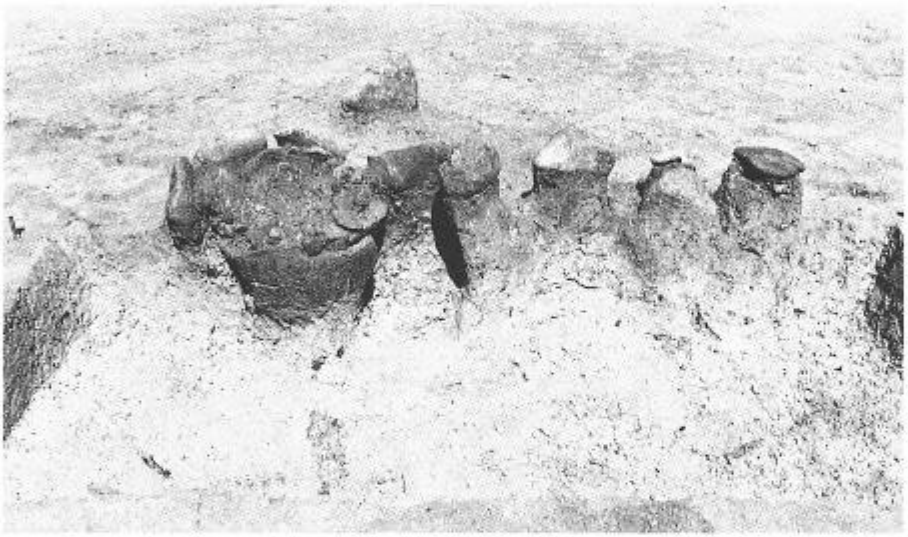


2.
駒坂台Ⅱ遺跡
調査後全景
（北→南）

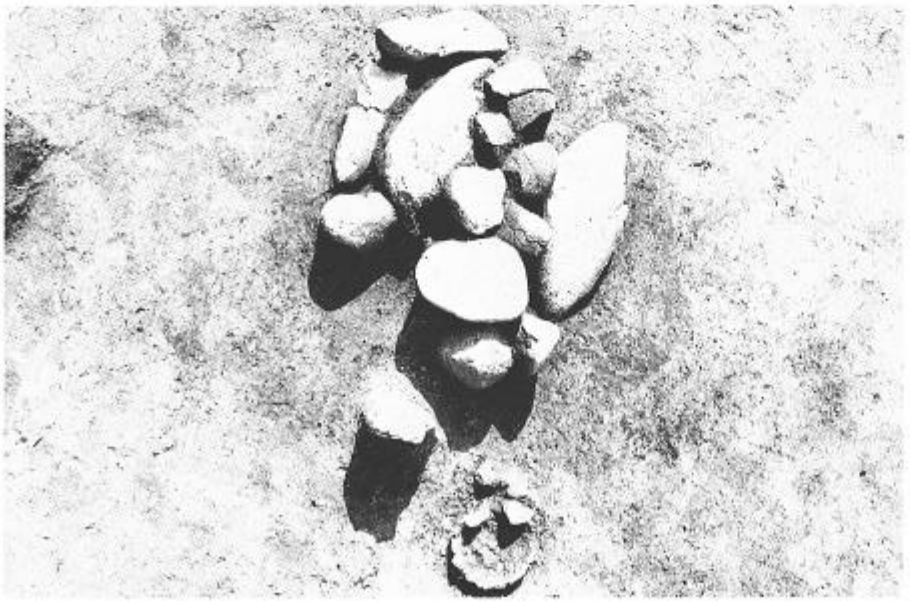
3.
駒坂台Ⅰ遺跡
SK01土坑



1.
駒坂台II遺跡
SQ01石組炉



2.
駒坂台II遺跡
SQ01石組炉断面
(西→東)



3.
駒坂台II遺跡
SQ02組石遺構